
変な人ですね　～そいつは、俺じゃない！～

今谷次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変な人ですね　　～そいつは、俺じゃない！～

【Nコード】

N3795S

【作者名】

今谷次郎

【あらすじ】

高校三年生の春。俺と佳代ちゃんは付き合うことになったんです。ただ、佳代ちゃんの変な人なんですよ。どう変なの？と問われると上手く説明できないけど、確実に天然さんです。

そして、彼女が見ている『俺』は、偽者の『俺』でした……。そんな佳代ちゃんと付き合い始めてからは、トラブルに巻き込まれながらも、楽しい生活でしたよ。

まあ、結局、佳代ちゃんとは別れてしまいますがね……。それでも、これだけは言えるんです。

俺の物語は、絶対に、ハッピーエンド。

序章 そいつは、俺じゃない！（前書き）

ちょっと、エロあります。

序章 そいつは、俺じゃない！

それは、桜の花びらに歓迎され入学式を終えた新入生が、そろそろ、新しい環境になれ始める時期だった。新鮮だったはずのやる気が、少しだけ熟れてくる頃。

そんな、四月下旬。

彼らと時期同じくして、高校三年生になった俺も、だれてくる頃。本当は、いつでも無気力なただけだね。それは、どうだって良い。

とにかく、四月下旬の日曜日。

十三時頃に部活動から帰ってきて、束の間のお昼寝を楽しんでいた時……。

不自然な気配に起こされた。

ベッド横から俺を見つめている女性二人に気がついたんだ。

一人は知っている。

チビで、無数の蛇みたいなベリーショートパーマの女。垂れ目なんてのは人類の神秘、遺伝的な原因なのだけど、こいつに至ってはやる気のなさが顔に出たに違いない。

俺の妹だ。

もう一人も知っている。

真直ぐに伸ばされた背筋は百七十センチメートル程のやや高身長を、更に、凜とした美しさで見せている。

無駄な装飾品の無い慎ましい黒のロングヘアには、癖毛や枝毛の一つも無い。

大きな瞳は全ての悪意すらも受け入れてくれる、包容力を見せている。

近い将来に環境省から絶滅危惧種に指定されるであろう、大和撫子がここにいます。

今年、不運にも、妹と友達になってしまった哀れな女性。

佳代ちゃんだ。

俺が目を覚ました事に気がついた妹は、気だるそうに、こう言った。雰囲気、低くないはずの妹の声を低く認識させる。

「あ、兄貴。ゲーム貸してよ」

なるほど。彼女たちは時間を持て余し、解決策として俺にゲームを借りに来た、と言ったところか。

「好きにしるよ」

俺は、まだまだ寝足りなかった。

少しの違和感を感じたものも、そのまま再び眠る事にした。

それから、二時間ほど後に目を覚ました。今度は、不自然な覚醒じゃない。充分に寝る事ができた満足感で一杯だった。いや、寝すぎてしまって、逆に身体が重いほどだ。

布団から這い出て、『お風呂にする？ ご飯にする？』と言う自問自答に、『寝る前にシャワーに入ったよ』と返答し、ご飯と言う選択肢を選んだのでリビングへ向かうため、ドアを開けようとした時に気がついた。

右手の甲に落書きがある。

嫌な予感と共に洗面所に向かうと、案の定、顔には沢山の落書きがあるではないか。俺は思わず一人で叫んでしまう。

「なんだよ！ これ！」

定番の泥棒髭や、『馬鹿兄貴』と言った見覚えのある憎らしい字のものまで……。

これは怒ってもいいよな？

普段は穏便な俺でも我慢できないぞ？

ただ、右手の甲の落書きだけは、様子が違っていた。

妹の丸みを帯び、全ての線が短くてやる気の無さが滲む、読みにくいグニャグニャ文字とは違う。

綺麗な凜とした字で、こう書いてあった。

『ずっと、あなたを見ていました』と。

俺は、ノックもせずに妹の部屋に乱入するのだけ……。

そこに広がる映像は、あまりに不自然だった。

妹の部屋が、無機質なスチール棚や、ベージュの単色カーテンや、ポスター一つ無い白い壁紙とかがメインの女つ気が無い部屋だ、と言うことではない。それならば、以前から知っている。

妹の姿はなく、緊張の表情で正座している佳代ちゃんだけの姿があったんだ。

佳代ちゃんは、突然乱入した俺に慌てることなく、落ち着いた様子で俺を見上げている。

二つ年下の妹の友達である佳代ちゃんは、やっぱり、二つ年下である事を意味している。

だけど、大和撫子な佳代ちゃんは、大人びて見える。

なにより、全ての行動がスローテンポで、口から出る言葉も、ゆつくりとした口調な訳で、どこか優しい雰囲気を作り出す。

興奮冷めならぬ俺は、不自然な状況を気にすることなく、ただ一言。

「あの馬鹿は、どこ行っただの？」

だけど、佳代ちゃんは、俺の質問に答えることはなかった。

スローな話リズムではあるのだけど、緊張感の伝わる一言。

「答えを聞かせてください！」

「答え？ いや、俺が質問しているんだよ。あの馬鹿はどこかに隠れているんでしょ？ 良いよ。あいつが怒っても俺が守ってあげるから、居場所を教えてくれないかな？」

それでも、彼女は俺の質問に答えてくれなかった。

「あなたらしいですね。あれじゃ、伝わらないか……」

そして佳代ちゃんは、立ち上がり、深々と頭を下げたのだが、それはスローモーションだった。

「あなたは、ずっと補欠にもなれない部活を、腐ることなく頑張っていたみたいですね。そんな努力家のあなたが好きです」

俺の頭は、状況を理解するのに精一杯だった。そんな、俺に気がつくことなく彼女は続ける。

「あなたは、自分より他人を優先していましたよね。そんな優しいあなたが好きです」

スローな話口調は、俺に考える時間を充分に与えているのだけけれど……。何も反応する事は出来なかった。

それでも、彼女は続ける。

「あなたは、やっと形に出来た私の気持ちにも気づいてくれない。だけど、そんな年上に見えない、純粋なあなたが好きです」

そして、彼女は深々と下げていた顔を上げ、『どんな結果でも大丈夫ですよ』なんて言葉が聞こえてきそうな澄み切った笑顔で、最後にこう付け足した。

「ずっと、あなたが好きでした。……答えを聞かせてください！」
今までは『妹の友達』としか意識していなかった佳代ちゃん。

その理由は簡単で、彼女が俺に不釣り合いなぐらい可愛いからだ。

これは本当に嬉しい出来事で、考える必要も無いぐらい簡単なクエスチョンなのだ。

だけど、一つだけ問題がある。

努力家で、優しく、純粋な俺が好きだった？

待ってくれ。そんな男は、この部屋に存在していないんだ。

そいつは、俺じゃない！

混乱の中、俺は即答した。

「これから、よろしくね。佳代ちゃん」

それと同時に、コンビニの袋をぶら下げた妹が、部屋に入ってきた。

「兄貴、起きたんだ。佳代ちゃん、告白終わった？」

ローテンションで無神経な妹は、とても乱暴な聞き方をする。

だけど佳代ちゃんは、そんな妹に動揺することなく、ゆっくりとした口調で。

「終わったよ。お付き合いする事になりました」

「やったじゃん！」

「ありがとう！」

スローとローな二人が、大声で喜びを表現し、手をつなぎ飛び跳ねる様は、不自然だった。

後悔しながらも呆けている俺に、妹は。

「それじゃ、兄貴。今日はもう良いよね。携帯電話番号とかメールアドレスは私が教えるから、夜に話しなよ」

「そうですね……。夜にメールくれると嬉しいです。二人きりで話すのは、恥ずかしいかもしれません」

顔を赤らめる佳代ちゃんは可愛かった。

「もう時間が無いよ。コンサートに遅れてしまわ」

と焦りながら、妹を急かす佳代ちゃんも可愛かった。

それでも、二人は急いでいるとは思えないスピードで俺を部屋の外に誘導し、ゆっくり時間をかけて出かける準備をして、七十分後に家を出た。

俺はメールの内容について考えながら、後悔した。

どうしよう。

佳代ちゃんが見ている人物は、明らかに俺じゃない。

魂の抜けたゾンビと化した俺は、リビングでボケーと時間を過ごす。

どうしよう！

そんな後悔を一時的にとは言え、打ち消してくれたのは、十九時頃にパートから帰ってきた母さんだった。

「ちよっと！ その顔どうしたの？」

それから俺は、貴重な日曜日の夜と言う素晴らしいはずの時間を、油性マジックとの格闘に費やす事になる。

洗面所には、リビングルームから、テレビニュースの音声が届く。年金支給か国営の無料老人ホームに入居するか、選べるようになった制度の是非について、討論していたり。

私立ならば高校までと、国公立なら大学までの、授業料が無料になる制度が可決されたそうだが、それについてどう思つか街頭インタビューをしていたり。

今年から総理大臣を、十五歳以上の立候補者から国民総選挙で選ぶ制度が実施される事について、専門家が話しをしていたり。

なにやら色々なニュースが聞こえてくる。

俺は激動の時代に生きているらしいのだが、それよりも、油性マジックと佳代ちゃんの問題の方が大きかった。

この日、佳代ちゃんとのメールは出来なかった。

一章 努力家で優しくて純粋な俺？

学生と言う身分においてメインイベントであるはずの授業と言うのは、実はオマケに過ぎなくて、休憩時間に友達と過ごす時間や、部活動の時間、あるいは学校外でぶらぶらとアミューズメント施設で時間を潰したり、バイトに精を出す時間こそがメインなのだろう。少なくとも俺はそうだ。

そんな俺が、今は何をしているかというと、体育館のステージの上であぐらをかき、自分の足を台に頼杖をつき、女子バレー部の練習を眺めている。

どうもこれじゃ気に入らないらしい、スポーツマンらしいスポーツ刈りの彼に追加の説明をする事にしよう。

俺の所属はバドミントン部なのだが、この学校のバドミントン部は女子がない。どちらかと言うと女子のスポーツってイメージが強いのに、この学校の七不思議の一つに数えても良いよな。

バドミントン部に女子がないのなら、女子バレー部を見るしかないまい。

と言う事で、俺は女子バレー部を眺めている。

それでも、理解できない筋肉質な彼に、説明を続けなくてはいけないらしい。

俺たちは月曜日と金曜日の放課後、それと日曜日の午前に、半分だけど体育館を使える。他の平日は、廊下で素振りやフットワーク練習、体力トレーニングをしているんだ。

そして、俺たちが体育館を使用できる日と言うのは、女子バレー部が体育館を使う日でもある。

正確に言えば、全国大会常連の優秀な女子バレー部は、毎日体育館を使えるのだけど、それはどうでも良い情報だ。

大事なのは、そんな理由から、俺は女子バレー部を眺めているという事だ。

ここまで説明しても、薄黒く日焼けしている彼は理解できないらしい。そもそも、バドミントンは室内スポーツのはずなのに、日焼けしているのは不自然だ、なんて俺のツッコミはどうでも良い。彼に追加の説明をしなければいけないさそうだ。

俺が何で部活をやっているかと言うと、内申書のためである。ついでに言うとな筋トレのモチベーションを上げるためだ。やっぱり男の子はムキムキなマッチョに変わっていく自分が好きなのさ。とは言え、一人で筋トレのモチベーションを維持するのは難しい。

そう言う訳で、全く持って、俺はバドミントンと言う競技には興味が無い。

それでは何故、この部活を選んだかと言うと弱小だからだ。やる気の無い俺に文句を言いつつ、受け入れてくれる。

そんな理由から、俺は女子バレー部を眺める事になっているんだ。わかったかな？

「高校最後の大会ぐらい、出ようぜ？」

彼は高すぎず低すぎない心地よい声で言う。

毎度、何度も、説明しても理解してくれないバドミントン部部长、つまりは羽場 健太^{はなば けんた}は、まだ諦められないらしい。

根性あるよな。

ただ残念な事に、身長は小さめだけど……。

ちなみに俺の身長は百八十五をちょっと超えているので、身長だけは部長に勝つことが出来る。

身体的特徴しか勝てないのは、情けない事だ。俺の努力が絡んでいない。俺が駄目人間なのは、わかりきっているので、そんな事はどうでも良い。

俺は部長に説明を続ける事にしよう。

だから、バドミントンの団体戦には五人のメンバーが必要だ。バドミントン部には四人のメンバーしかないだろう？

どっちにしろ、団体戦は出場できない。

俺が頑張る必要も無い。個人戦に出る気も無い。

だから、俺は女の子を眺めていたいの！ 高校生にとって、こう言う癒しの時間はスゲー大事なの！

「わかったよ。それでも、俺は待つてるからな！」

部長は最後に一言だけ残して、スポーツマンらしい爽やかな笑顔も残して、練習に戻っていった。卒業していった元先輩たちや、顧問の教師も諦めたと言うのに、偉い奴だ。

そんな彼の気持ちに応えない俺は、優しいはずもない。

佳代ちゃんは、努力家で優しくて純粋な男に恋をしている。それなのに、俺と付き合うことになった。

見えない黒い渦が、胃の辺りで暴れている。なんか落ち着かない。

……たまには、練習しようかな。

と俺らしくないことを思った時、アタック練習の列に並ぶ、女子バレー部員と目が合った。

バレー部員と言えば、ショートカットだろ？ 少なくとも、俺の学校では全員ショートカットなんだ。

そして、佳代ちゃんより少し背の高い彼女は、大きな猫目をしている。ちよつと可愛いかもしれない。しかも、巨乳だ。

おおかわ さと
大川 里。俺のクラスメイトだ。

大川は右目下に右人差し指を置き、口を大きく開けて舌を出していた。つまりは『あつかんべー』だ。

俺の記憶に、あつかんべーをする人間というのは、大川を除いて他にいない。

そんな彼女はやっぱり天然だ。どこかおかしい人間だ。はつきり言えば馬鹿だ。

だけど、真面目な奴でもある。

俺の反応を待つことなく、真剣な表情に戻り、アタックの練習に戻っていった。それはどうでも良い事だ。

結局俺は、部活の練習に参加することにした。

ステージから飛び降り、体育館倉庫から備品のラケットを持ってくる。

そして。

「なあ。この握り方でいいのか？」

と素振りしながら先輩の練習を眺めている、一年生に聞いてみた。「えっと、先輩は初心者ですよ？　それは、僕もですけど……。多分、初心者は『イースタングリップ』と言う握り方が良いかもしれませんが。基本らしいですよ。ラケットを縦にして握ってください。ラケットの側面が刃、そんな剣を握るイメージかな。それが、イースタングリップです」

「こんな感じ？」

「フレームじゃなくて、グリップ部分を握ってくださいよ！」

初心者だからと、小回りが利くように、短くラケットを握ったら怒られてしまった。

更に「バドミントブレード！　ジャキン！」と言ったら、もつと怒られた。

それでも、一年生はラケットの握り方だけではなく、熱心に素振りのフォームまで教えてくれる。

それに気づいた、部長が嬉しそうに俺を見ていた。

副部長のスマッシュを失敗することなく拾い続ける部長は、横目で俺を見てくるのだけど、ニヤニヤしている様も爽やかなのは、少しム力つく。

その部長は片付けの時間、爽やかなスポーツマンとは思えない、腹黒さを見せた。

「練習してくれたんだな！　嬉しいよ。実は、来月の高体連の地区予選にさ、お前の名前も登録してたんだ」

と言いながら、嬉しそうに笑いながら、コートから鉄柱を抜いている。

おいおい。

「俺は大会に出るとは言って無いぞ？」

「考えてみるよ？　登録しないと、登録したのに試合に出ないの

では、内申書的に違いは無いのか？」

部長は軽い脅迫じみた事を言ってくる。

多分、部活に所属さえしていれば『部活動を三年間頑張ってた』なんて書いてもらえと思うのだけど、残念ながら、俺は内申書の全貌を知らない。

「部長さん。お前は将来は出世するタイプだよ。良い意味でも、悪い意味でもな」

俺は嫌味を言いつつ、どうやって大会をサボるか考えていた。

教師にとっても生徒が進路未定で卒業する状況は望まないとはいえずだ、と思う事にした。

だから、内申書の事なんて心配する必要も無い。大会だって頑張る必要も無い。

それでもやつぱり、部長はスポーツマンらしい笑顔で。

「信じているからな」

そう言いながら、コートネットを、熟練の職人技のような見とれる技術で畳んでいた。その様は見事としか言いようが無い。

部長の職人技を見ながら思った。

部長は今年も地区予選の四回戦ぐらいで負けて、県大会には出られないだろう。それでも努力と言うやつは、ちゃんと形になって世界に残るのかもな。

窓から差し込むオレンジ色の光はどこか青春なんてイメージで、それに照らされるバドミントン部員たちもなんか青春高校生って感じで、俺たちと入れ替わりに体育館を使うバスケット部員たちもフレッシュな若者って感じがして、まだ練習を続けるらしい女子バレー部員も何となく輝かしくて、俺だけは仲間ハズレだった。

今日俺が女子を見て心を癒す大切な時間を、練習に費やしてしまったのは、明らかに佳代ちゃんが原因だ。

俺の彼女が誰よりも可愛いからなのか、偽者の俺に恋をした彼女への罪悪感からなのか、俺は偽者になろうと思ってしまったのか、

それは俺にもわからない。

それでも、佳代ちゃんが原因なのだけは間違いない。

そんな思考は、反復するばかりループするばかりで、あまり広がることなく、結局解決には至らなかった。

学校を出て少し歩き、バスを一つ電車を一つ使い、十五分ほど歩く事で、自宅マンションに到着した。

周りの建物の高さと比べて、二十階建てのマンションは大きい。

引越してきたばかりの頃、つまりは五年前には『こんな四角い狭い建物に、二百ほどの生活があるんだ』と思うと、ちょっとした詩人になった気がしたのだけど。それはどうでも良い事で。

大事ななのは『なんか見たことの無い男が困っている』と言う事なんだ。

マンション敷地の境界を知らせる外門前では、中学生が困っていた。いや、彼が来ている制服は妹の学校のだな。それならば、高校生か。

彼は前へ六歩ぐらい歩き、振り返り、また六歩ぐらい歩く。そして顔は、X軸にもY軸にも忙しくなく動いている。

つまりは、拳動不審だった。

細いシルエットは、少し猫背で長身だった。真面目そうな坊ちゃんヘアにメガネをしている。

そんな彼は、大人しそうで弱々しくて、それでも勉強は出来るのだろうか。

なんて、見た目だけで彼の性格を想像してみる。そして何故に彼が、拳動不審なのかも想像してみるのだけど……。

どうして人間って生き物は、見た目だけで、ここまで様々な情報を推測するのだろうか？　なんて事はどうでも良い事で。

彼は鍵を忘れて、共有玄関のオートロックから先に進めないのだからうな、と言う俺の想像はちよつと大事な事で。

重要なのは『なんか、俺、彼に、めちやくちゃ睨まれてるんですけど』と言う事である。

訳がわからない。

人間って奴は理解できない状況に対して、納得できる理由を想像する生き物であり、俺も人間であると思われるので、なんとか理由を探すのだけど、そんな俺が出した答えは『鍵を忘れてマンションに入れないよ』。せめて部屋の前で家族を待てたら気が楽なのに……。困ったな。あ！ やっと同じマンションの住人が登場したけど……、同年代だから声かけの恥ずかしいよ。頑張れ俺！』と言う彼の心の声だった。

内向的な外見の彼は、やっぱり照れ屋なのだろう。そして、俺に声をかけようとするのだが、緊張で目つきが悪くなっているんだ。

俺は彼の存在に気がつかないフリをして、心の中で力一杯『共有玄関なら開けてやるぞ』、声かけろ、頑張れ』なんて応援して、玄関ロビーを通り過ぎ、エレベーターに乗り込んだ。

彼は俺を睨みただけだった。

ちよつとだけ、悪い事をした気分になるのだが、反省する暇も無いんだ。俺には重大な任務がある。

夕食を食べながら、第七十三回佳代ちゃんに送る初メールについての脳内会議を開く。

「どんな、メールを送ろうか？」

「やっぱり、正直に言わないと……」

「いやいや、佳代ちゃんには勝手に勘違いをしたんだ。俺たちは肯定も否定もしていない。それで良いじゃないか」

「駄目だよ！ あんな、素敵な女性を騙すなんて。彼女の勘違いに気がついてるのに、知らないフリをするのは騙しているのと同じだ！」

「じゃあ、今からでも断る？」

「それだけは、絶対に駄目だ！」

「じゃあ、彼女の理想に近づくよう頑張る？」

「それは、不可能だ！」

こんな感じ。

結局、脳内会議は何の結論も出す事はなかった。

夕食を食べ終わり部屋に戻る途中、妹に「どうでも良いけど、昨日佳代ちゃんにメールしなかったでしょ」と怒られたので、テレパシーで佳代ちゃんに謝罪文を送りつつ、もう少しだけ悩む事にした。部屋に戻り、携帯電話を取り出して、一時間悩んで、ジュースを飲んで一息し、もう一時間悩んで、やっと佳代ちゃんにメール出来た。

初めて彼女へ送るメール。

それは結局、嘘だった。

『俺の努力が認められたんだ。ついに試合に出られるよ』と言う偽りのメール。

佳代ちゃんの返信は、俺の予想通りにゆったりしていて、三十分更新で送られてくる。

流石に時間掛かりすぎだよ。

俺は生殺し状態で、長い待ち時間を過ごし、いつのまにか、鍵を忘れて困っていた男子中学生を救ったと言う嘘もついた。彼は高校生だったか。それは、どうでも良い事だ。

俺は昨日の『佳代ちゃんの告白』を否定しなかった事に重ねて、今日も嘘をついてしまった。

どうしよう。

気がつけば、寝る直前には、『土曜日の体育館デート』まで話は膨らんでいた。俺の練習に付き合ってくれるらしい。

そうだった。佳代ちゃんは中学生の時、バドミントン部だったと聞いた事がある。メールから得た情報だと、高校でもバドミントン部らしい。

俺は中学生時代は卓球部で、今と変わらず、サボりながら三年間を過ごした訳だけど、それはどうでも良い事で。

本当にどうしよう。

俺は抑えきれない不安な気持ちから、ベッドに広がるマットの海に、叫び声を上げながらダイビングした。

数分後、下の階の住人が怒りの表情で訪ねてきたのは、申し訳ない事実だ。

それから木曜日まで、俺は部活で素振りを頑張ってしまった。

金曜日、つまりは体育館を使える日には、部長にサーブを教えてもらった。突然練習をする俺に、事情を深く聞くことなく、部長は丁寧に教えてくれる。

俺のサーブは半分ぐらいの確率で、フォルトにならない程度には上達していた。ちなみに『サーブスコートと言う、規定エリアにサーブを打ち込まないといけない』と言う基本ルールを理解したのもこの時だった。

それは、あまり役に立たなさそうな事実だ。

昼休みには「君さ、最近練習しているよねっ！ 感心感心っ！」と猫目の女子バレー部員の大川に褒めてもらった事や。

部活の時間には「本当、お前が頑張ってくれると部活の空気が変わるよ！ 助かるよ！」と部長に褒めてもらった事は嬉しい事実なのだけど。

いや、それよりさ、どうしよう。

明日は佳代ちゃんとの体育館デートだ。

その夜、三十分毎に送られてくる佳代ちゃんからのメールには、『やっぱり、努力家ですね。あなたらしいですよ』なんて文が必ず入っていた。

翌日。初デートの日。雲ひとつだけある気持ちの良い晴れ。俺の心は今にも雨が降りそうな曇り。

どうしよう。絶体絶命のピンチだ。

佳代ちゃんとの待ち合わせ場所、それは体育館前だった。

県立体育館は、体育館らしい四角い建物だけど、学校のそれより四倍ほど大きく、高さも六階建てぐらいある四階建てだった。大きい部類の体育館だと思う。

四角い単調な構造とは裏腹に、モダンな雰囲気の外壁は新築を連想させ、やっぱり去年に建て直したばかりの体育館だった。

立派な体育館を持つ、うちの県は儲かっているのかな。それなら、知事は悪い人なんだろうな。

なんて俺の想像は、どうでも良い事だ。

体育館の入り口から、少し離れた駐輪場に自転車を止め、腕時計を見ると、約束の九時より三十分早かった。

それでも、俺が体育館に到着した時には、予想を大きく裏切り、既に佳代ちゃんは待っていた。

『スローテンポ』と『遅刻』には因果関係が無いらしい。それでも『大和撫子』と『慎み深く真面目な性格』には因果関係があるらしい。

待たせてしまって、ゴメンなさい。

白が基調の春らしいワンピースは洋服なのだけど、それを着こなす佳代ちゃんは、やっぱり大和撫子だった。

大きなドラムバッグを地面に置いて、壁に寄りかかり、何か幸せな想像をしているに違いない面持ちで空を眺める佳代ちゃんに、俺は声をかける。

「佳代ちゃん。ゴメンね。待たせちゃったでしょ」

俺に気づいた佳代ちゃんの顔には笑顔が宿る。美しいです。可愛いです。顔が熱いです。

「おはようございます。待ってなんかいませんよ。私も五分ほど前に来たところです」

佳代ちゃんは『待つてない』なんて言うけど、それは嘘だ。

何故なら、俺は駐輪場から十五分間も、佳代ちゃんに見とれてしまった訳なのだから。

俺の胸が痛んでいる事を知らない佳代ちゃんは。

「さあ、あなた。まだ運動場には入れないけど、受付は開始しますよ。行きましょう!」

と俺の手を握る。

俺の心臓は最速設定のメトロノームの如く忙しく動いている。でも、今に限って言えば、嘘がばれる不安ではなく、手を握られた喜びで混乱しているらしい。

俺は受付のおじさんに高校生二人分の入場券をもらう。中学生までは無料なのに、高校生になると三百円かかるのは、ちょっと不満だ。

清く若いスポーツマンを応援しても良いのに、と思うのだけど、俺はそんな高尚な存在とは違うので文句は言えないか。

俺は千円札をおじさんに渡し、佳代ちゃんが俺に三百円を渡す。

「駄目だよ。今日は俺の練習に付き合ってもらうんだから。それに、年上で男の俺がデート代ぐらい出すって」

しかし、佳代ちゃんはゆっくり頑固に否定した。

「いいえ。今は男女平等の時代なんですよ。それに、奢って頂くのは、あなたと結婚してからと決めていますから」

口を尖らせ、睨むような目つきで見てくる、佳代ちゃんも可愛かった。

それよりも、俺はプロポーズらしき発言に、戸惑い、混乱し、慌てふためき、「え、えつとね」としか言えずに三百円を受け取ってしまった。

落ち着け。

佳代ちゃんは、落ち着く訳も無い俺の手を引っ張り、休憩室のベンチまで移動し、「着替えてきますね」と言って女子更衣室に消えていった。

変えのTシャツしか持って来なかった俺は、GパンにTシャツで運動する事になる。どこか、真面目な態度が足りないよな。

彼女は気づいていないのだろうか？

俺は気を落ち着かせるために、即席イメージトレーニングをしながら、休憩室を眺める。

新築でモダンな雰囲気の体育館の中身も、やっぱり近代的だった。目の前には、バランスボールの上下を切り取ったような木の台の

上に、バランス悪く、大きな板が載せられた机がある。それを取り囲む四つのベンチは、本当に取り囲むように緩いカーブを描いていた。

そのベンチは様々な年代の人が使うだろうと考慮してか、高さこそ低く設定してあるが、背もたれもなく、一センチ幅の細い木の棒でしましま模様を作っているため、座り心地は余り良くない。と言うか非常に疲れる作りだった。

真上を見上げれば、四階まで続く高い天井があり、その天井には大きな天窓が設置されている。プラネタリウムでも作る計画でもあったのだろうか？　そして、この体育館の一階と三階の高さは通常の建物の二倍程あるので、天窓までは六階分の高さがあるのだろうか。その天井までの空間には、渡り廊下で作られた三階分のバツ印が存在している。

受付から見て、運動場と対面している壁には、更衣室やらトイレやらが設置されており、階段もこちら側の壁際に設置されている。その階段がまた、螺旋階段でオシャレだった。

空間を非効率に使うこの施設、使いにくい調度品の数々。それらは、お金が掛かっている証拠にも思えた。こりゃ、絶対、うちの県知事は極悪人だな。

ふ。人って生き物は、現実逃避の瞬間、必要の無い情報が必要以上に取り入れる生き物だよな。体育館の構造なんて分析している場合じゃない。知事がどんな人間かだって重要じゃない。

俺はアンバランスな机に肘を付き、手の平で両目に届く光を遮断して、即席イメージトレーニングに集中する事にした。

そして……。

少しずつ休憩室にも人が増え、俺は受付のおじさんにラケットを借りるのを忘れた事に気がつき、慌ててレンタル手続きをしに受付に向かう。

実は図々しい受付のおっちゃんに「可愛い彼女だね」なんて有難い言葉も頂いて、暫く休憩室で待っていると、館内放送で『九時

になったから運動場を使ってもいいよ』と言うお知らせが流れた。さらに、十五分ほど休憩室のベンチで待っていると、佳代ちゃんが戻ってきた。

佳代ちゃんが初めて俺に見せる、装飾品付きの髪はポニーテールだった。前髪も後ろに束ねられており、額も耳も見せる佳代ちゃんは新鮮で可愛かった。

俺の鼓動は、やっぱり忙しく動いている。

見とれている俺に気づかない佳代ちゃんは、またも俺の手を握り、ゆっくり引っぱりながら、三階にある運動場へと入場した。

運動場の入り口はスライド式ドアで、取っ手は床から天井まで届く親切設計だったのだけど、大きい建物の割りに小さいドアは不親切だった。俺は壁にぶつかりそうになる。

三階の運動場は、卓球とバドミントン専用らしい。

八面あるバドミントンコートは二面の空きがあり、二五台ある卓球台周辺には四組の待機者がいる。バドミントンってマイナーなのかな。そんな俺の感想はどうでも良くて。

ついにこの時が来たのか……。

俺は最後の足掻きで、五回の即席イメージトレーニングをして、サーブを打つ。

「佳代ちゃん。いくよー!」

「はい!」

真剣な表情と声で、構えている佳代ちゃんも美しい。

俺のサーブは、なんとか、彼女のコートに入った。

佳代ちゃんはシャトル、つまりは他の球技で言うボールを、大きく高く打ち上げてくれる。一番打ち返しやすい軌道だ。

そして、俺は初球から空振りした。

「ドンマイですよ! あなた!」

佳代ちゃんは励ましてくれる。佳代ちゃんの笑顔は、食べるものに困っていてもお地蔵さんに傘をあげる優しさを忘れない、老夫婦の笑顔と同じに違いない。無限大の優しさがあるに違いない。

この日、佳代ちゃんは、高くて大きい軌道の返球ばかりだった。それでも、俺たちのラリーは四回ほどで終了する。殆どの理由は俺が空振りするからで、さらに時々、俺の打ち返したシャトルがネットに衝突するためだ。

……もう、嘘はバレタよな。

俺は十五回目の、ネットに打ち落とされたシャトルを拾う際、佳代ちゃんに声をかける。

「ゴメン。ビックリしたでしょ？」

佳代ちゃんも、小走りでネットに近づき。

「ええ」

とだけ応える。彼女は俯いていて、表情は確認できない。

「これじゃ、ずっと補欠にもなれないはずだよな」

「そうですね」

彼女は怒っているのだろうか。落ち込んでいるのだろうか。

短い言葉しか返してくれない。

俺は、佳代ちゃんの綺麗な頭に言葉を投げかける。

「もちろん、怒っているよね？ ゴメンね」

「あなたは、そう思うのですか？」

怒っている女性の「ちゃんと、わかっているの？」なんて台詞は有名な常套句で、怒りのメーターが限界まで振り切っている事を示している、と俺は思う。

それもそうだ。

俺は純粹で優しい彼女を騙していた。

「うん。思っているよ。これから、佳代ちゃんに何をされても怒らない。怒れるはずも無い。本当に反省しているんだ」

だから、殴って良いよって事か？

男の別れ台詞としては、反省の色が見えないよな。

だけど、俺に思いつくのは、こんなにもみつとも無い謝罪だけだ。「私は怒って無いつもりです。それでも、本当に？ 本当に何をしてもいいのですね？」

佳代ちゃんの声は微かに震えていた。

そうか……。優しい佳代ちゃんにとって、激しい憎悪と言うのは初めての感情なのかもしれない。

その感情が怒りと言うものだよ。俺のせいで辛い思いをさせてごめんね。

俺も覚悟を決めなくてはいけない。

「ああ。平手なんて甘い事考えなくていいよ。肘でも膝でも使ってさ。本当に気が済むまで良いよ」

多分こんな助言しないと、優しい佳代ちゃんは、平手一発で満足し、家に帰り、和室の部屋には不釣合いながらも可愛く溶け込んでいる、ピンクの枕カバーやお気に入りのティベアを涙で濡らすだろう。

いや、俺は佳代ちゃんの部屋を見たことが無いのだけど、そうに違いない。

俺に出来る事は小さな事だけ。みつとも無い方法だけだった。それでも、彼女が少しでも満足する形で、体育館を出て欲しかった。

人の想いにもエネルギーがあるとすれば、運動エネルギーに転換する事で、佳代ちゃんの底なしの絶望に、底を与える事ぐらいは、無力で卑怯な俺にも出来るかもしれない……。

佳代ちゃんの下を見たまま、ネットを挟んで立っている俺たちには距離があるのに、俺の耳に届くような深呼吸をした。

そして、ゆっくりとネットの下をくぐり、俺の目の前に立つ。その動き一つ一つには、弓道の作法のような力強い美しさが見えた。覚悟が見えた。

まだ俺に顔を見せてくれない。

俺もこれから訪れる痛みに耐えるため、深く息を吸い込む。

佳代ちゃんが何とか出した言葉は、怒りに震えた声だった。

「目を瞑ってください」

優しい佳代ちゃんが俺の薄汚い提案に乗るための覚悟、それは彼女にとって告白の時と同様に大きい覚悟であろう。

俺は痛みに耐えるため目を瞑る。

視界が闇に包まれると、今まで見えなかったものが見えてくるものだ。

人を殴るなんて事は、佳代ちゃんにとって初体験に違いない。

俺はなんて酷な事をさせているんだ。

なんで、他の方法が思いつかなかったんだよ。

俺は馬鹿だ。

「少し、膝を曲げてください。顔に届きません」

その佳代ちゃんの言葉は、声からも決意が見えるものだった。俺は佳代ちゃんの言葉に従う。

佳代ちゃん。ゴメンね。

そして。

俺の身体全体が柔らかい感触を認識し、俺の口が温かく湿った感触を認識し、驚いた俺の目は情報を取得するため開かれた。

佳代ちゃんは俺を抱擁し、口付けを交し、顔は強張っていて赤く染まっていた。

彼女の目は閉じられている。

情報を理解できてない俺の頭は、嘘をつくことだけは思いつくことが出来て、再び目を瞑る^{つぶ}。

良くわからないけど、それでも、この幸せだけは噛み締めようと思った。

多分、これが最後なのだから……。

約一分後、十二時を知らせるチャイムと、『運動場整備のため休憩室に移動しろ』と言うアナウンスのせいで、幸せな時間は終わった。

「もういいですよ。目を開けてください」

佳代ちゃんの言葉を聞き取り、俺が再び目を開けると、なんか静かだなと思ったら、周りの連中は俺たちを凝視しているし。

卓球していたおばあちゃんも、家族連れの四人ファミリーも、みんな俺たちを見ている。

まだ顔を見せてくれない佳代ちゃんは、無言で俺の手を取り、強引にゆつくりと、休憩室まで引っ張っていく。俺の肘がドアにぶつかる。

三階の休憩室は、一階から天窓まで続く真ん中の空間を囲むように、S字カーブのベンチがいくつも設置されていた。やっぱり、座り心地は悪かった。

俺たちは空いているベンチに座る。

佳代ちゃんは俺の手を離し、膝の上で指を組んでいた。背筋は真直ぐに伸ばされているものも、顔は下を向いたままだ。

だけど、先ほどとは違い、横から見ると少しだけ顔を見ることが出来る。

佳代ちゃんの顔は、どこにも地の色を残していない桜色だった。その表情は戦へ行った夫の帰りを待つ、戦国武将の妻のものと同じに思える。揺ぎ無い力強い信念の裏に、隠された不安が見えるものだった。

それから、館内放送で運動場の使用許可が下り、さらに二十分経つても、俺たちは無言のままベンチに座っている。

佳代ちゃんは俯いたままだ。

あまりに不可解な現状を、俺の頭はなんとか理論付けた。

佳代ちゃんにとって愛すべき人物はこの世界に存在していなくて、それでも目の前にいる俺は存在している。

俺は偽者だった事を知るのだけど、やっぱり目の前の俺は、佳代ちゃんから見ると理想の人物にしか見えない。

佳代ちゃんの頭は想像を絶するパニック状態に陥ったのだろう。

そのショックは、優しい佳代ちゃんには、怒りに変換される事なく、悲しみだけが心を支配してしまう。

純粋な彼女は、偽者の関係を終わらせるのに、偽者の幸せな思い出で幕を閉じようとしたんだ。

俺はこんなにも純粋で可憐で優しい彼女を、深く傷付けた。

純白な半紙のような綺麗な佳代ちゃんの心を、自分本位の気持ち

から、どす黒いスプレー缶で無造作に汚しまくったんだ。墨すら使わなかった。

俺は卑怯な人間だ。

そして、長い時間、言葉を発する事が出来なくなる程に佳代ちゃんを傷付けた。それでも優しい彼女は俺を恨むことなく、気丈にも自らの心の中で解決しようとしているんだ。

俺は、なんて馬鹿な男なんだ！

俺が妹の部屋で告白された時、断れば良かったんだよ。

そうすれば、少なくとも、これ程までに彼女を傷付ける事はなかった。

それから、さらに十分が経った。

休憩室に移動してから、沈黙のまま座り続けて三十分後の事だ。ついに佳代ちゃんが口を開いた。

「あなたは、補欠になれなかっただけじゃないですよね？」

その通りだ。

努力家な俺、だけが嘘じゃない。

優しくも無いし純粹でもない。

「うん。……黙っていて、ゴメンね」

「私こそ、気づかなくてゴメンなさい。人から聞いたお話だけで想像してしまったのです……」

「違うよ。告白してもらった時、ちゃんと言えなかった俺が悪い」

「違います！」

そう言って、彼女はやっと俺に顔を見せてくれた。

とても真剣な表情で、目には涙がたまっている。

やっぱり、優しい佳代ちゃんの表情には、憎しみの色は見えなかった。

そして……。

「あなたは、補欠になれただけじゃない。努力が上手く実らない状態で頑張っていたんですね」

ん？

「それなのに、毎日部活を休むことなく頑張っていたんですね」

佳代ちゃんは、俺の肩に手を置き、涙が溜まっている目は悲しそうで、赤くなった顔は不安そうで、それでも満面の笑顔で俺を見つめながら。

「そんな、あなたが大好きです！」

なんだか、佳代ちゃんは変な事を言っている。

俺は反省することなく、即答した。

「ありがとう」

佳代ちゃんは、頬に流れず目に溜まったままの涙を、ハンカチでふき取り。

「さあ、行きましょう！ 私もバドミントンの知識があります。基礎から頑張りましょう！ きつと、今は形になっていないだけです。いつか爆発的に成長できますよ」

と俺の手を引っ張り、運動場に移動する。俺は壁を意識して入り口をくぐる。

佳代ちゃんの熱心な指導のおかげで、俺たちのラリーは平均七回ほど続くようになった。

それから、十七時のチャイムが鳴り、『ナイトタイムの準備するから、一時間の整備時間のため運動場から出て行け』と言う館内放送と、『まだ居座るなら新しい入場券を買いやがれ』と言う館内放送を聞きながら、俺たちは一階の休憩室に向かい小休止をした。

俺の心は幸せだけど、痛かった。ピンチは乗り切ったけど、佳代ちゃんを騙したままだ。

そして、着替えを済ませ、体育館の靴棚、つまりは玄関に移動すると、外は小雨が降っている。

「傘なんて、持ってきてないな」

天気予報なんて見ない俺は、小雨など予想できなかった。せめて佳代ちゃんと出かける時ぐらいいは見るようにしよう。

と思った時、佳代ちゃんはこんな事を言った。

「そうですよね。私も傘を持ってきましたでした。天気予報では『

今日は一日中気持ちの良い晴れ』と言っていましたよ」

俺は小さな努力の決意を、一度として行うことなく、無かった事にした。それは、どうでも良い事で、佳代ちゃんを雨に濡らすわけにはいかない。

俺たちは玄関で雨宿りをする事になる。

天気予報にも無い小雨なら、直ぐ止むかと思ったのだけど、時間が経つにつれ強くなっていった。もう、小雨なんて言えるものじゃない。

駄目だな。これは止みそうに無い。

「ちよっと、待っててよ。コンビ二で傘買ってくる」

きつと、佳代ちゃんは傘の代金を渡したり、あるいは俺がコンビ二に行く事すら遠慮すると思ったので、俺は返事を聞かずに雨の中走り出した。

コンビ二でビニール傘を二つ買い、走り出すのだけでも、往復十分の道のりは、俺の服を遠慮することなく、びしょ濡れにした。体育館に戻ると、佳代ちゃんは落ち着かない様子で視線を泳がせ、更には、ちよっと怒っているように見える。

俺は、少し不機嫌そうな佳代ちゃんに声をかける。

「お待たせ」

やっぱり、佳代ちゃんは怒っているらしく。

「風邪を引いたらどうするのですか!」

とゆっくり大きな声で言っていた。でも、直ぐに。

「でも、あなたらしいですね」

と微笑んだ。

俺はにやけてしまった。

「それでは、お代です」

と佳代ちゃんは小銭を渡してくるのだけど、俺は断った。

それは思わぬ方向に話を運び。

「私は結婚するまで、あなたに奢られたくないのです」
と真剣な表情で言って。

「あ！ あと少しで私は十六歳です。あなたも今年で十八歳になりますよね！ 学生結婚って良いかもしれません」

と胸の前で指を組みながら、これまた真剣な表情で言うのだけど、俺が今日得た経験から言うと、彼女はかなりの確率で天然なので、これはきつと本音だと思われる。

「ゴメン！ 就職してからじゃないと結婚できないよ。佳代ちゃんに苦労させたくないんだ」

と混乱している俺まで、変な事を言い出して。

「それでは、選んでください！ 結婚しますか？ お金を受け取りますか？ さあ！ どうするのですか！」

なんて、何故か俺は不思議な究極のクエスチョンに直面するのだが、その質問に答えたのは、同じ玄関で雨宿りしていた女子中学生の小さな笑い声だった。

俺たちの会話は丸聞こえだったらしい。

改めて周りを見てみると、玄関で雨宿りする人物は、俺たちを除くと二組いて、その中に女子中学生がいた。

二人組みで、両者とも下は学校指定のジャージで、上は学校指定のTシャツを着ていた。

あゝあ。あれじゃ、コンビニに走るのにもブラがスケスケだ。と言うか、無料で体育館を利用できる彼女たちは、財布を持って来て無い可能性もある。

そんな中学生たちを見ていたら、ふと相合傘の計画を思いついたので、俺は女子中学生に話しかけた。

女子中学生たちは何度もお辞儀をして、お返しするつもりらしく俺の電話番号を聞いてくるのだけど、面倒だから断って、それでもしつこく電話番号を聞いてくる女子中学生にうんざりしながらも、俺は彼女たちを納得させる事に成功した。

佳代ちゃんは微笑みながら、俺たちのやり取りを見ていた。

女子中学生が、見えなくなると……。

「やっぱり、あなたは優しいですね」

と嬉しそうに言っていた。

ついでに傘代の事も忘れたみたいだ。

せっかく、傘を買ってきたのだけど、佳代ちゃんとの時間が惜しくなった。俺は、雨宿り仲間の、もう一組の三十代夫婦らしき人にも傘を渡した。

これまた、女子中学生の時と同じようなやり取りがあっただけで、丁重にお断りさせてもらう。

「気にしないで下さいよ。下心が多い親切なのだから」とは言えなかった。

俺と夫婦らしき人たちのやり取りを見ている佳代ちゃんは、やっぱり嬉しそうだ。彼女が喜んでくれると、俺もなんか嬉しかった。それから、二人で二時間程話し込んだ。

気がつけば、外は晴れたのだけど、太陽の元気が無い完全な夜の時間だった。闇に浮かぶ佳代ちゃんの綺麗な横顔は、どこか神秘的だ。

そう言えば、こんな素敵な女性の佳代ちゃんと、無気力ベリーショートパーマで垂れ目メデューサの妹が、何で友達なのだろう。

俺は駅に向かう途中、聞いてみた。

「佳代ちゃんと妹ってタイプ違うよね？ あんな妹と一緒にいて楽しい？」

「あら？ 妹さんも素敵な人ですよ！ あなたと同じで優しくて純粹ですし。それと、不思議なんですけど……」

と返答に困っているのか、一度考えて。

「ほら、私ってノロマですよ？ だから、他の友達という時はお互いに気を使ってしまうんです。でも、妹さんは私と同じリズムなんですよ。彼女はノロマじゃないのに不思議ですよ」

「へー。あ、でも妹も同じ感じかも。佳代ちゃんと出会っ前、高校に入学する前は『どうでも良いけど疲れた』って毎日のように言ってたよ」

「そうなんですか！ タイプが違っていても、相性は良いのかもし

れませんね。それに、彼女は……。あなたの妹さんですから！」

俺は照れた。

それにしても、共通の話題があるのは救われる。駅に向かう途中、妹の話で盛り上がった。

垂れ目蛇女に感謝しつつ、駅に到着する。

俺たちは電車に乗り込み、佳代ちゃんが電車を降りて、次の駅で俺も降りた。

次に体育館デートの機会があったら、佳代ちゃんが降りた駅で待ち合わせをしよう、移動中の時間もスゲー楽しかった、とか思いながら自宅マンションを目指している時に気がついた。

体育館に自転車を忘れたな。まあ、今度行った時に回収しよう。

自宅マンションに着くと、以前見た、鍵を忘れた少年がいた。今日も鍵を忘れたらしく、俺を見つけると鋭く睨んでくる。

結局、俺も彼も何も出来ないまま、オートロックを後にした。

頑張れ！ 鍵少年！ 俺は応援しているぞ。いつでも、共有玄関のオートロックを開けてやるぞ。でも、鍵を忘れない方向で頑張ると尚良いぞ。

気がつけば、俺の中で彼は『かぎしょうねん鍵少年』と言うあだ名がついたのだが、未来永劫、それを知るのは俺だけだろう。

その夜、佳代ちゃんから傘代について、メールが来た。

俺は『あの人たちに傘を寄付したのだから要らないよ。佳代ちゃんは傘を使わなかったじゃない』と返信すると、三十分後『悔しいけど、わかりました』の一文だけの返信があった。『悔しいけど』が何に對してなのかは、考えない事にしよう。

とにかく、今の俺は幸せだった。

對して妹は、佳代ちゃん以外の友達はいないのか、一人でレンタルDVDを見て休日を潰したらしく、どこか不機嫌だった。

リビングのテレビを独占している妹は、俺の帰宅に気が付くと。

「あ、兄貴帰ってきたんだ。別に兄貴の帰宅時間なんて、どうでも良いけどさ」

と「おかえり」の代わりに、トゲのある言葉で出迎えてくれた。

こいつは、ローテンションなくせにアウトドア派だからな。

俺は『ロー』と『アウトドア』の因果関係について、理論立てながら、気がついたら眠っていた。

こうして、俺の初デートと初キスと……。

初逆プロポーズは終わった。

二章 変わっていく俺！

初デートの翌日。つまりは、日曜日午前。それは、バドミントン部が体育館を使える曜日だった。

人の気持ち動く瞬間なんて、他人から見れば理解できないのかもしれない。

いや、俺自身が理解できてない。

不思議な事に、嘘がばれるかもしれない初デート、と言うピンチを乗り越えたのに、俺は真面目に部活の練習に参加していた。

俺たちの体育館の半分には、バドミントンコートをつつ設置できる広さがある。部員は四人なので、常に全員がコートを使える。

先週まで素振りがメインだった一年生は、今日から、体育館が使える日はコートを常に使える事になるらしい。

一年生より初心者俺も、便乗してフルタイムでコートを使う。

コート上でフットワーク練習をして、残りの時間で長く続ける事が目標のラリー練習をする。最後には、試合形式で練習するらしい。

部長と副部長は、羽を撒き散らしながら、ノック形式でスマッシュの練習をしていた。

一年生と俺は続かないラリーの練習を頑張るのだが、ラリーが終わってしまう原因は、殆どが俺だった。

そして部長は、自分の練習を中断し、一年生と俺に新しい技術を伝授してくれた。

「高い軌道で来たシャトルを、インパクトの瞬間に力加減を調整して、相手ネット際に落とす。これがドロップだ。ネットギリギリに落とす技術も大事だが、それよりも相手にスマッシュなのかクリアなのか解らなくする技術が大事なんだ」

俺はレベルが上がった。ドロップの知識を身につけた。

その一時間後には、部長は更なる技を伝授してくれる。

「スマッシュは攻撃的なショットだ。やっぱり、攻撃力の高さはス

ポーツにおいて大事だろ？　と言う事でスマッシュを教えるよ。相手の高い軌道の返球を力いっぱい叩きつける！　スマッシュは、色んな球技にもある言葉だよな。それだけ、大事って思ってくれて良い」

俺は更にレベルが上がった。スマッシュの知識も身につけたのだが、使いこなすには時間がかかりそうだ。

相手にばれないフォームかは置いて、自分コートのネットにぶつかるのも置いといて、とりあえずドロップは何となく形になった。

問題はスマッシュだ。

スマッシュのつもりがクリア（高い軌道で相手コートに返す）になるし、逆も多い。

俺の思惑とシャトルの動きが連動しなかったのだが、部長はスポーツマンらしくない事に。

「えっとだな。シャトルを捉える、インパクト時の位置が大事なんだよ。スマッシュならちよっと前方で、クリアなら自分の頭上あたりで捉えると、初心者のはやりやすいかな。あとは、ラケットの面の角度がシャトルの動きに関係するんだぞ。だから、手首の動きも意識しないと駄目だ」

と理論付けて説明してくれる。

いや『スポーツマン』と『根性論』を因果関係で結び付けているのは、世界広しと言えど俺の頭だけか。別にスポーツマンが理論派でもおかしくないのかな。

一年生と俺は、今日はクリア、スマッシュ、ドロップ。この三種類の打ち方を練習するみたいだった。

理由は簡単で、俺たちの素振りは、オーバーヘッドストローク、つまりは上から振り下ろすフォームだけだったからだ。今日教えてもらった技は、そのフォームを使用する。

それにしても、佳代ちゃんと付き合う以前も、体力トレーニングは真面目にやっていたのだけど……。見て想像していたよりも、バ

ドミントはずっとハードなスポーツだった。

そう言えば、真面目に練習する俺が珍しいのだろう。女子バレー部員たちのチラ見する視線を感じる。猫目の大川とも何度か目が合った。

そして、片付けの時間、「本当にお前がやる気を出してくれて、嬉しいよ」と本当に嬉しそうに部長は言っていた。こいつは、絵に描いたような爽やかなスポーツマン野郎だな。

そして俺は、彼を利用しようと、邪心に満ちたもくろみを企てていた。

こんな俺が優しいはずも無い。

いつものように、素早く綺麗な職人技でネットを畳む部長に、俺は計画を実行した。

「なあ。部長さ。今日の午後には、予定あるの？」

俺は部長に用事が無いのを知っていた。何故なら、部長は毎日一人で、居残り練習をするからだ。

部長は。

「ないよ」

とだけ答えて、一枚目のネットを畳み終わった。そして、俺は悪いお願いをする事にした。

「あのさ。俺さ。本気で頑張る事にしたんだ。予定が無いなら、この後に県立体育館で練習しない？」

部長と俺の組み合わせじゃ、俺の練習にしかなら無い。部長は時間を無駄に費やすだけだ。

「もちろんだ！」

それでも部長は、せっかく畳み終わりそうだった二枚目のネットを床に放り投げ、俺の手を強く握り締め、更には抱きつくこうとしてきたのだが、俺が回避した。

俺は抱きついてきそうだった部長が、少し気持ち悪くて、結構うざくて、凄く嬉しかった。

そして俺は、部長がこう言う優しい人間だと知っていて、この計

画を決行する、悪い男だった。

幸運な事に、俺たちの話を聞いていた二年生の副部長が。

「俺も参加します。どうせなら、一年生もどう？ あ、無理強いはいしないよ」と言っていた。

副部長が来てくれるなら、部長もまともな練習が出来る。

俺は副部長にお礼を言つと「何がですか？」と言われたので、何故か恥ずかしくなつて、「何でない」と答えた。副部長は意味がわからず困っていた。

俺たちは一度家に帰り、昼飯やシャワーを浴び、県立体育館へ集合する事になる。

体育館に到着し入場手続きをする時、受付のおっちゃんは、やっぱり図々しくて「彼女と結婚するのかい」と聞いてきた。

どうやら昨日の逆プロポーズは、おっちゃんの所まで聞こえていたみたいだ。

俺がおっちゃんにラケットを借り、ジャージに着替えて、運動場に入場すると、既にメンバーは全員揃っていた。

この日は部員全員が揃っていた。俺以外のバトミント部員たちは、真面目で努力家なんだ。

八面あるバドミントンコートは、三つ空いていたが、俺たちは遠慮して一つのコートだけを使う事にした。俺たちは四人しかないしな。

二人もしくは四人全員がコートの中に入り、余りの人間がコート脇で、素振りや、実用書で勉強をする。

部長と俺がコートの外で待機している時、新技を伝授してもらった。

ロブ、プッシュ、ヘアピン、と言う三種類の技だ。

かいつまんで説明すると、学校で教えてもらったのが『上段』の返球。今、教えてもらったのが『中段』『下段』に対応する技。

本当は『球種の強弱』や『ネットとの距離』の関係とかも含まれ

て、さっきの説明は正しくないのだけど、まあイメージとしては、大体そんな感じ。

とりあえず、俺はこの技で大会を乗り切るらしい。

「これで、ある程度の場面に対応できるはずだ。下手に小技を増やすより、基本を磨いたほうが良い。時間が無いからな！」

と言う部長の戦略だった。

俺は足が言う事を聞かなくなり、部員たちも青春の汗を流し、時計が二十一時の十分前を指したあたりで、『今日は帰れ』と言う館内放送が流れた。

俺は県立体育館の一ヶ月券を購入し、それを見ていた部長までもが一ヶ月券を購入してしまい、それを見ていた副部長が「バドミントン部の慣習にしましょうよ！もちろん、費用がかかるので、自由練習と言うのが、第一条件で！」と言っていた。

俺は明日からも部長を騙すつもりだった。

みんなに聞こえないように「ありがとう」と呟く。

すると、スポーツマンらしくない地獄耳の部長が「何が？」と聞いてきたので、俺も「ん？何が？」と誤魔化した。

学校の体育館で汗を流し、県立体育館でも汗を流す部員たちは偉い存在に思えて、今日は俺も一員になれた気がした。

電車であっていた俺たちは、帰り道と一緒に駅に向かう。目的地に向かう電車が到着した順に人数が減り、部長と俺だけがホームに残った時点で気がついた。

自転車！

部長に「昨日来た時、チャリを体育館に置き忘れてたんだ」と告げて、体育館に戻る。

気づくのが遅れたから、無駄に電車料金を払ってしまった。

それから、自転車を結構な時間漕いで、自宅マンションに到着すると……。

見覚えのある人物が外門前で困っていた。

知っているおばさんが困っていたんだ。

人が通るたびに、見えない相手に「困ったわ」と、小さな声で話しかける女。

四。一号室の佐藤さん、つまりは巧みな井戸端会議技術で、母さんから夕食の準備時間を取り上げる人物だ。

俺は直ぐに佐藤さんの「困ったわ」の理由がわかった。彼女に近づき声をかける。

「佐藤さん。こんばんは」

「こんばんは」

と相手の出方を伺ったのだが、佐藤さんは何も言わない。鍵少年といい、何故言えないのだろうか？

それでも今日の俺は、不自然に偽者の俺だった。

いや、これからの俺なのかもしれない。

「鍵を忘れたんですか？ 共有玄関のオートロックだけでも開けましようか？ いや、佐藤さんなら家で休んでいても、誰も文句言いませんよ」

「あら？ わかつちやった？ ごめんなさいね。私ったらドジなんだから！」

と四十代の佐藤さんは、自分の頭を小突いて、舌を少し出した。

俺は、ちよつと反応に困る。

それにしても、最近の我がマンションでは、鍵忘れ事件が多発しすぎだ。

エレベーターや玄関ロビーに、注意喚起の張り紙を張るべきだな。

俺から言わせて貰うと、家の鍵を掛け忘れるなんて考えられない。そつだろ？

鍵を忘れると言う事は、家を出る時に鍵を閉めなかったって事なんだ。いくらかこの県が平和だからって、いくらこのマンションがオートロックだからって、無用心だろ。

駄目だな。

はつきりと言うべきだ。

共有玄関のオートロックの前で、俺は佐藤さんに話しかけた。
「すみません。俺も鍵を忘れてしまいました。しかも、家に誰もいないみたいです」

春とは言え肌寒い夜空の下、佐藤さんから、信憑性に乏しいこのマンションの裏情報を、特に不倫関係について、俺は聞かされる羽目になった。

不倫関係についての話も興味ないのだけど、それよりも、同じマンションの住人らしいのに、噂話に出てくる登場人物の殆どが知らない人だったのが気になる。

ただ俺の予想以上にこのマンションの、いや、この街の女性の情報網は凄くて、俺と佳代ちゃんの学生結婚まで話題に上っていた。

なんでだよ！

あの日、県立体育館で知り合いなんて見なかったのに……。

信憑性があるかもしれない佐藤さんのお話は、俺の家族が帰ってきたことで収束を向かえ、自宅に戻ると、俺だけ寿司を食い損ねた事実を知らされた。薄情な家族だ。

今日の俺の晩御飯は、冷凍ご飯をレンジで暖めたものだ。つまりは、白飯だけである。おかずは一つも無い。

いやいや、俺を置いて寿司を食いに行った事は認めても良い。でもさ、そういう時って、コンビニに弁当ぐらい買って来てくれるもんじゃないの？

拗ねた俺は行儀悪く部屋に茶碗を持って行き、せめて佳代ちゃんのメールをおかずにしようと、初めて本当の努力を報告するメールを送った。

佳代ちゃんの返信がきた時、つまりは三十分後には、茶碗は綺麗に洗われた後だったのだけど……。

それでも、なんか幸せだった。

次の日の昼休みの時間に、猫目のショートカットの女、つまりは

バレー部員の大川が話しかけてきた。

デザートなのだろうか。棒つきキャンディーを咥えている。

「やあ！ 昨日の君は変だったね」。いや、先週の君だね。何かあったの？」

明朗快活で天然でお馬鹿な大川の尻には、俺には見えない、犬の尻尾があるに違いない。いつも嬉しそうに尻尾を揺らしているに違いない。

それは悪い意味ではなくて、誰とでも仲良くなれる大川は、男女問わず人気があるのもうなずける。

「そんなに、俺が頑張ると変かな？」

「変だよ。でも偉いよね！ 見直しちゃうよ！」

大川は屈託の無い笑顔で、棒付きキャンディーを勢い良く俺に向けるのだが、唾液が飛び散ったのが凄く気になる。女の子らしくない。

ショートカットだからボーイッシュなんて定番のつもりか？ だけど、ボーイッシュってこんなのか？ 違うぞ。俺の常識論では絶対に違うぞ。

『ボーイッシュ』と『行儀の悪さ』には、何の因果関係も無いはずだ！

俺の頭のデスクの上には、大川に言いたい事についての書類が、聖徳太子もびつくりするほど積み重なっていたのだけど、口から出たのは意外なものだった。

「今度の大会に向けて頑張りたいんだ。結果は残らなくても良い。とにかく頑張りたいんだよ」

らしくない自分の発言に、俺は顔に熱を帯びるのを感じながら答えた。

すると、馬鹿な大川は馬鹿な提案をしてきた。

「よし！ それじゃ、昼休みも特訓だよねえ！」

意味がわからない。こいつは、何を言っているんだ？

しかも、疑問系ですらなく、決定事項らしい。

「特訓って何をするんだ？ 昼休みの体育館はバスケットしか出来ないぞ？ しかも、混んでいるし」

と俺は、ため息一つと当然の疑問を、大川にぶつけるのだが。

「君は馬鹿だね」。『努力よければ全てよし！』『基礎で勝利を釣るんだよ！』だだよ。

大川が嬉しそうに勢い良く腕を振り回すから、棒付きキャンディが哀れなクラスメイトを襲う事になったのは、ちよつと哀れな事実で。

性格だけじゃなく成績も馬鹿な大川に、馬鹿と言われたショックは大きいんだけど、それはどうでも良い事実で。

大川が言っと、ことわざの改変なのか、間違っって覚えたのかわからないのも、どうでも良い事実で。

それって俺の質問の答えになっってなくない？ っって言うのは少しだけ重要な事実で。

大事ななのは『なんか俺、教壇の上で、反復横飛びさせられてるんですけど』という事なのである。

どうやら、大川の頭の中では、バドミントン「フットワーク」反復横飛びだっ！ と言うことらしい。

クラス中の嘲笑的なまなざしが痛くて、噂を聞きつけた教師は説教に来たはずなのに「お前が頑張るなら仕方ないな」とか謎の言葉を残して消えて行ったのも不満で、それよりも、俺は『エロい目つきサボリ魔』から、変化した人を略して『変人』に異名を変えて、なんか学校の有名人になっってしまった事がショックだった。

と言うか、俺はサボリ魔で有名だった事実を、この事件をキッカケに知ったので、二重のショックだった。

そして、遠くから眺めていると和やかそうに見えた女子バレー部の練習、と言うか天然そうだった大川は、実は根性論の鬼だったのが、三重のショックだった。

「遅いー！！ ほら！ 地面を見ないい！ 良し、そこまで！ 三十秒のインターバルだよ！」

俺は座り込むのだけど……。本当に三十秒は言葉通りに『あ』と言う間で、全然休んだ気がしない。

「時間だ、ほら！ 立つのが遅い！ きびきび動けえー！！！」

今日は初日だったから、昼休みの途中に立案されたから、二十分後にチャイムが鳴ったのだけど、ひたすら反復横飛びをするのはきつかった。

俺が常に全力を出すように、怒鳴り散らすし、大きすぎる音を両手から発生させるし、壊れないか心配してしまうほど強く教卓と黒板を叩くしで、とにかく大川は怖かった。鬼教官だった。可愛い犬じゃなかった！

考えてみればそうだよな。犬がどんなに可愛くたって、あいつらは肉食系なんだ。

そして次の日から、昼休みの飯タイムは十分しか与えられなくて、残り四十五分は反復横飛びをするのが、俺の日課になってしまった。教壇の上からチョークの粉を撒き散らす迷惑な俺たちだけど、他のクラスや下級生までもが見学に来るほど、学校の名物となってしまった。

俺たちの教室の昼休みは、チョークの粉を回避するために不自然に後ろ側だけに人口密度が集まる。そんな教室になったのも、学校の名物となった理由かもしれない。

そして、バドミントン部の新たな慣習、つまりは部活の後に県立体育館で行われる自由練習は、ほぼ毎日全員が集まり、俺と部長は欠かさず参加していた。俺は週に一度は行っていた『お楽しみ』も、大会までは二週に一回ペースに我慢する事にした。

これらの練習は、ゴールデンウィーク中も変わらなかった。

土曜日だけは、身体を休めると言う理由から、全ての練習をしない完全休業日になる。

一日で筋肉痛が取れるか！ なんて疑問はあるのだけど、それは俺の身体が証明した事実でもあるのだけど、なんか充実感が心を満

たしていた。

佳代ちゃんは、そんな俺の日常を、三十分更新のメールで凄く喜んでくれていた。

こうして、俺は努力家っぽい俺のまま、一週間を過ごした。

俺の変化はまだ続く。

ゴールデンウィーク開けの週の最後の平日、つまりは金曜日の事だ。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴ると、鬼教官の大川は、瞬時に入れ替わり、人懐こい犬になる。

「いやあ。お疲れ様〜！ 頑張ったね〜」（ワンワン！）

最近良く話すようになった俺にはもう、彼女の尻尾は具現化して見ることが出来るのだが、それはどうでも良い事実だ。

「大川もいつも有難うな」

俺は半分嘘で半分本音を言った。大川の行動は、俺にとつて、迷惑のような有難いような、よくわからない位置付けだったんだ。

その大川は、昼休みの特訓と言う過酷なアイディアに続き、とんでもない事を言い出した。

「明日から私たちの朝の練習、朝連にも来ると良いよ！ 顧問の先生には、私から言つとくから安心しいよっ！」だと。

「いや、有難いけどさ、俺の身体は限界に近いんだよ」

大川は俺の返答を待つことなく、自分の席に戻ってしまった。嬉しそうに尻尾を揺らしながら。

大川は明日からって言うけど、明日は土曜日じゃないか、つまりは完全休業日じゃないか、と思うのだけど。

本当にもう〜！ って感じなんだけど。

それでも、この時の俺の心には、何故か闘志らしき物があつた。

翌日。土曜日。天気は曇り。俺の心は曇りっぽい晴れ。しかも、まだまだ眠たい、時刻は六時。

俺は女子バレー部の朝連に参加するため、学校の玄関ロビーに来ている。

売店前でもあり、普通教室に続く階段や、体育館に続く廊下など、様々な進路へと枝分かれしているためか、玄関ロビーは結構な広さを割り当てられていた。

大体、バドミントンコートが二つ分かな。

それにしても、土曜日は学校が休みなのだから、朝連だってスタート時間を遅くしても良いのに、と思った。

だけど、女子バレー部の連中は、宿直の先生が体育館の鍵を開けてくれる九時から、コートで実技の練習をしたいそうだと。

そう言えば、バレー部が体力トレーニングをしている所を見たことが無いよな……。いつも、朝連だけで済ませているのだろう。

俺を見かけると、尻尾を振りながら小走りで、大川が近づいてくる。飼い主の帰宅に気がついて喜びながら駆け寄ってくるような様子は、正に犬そのものだった。

どうやら、まだ犬モードらしい。

「偉いね〜！ ちゃんと、来たんだ。もう少しで、メンバーが集まるからね。それから、練習が始まるよ！」

そして、何故か玄関ロビーには、バドミントン部の部長もいた。なんでだ？

やっぱり、部長も俺を見つけると、スポーツマン笑顔を浮かべて近づいてくる。

「お前も、朝連に参加するの？」

と部長は俺がいることに驚きながらも、抱きついてきそうだった。俺は後ずさりして、拒絶の意思を伝える。

「大川に誘われたんだ」

「彼がもつともつと、練習したいって言うからねっ！ 誘ったんだよ」

大川は嘘をついていた。俺はそんなことを言った覚えは無い。いや、大川の表情には曇りも迷いも無い。その表情は、周りが何と言

おうと飼い主の帰還を信じ続けた忠犬八千公のようだ……。

きつと、大川的には真実を言っているのだろう。

なんでだよ！ 大川の記憶を改変したのは誰だ！

それを聞いた部長は俺の肩を小突きながら。

「バレー部の練習はきついぞ」

と脅しをかけてくる。大川がその内容を説明してくれた。

大川にとって朝連は毎日の行事であるはずなのに、額に指を当てながら必死に思い出していたのが、ちよつと気になる。

「そんなこと無いよ」。えつとね、体力トレーニングがメインなんだけど、十五メートルダッシュでしょ。えつと、それから、腕立て十回、腹筋十回、背筋十回、スクワット十回するだけだよ！」

本当だ。大した事無いじゃないか。

俺が唯一つ頑張っていた、バドミントン部の体力トレーニングだつて、その五倍だ。

俺が悩んでいる事を察したのだろう。部長は自分のスポーツ刈りの頭を撫でながら。

「大川さん。それを五十セットでしょ。いつも言葉が足りないよ！

あとは、学校の周りを四週するランニングもだね」

との事らしい。

俺の脳みそはスーパーコンピューター顔負けの速度で『無理だ！』と判断した。

「それは無理だ。出来る範囲で良いかな？ 絶対に手は抜かないからさ」

不思議な事に、努力家っぽい俺は、この言葉を心の底から言った。

本心だ。絶対に手を抜かないよ。

それには部長も同意してくれるらしい。

「そうだよな。俺もさ、中学三年生の春休みから。この高校に合格した事が解った時から参加させてもらっているんだけど、最初の頃は、週二回とかの参加だったぞ。今のお前は、既にオーバーク気味に頑張っているんだから、無理はしないほうが良い。かえって、

逆効果だ」

そうなんだよ！ 今の俺は筋肉痛に悩める、部活高校生なんだ。だけど、その言葉を聞いた大川には鬼が降臨した。

「オーバーワーク？ そんなことを言っているのは、時間に余裕がある奴だけだよ！！」

と俺に詰め寄り、胸倉を掴み、女とは思えない力で俺を引き寄せた。俺たちの顔が近い。

「君には時間が無い！ 積み重ねてきたものも無い！ それならば、残り数週間ぐらいは耐えなさい！！」

と俺と大川の鼻が付きそうなぐらいの至近距離で、これでもかと言わんばかりの、大きな声と大量の唾をくれた。

汚い。五月蠅い。そして、スゲー怖い。でも、近くで見ると可愛いかも。いや、違うんだ。佳代ちゃんゴメン！

などと言う俺の心の声なんか聞こえていない大川は、軽く頭突きをしてから、更に有難いお言葉をくれた。

「女子バレー部は連帯責任の部活なんだよ！ 一人でもメニューをこなせないなら、みんな待つ事になるのぉ！ だから、責任感を持つて、何が何でも、根性で、私たちのペースについてくるんだよ！！」

そうなのか。

ある意味 『ワン フォー オール』、『オール フォー ワン』

の精神に思えなくも無いよな、と俺が何とか彼女の言葉を理解しようとしたのは、どうでも良い事で。

「大川さん。そんなルール初めて聞いたよ？」

部長は、またも大川が嘘をしていると教えてくれた。

すると大川は、部長には犬の表情で話しかけた。落ち着いたのなら、俺の胸倉から手を離して欲しいな。

「うん。昨日決まったんだよ。先生に『彼も練習に参加する』と言ったらね、このルールを作ってくれたんだっ！」

なんだよそれ。どうもこいつも、俺の事を何だと思っているん

だ？

そして、大川は鬼の表情に戻り、俺に顔を向け。

「わかったね！」

ついに俺を解放した。

サイクルトレーニング形式とは言え、合計で言えば、七五〇メートルを全速力で駆け抜け、五百回ずつの筋トレを行ったことになる。しかも、十キロメートルほどのランニング付きだ。

体育館の鍵が開かれた九時までに終わらなかったとは言え、この俺がこのメニューをやり遂げた事が不思議だ。

自分で自分を惜しみなく褒めたいね。

二十分ほど、時間をオーバーしたのだけど……。

それでも。

学校周りのランニングを終え、玄関ロビーに倒れこむ俺に近寄り。「偉いね。君を見直したよ！」と言う大川の言葉は嬉しいのだけだ。

「本当に凄いぞ！ 実はさ、いつでも救急車を呼べるように、ポケットに携帯電話を忍ばせていたんだ。まさか、やり遂げるとは思わなかったぞ！」と言う部長の言葉も嬉しいのだけだ。

俺は荒い呼吸の中で二人を見上げながら、これが毎日続くの？と思うと、落ち込まざるを得なかった。

今の俺は本当にフラフラ何だよ。

その一方で、やっぱり何故か充実感があつた。

ただ、この時に事件は起きた。

俺と部長は、体育館に向かう女子バレー部員を見送った。その颯^{さつ}とした後姿は、ハリウッド映画に出てきそうな、地球を救うために死地へ赴く勇敢な男たちみたいだ。

男の俺が朝連だけで精根尽きているのに、なんて凄い女たちなんだろう。と言うか、本当に女たちなのだろうか？

そして、俺は売店前の自動販売機で紙パックのイチゴ牛乳を購入し、部長は五百ミリリットルのスポーツドリンクを購入し、俺たち

は、と言つか直ぐには歩けない俺のために、玄関ホールの壁際に座っていた。

部長は俺に話しかけてくる。

まだ褒めたり無いのか、優しい奴だ。なんて思ったのだけど、様子がおかしい。

この時の部長は、斜め前の天井を見つめて、思いつめた表情だった。

「俺さ、高校卒業したら就職するんだ」

実は理論的な部長は、やっぱり理数系に強くて、成績もソコソコ良かった。俺の口からは当然の疑問が出る。

「部長は進学しないの？」

「大学も専門学校も、結構お金かかるだろ？ だから、無理なんだよ」

俺は先日見たニュースを思い出した。

公私立共に高校までは無料、大学だって国公立ならば無料になる法案が可決された事を。

でも、それは来年度からで、こんな一文があった。『現役で入学するものに限る』と。

人材こそ国の宝だろ。経済的な理由で、部長ほどの人材を失って良いのか！

と思うのだけど、この一億人以上が住む日本にとって、優秀な一人が進学できない程度の損失は、小さい事もわかっていた。

そして、俺から見れば、部長は努力家で優しくて純粋で頭もソコソコ良い、優秀な人物なのだけど、日本にはそんな人間が沢山いる事もわかっていた。

俺たちの存在なんか、日本と言う単位で見れば、小さい存在だと理解してた……。

俺の視線が無意識に床を見つめている事に気がついたのかもしれない。部長は優しく静かな口調で。

「勘違いするなよ。それは、大した事無いんだ。大事なのは、今度

の大会が俺のバドミントン選手としては最後の大会になるって事なんだ。だからさ、絶対に県大会までは進みたいんだよ」

俺は何も言えなかった。部長は俺の気持ちを察したかのように話を続ける。

「目標なんて言うものは、簡単すぎても駄目だ。と言っても、難しすぎて現実味が無い。多分、俺にとって最適な目標が『県大会出場』ぐらいなんだ。多分、無理だけど、頑張れば大丈夫かもしれない」

「だろ？」と部長は笑いながら俺に聞くのだけど。

「そうかもな」

俺は嘘をついた。その目標は、きっと、多分、無理だよ……。

「だからさ。お前には感謝しているんだ。県立体育館の練習なんて思いつきもしなかった。俺は、出来る限りの努力をしているつもりだったんだけど、まだまだ足りなかったみたいだな！ 少し考えればわかるのに。体育館を使える日が少ない俺たちにとって、実技練習が不足しているって事ぐらい」

そして、俺の背中を軽く叩いて。

「本当にありがとう！」

部長は爽やかな笑顔を見せた。

そして、一瞬だけ顔を曇らせて、聞き取れた事が奇跡と言う程の小さな声で。

「もつと、早くからやれたら良かったのになあ……」

と天井を見上げながら、言っていた。

何言ってるんだよ！

県立体育館の練習が慣習になる前から、俺たちが、バドミントン部が、練習を終えて解散した後も、部長は一人で廊下で練習をしていた事を知っている。

俺が教科書を借りるために部長のクラスを訪ねると、いつも、部長はバドミントンの実用書を読んでいた事を知っている。

一度だけ尋ねたことがある部長の家には、時代遅れのビデオデッ

キがあり、沢山のバドミントンの試合のビデオテープがある事も知っている。その部屋には、なにかバドミントンのことについてメモされているらしい、大量のノートがある事を知っている。

毎日、四十分ランニングして、通学している事だっけ知っているんだ。

それでも、俺は。

「そっか」

と短い返事しか出来なかった。努力を知らない俺には、部長に投げかける言葉を知らなかった。

そして部長は、もう一つの決意を話し始める。顔は爽やかな笑顔のままだ。

「目標の先にある楽しみは、多いほうがいいだろ？ だから、県大会に出場できたら、好きな人に告白しようと思うんだ」

俺には意外だった。部長は硬派な人間で、バドミントン一筋で、女には興味が無いのだと思っていた。

暗くなっていた場を明るくさせてくれる話題だった。

「どんな人なの？」

俺は弾む気持ちを抑えて、冷静なフリをして聞いた。

だけど、部長の答えは、やっぱり切ないもので。

「えっと、初めて会ったのは中学三年生の時だったかな。黒髪が凄く似合って綺麗な人なんだ。芯が強く、それでも優しい。正に日本女性って感じだよ。しかも、スポーツをしているんだ。俺と趣味も合いそうだよ」

そう答えた部長は、嬉しそうに、恥ずかしそうに、はにかんでいた。

だけど、俺はその人物を知っている。

佳代ちゃんだ。

佳代ちゃんも部長も、中学生の時もバドミントン部だった。何かの大会で会っていたとしても不思議じゃない。

その佳代ちゃんは、努力家で純粋で優しい人が好きだ。

そいつは、俺じゃない。

部長はバドミントンを、小学生時代から数えて八年間頑張っている、努力家の男だ。

部長は俺なんかを心配してくれる、人のために頑張れる、優しい男だ。

そして、中学三年生から、ずっと一人の人を想い続けている部長は、やっぱり純粋な男だ。

俺の心の中で、佳代ちゃんが愛している人物と、部長が重なった。それでも、俺は二人を騙す事にした。

佳代ちゃん存在は、俺の心の中で、絶対に失いたくない存在になっっていたんだ。一度デートして、メールのやり取りして、妹の所に遊びに来た時に少し話をするぐらいなのに……。
時間なんか関係なかった。

そして、俺はまた嘘をつく。

「素敵そうな人なんだね。部長は頑張ったよ。うん。絶対、今年は大丈夫だ。県大会に出場できると良いな！」

何も知らない部長は。

「ありがとう！」

と気持ちよい言葉と、気持ちよい笑顔をくれた。

大川主催の反復横飛びは、部長の案で、少しだけグレードアップした。

俺は三分間を一サイクルとして反復横飛びをする。

すると、大川が三十秒ごとに数字を言うんだ。

「五！ 四！ 九！ 一！ 七！ 三！」ってな。

そして、三十秒のインターバルの時に、俺は言う。

「えっと、五、四、九、七、二、四で、二十二かな？」

部長が考えた『反復横飛び改』は、動きながら考える練習らしい。

大川が言った数字を覚えながら、それを足し算していくんだ。

聞いている分には簡単そうだったのだけど、実際やってみると難し

かった。

それで、三十秒のインターバル中に、答え合わせするんだ。だけど、馬鹿鬼は。

「知るかつ！」（バウバウ！）
だって。

とりあえず、鬼モードのこいつは話を聞いてくれないので、言うか俺が恐怖から意見出来る訳も無いので、人類の偉大なる発明『メモ帳と電卓』を、大川が手にしたのは次の日からだった。

部活の方でも、部長の変な練習はあった。

その存在を知ってはいたのだけど、体力トレーニング以外は興味がなかったので、その全貌を体験できたのは今回が初めてだった。

例えば、毎週水曜日の素振り練習は……。

英語教師私物のビデオデッキを使い、教室標準装備のテレビで、部長私物のバドミントンビデオを見るんだ。そして、コマ送りしながら、一つ一つ細かに綺麗なフォームを確認しながら、一年生に正しいフォームを教えていた。俺もその講義を受けた。

他には、二週に一度、体育館を使えない日を利用して、卓球部にお邪魔したり、野球部にお邪魔していたらしい。別に遊んでいるわけではなく、色々な球技の刺激を取り入れ、バドミントンと言う物に対し、マンネリ感を抱かないようにするためみたいだ。

更に他には、体育館を使える日の練習メニューにも、こだわりのあるらしい。準備運動を終えてからは……。

最初にスマッシュ練習で気分を良くして、次にそれぞれの短所練習や辛いフットワーク練習も気持ち良く行い、最後に試合形式で練習して再びハッピー気分になって、一日を締めくくる。との事だ。

俺の知らない所で、部長は色々考えながらやっていたんだな……。もっと早くから、彼の好意に応えるべきだった、と反省した。

こんな感じで、俺は努力家っぽくなっていった。
本物のバトミント部員になれたのかもしれない。

それでも俺は、佳代ちゃんと部長と言う、二人の素晴らしい人間を騙す悪い男だった。

それから俺は、複雑な心境のままだけど、それなりに頑張る俺のまま日々を過ごした。

そして、大会まで残り一週間ほどとなった、土曜日。ほぼ完全休業日。

太陽さん、おはようございます。なんて独り言を呟きそうになる、気持ちの良い晴れ。朝、午前十時。俺の心は晴れ時々曇り。複雑な心模様。

俺はバレー部の朝連を終えて、動きにくくなった身体を引きずりつつも、自宅でシャワーを浴びて、急いで駅に向かった。

今は、駅のホームで電車を待っている。

俺と佳代ちゃんは、県の中心街に遊びに行く事になっているんだ。毎日練習を頑張っている俺（今度は嘘じゃない！）を氣遣って、来週は大会があるから応援の意味もこめて、佳代ちゃんは俺を映画に誘ってくれたのだ。

今日が二回目のデートで、違う高校に通うと言うのは辛い事実だな、と思う一方で、たまに会うのも乙だな、嬉しいな、なんて思うのも事実だった。

電車の中で、時々、一人笑いしてしまうのを、堪えるのが大変だったよ。

俺は、佳代ちゃんの自宅近くの駅で合流した。

黒と白のストライプシャツと黒のズボンを着こなし、小さなハンドバックを持った、佳代ちゃんは大人っぽくて、明らかに洋服なのに、やっぱり大和撫子だった。

そして、中心街の駅に到着し、例の如く、俺は佳代ちゃんに手を握られ、引っ張られるように映画館に到着した。

県の中心街の駅から直結している、十三階建ての商業デパートの最上階に映画館はある。

九つのスクリーンがある、シネマコンプレックスだ。

俺は佳代ちゃんと一緒に映画を見れると思うと、周りにいる男共が哀れに見えた。その一方で、部長に申し訳ない気持ちになる。

本当ならば、佳代ちゃんここにいてるべき人間は、部長なんだ…

…。

それでも、俺は部長の存在を忘れるように勤めながら。

チケット売り場前、大きな掲示板に張られている、九つの映画ポスターを見ながら。

「ん」と。最近の映画情報なんて知らないからな。佳代ちゃんは何か見たいのある？」

と聞いたのだけど。

「私は、これが見たいですね」

佳代ちゃんが指差したのは、映画に詳しく無い俺でも知っている、今話題の超絶に恐ろしいホラー映画だった。

佳代ちゃんがホラー映画を見たい、と言うのは大した問題ではないのだけど、俺がビビりなのは大きな問題だった。

例えるなら、そのホラー映画のCMを見たせいで、俺は部屋の電気を点けたまま寝る二週間を過ごしたぐらいで、それは今日の朝まで続いているので、現在進行形なのである。

「これが見たいの？」

と俺は、ホラー映画のポスターの隣にある、大人でも見れる和やかなアニメのポスターを指差す。だけど、佳代ちゃんは。

「純粹なあなたらしい間違いですね」

と小さく微笑んで、アニメ映画のポスターを指していた俺の手を握り、ホラー映画のポスターまで誘導して。

「これが見たいですよ」

と嬉しそうに、腰を曲げ下から覗き込むように、反応をうかがうように、俺の顔を覗き込んでくる。

「そ、そっかー！ 楽しそうだね」

なんて俺は、強がってしまって、またもや彼女に嘘をついてしま

った。

だけど、心が痛むより、少し先の未来が恐ろしかった。

血の気が引くとは、良い比喻だ。俺はめまいを覚えながら、確信する。俺の顔は青くなっているに違いない。

まあ、心配する必要も無いんだけどね。CMなんて映画の良いところ取りで、さも凄い映画に見せかける詐欺映像なんだよ。

なんて俺の、自分に向けられた心のエールは見事なまでに裏切られて、とても恐ろしい映画だった。

佳代ちゃんに抱きついて、小さな悲鳴を上げて、後ろに座っていた怖そうなお兄さんに無言で椅子を蹴られて、のループを十一回ほど繰り返す事によって、俺はやっと恐怖から解放された。なんとか小便を漏らすなんて失態だけは、回避する事が出来た。

映画が終わった後、エンディングテーマが流れる薄暗い空間で、怖いお兄さんに「お前さ、面白い奴だけど、迷惑だったからな」と怒られて、佳代ちゃんに「純粋なんですね。可愛い！」なんて嬉しく無い褒め言葉を貰った。

しかも怖くて抱きついた記憶はあれど、それはぼんやりとした記憶な訳で、感触は思い出せない！

こんな事で悔しがる、俺は純粋じゃないと思う。

茫然自失、無我の境地、そんな俺は佳代ちゃんに引つ張られながら街をさまよった。いや、目的地は決まっているんだけどね。

昼食を食べるために蕎麦屋さんに行っただ。そこで、気がついたのだけど、恐怖で放心状態だった俺は、佳代ちゃんに映画代を出してもらっている。

「あ！ ゴメンね。映画代を払わせちゃって」

と二人分の映画料金をテーブルの上に置くのだけど。

初デートの時のような、やり取りがあった。

「駄目ですよ。あなた！ 結婚するまで駄目なんです！ もしかして……。ついに結婚してくれるのですか？ 嬉しいです。でも、どうしましょう。えっと、あなたの誕生日は十月ですよ。式場の

予約って何ヶ月前から出来るのかしら？ あ、多分、私の貯金で結婚式って出来ないですね。バイトすれば間に合うかな。でも、部活もあるし……。どうしよう？」

とドンドン佳代ちゃんの中で話が進んでいく。

「ま、待って！ ゴメンね。やっぱり、俺が就職するまで待ってよ」
まだ結婚する決心の無い俺は、一人分の映画料金を財布にしまった。

「残念です」

と佳代ちゃんは言っていた。何が残念なのかは意図的に考えないようにして。

「ゴメンね。佳代ちゃん」

もう一度謝った。

デート経験の少ない俺は午後の時間をもてあまし、意外にも嬉しくも、佳代ちゃんもデート経験は少ないらしく解決策を知らないみたいだ。

目的もなく歩き続けた結果、中心街に隠れるように存在している、小さな公園で時間を潰す事にした。

白いプラスチック製のベンチから、砂と埃を拭きとって、二人で並んで座った。手は繋がれたままだ。

砂場で遊ぶ子供たちの笑い声は、俺たちへの祝福の鐘のように思えた。

「部活頑張っているみたいですね」

と褒めてくれる佳代ちゃんは、満足そうな笑顔だった。

「うん。身体中筋肉痛だよ」

と今度こそ、本当に、努力家っぽい俺を披露する。

彼女の返答はゆっくりではあるけどリアルタイムで返ってくるのは嬉しくて、俺の努力が彼女の笑顔を作ったんだと思うと嬉しくて、産声を上げて一ヶ月だけど彼女の理想通りの『努力家の俺』を見せる事が出来た、と言うのはやっぱり嬉しくて、つまりは今の俺は幸せすぎるって事だった。

そして。

どこからか聞こえてくる、十七時を知らせる小学校のチャイムが鳴り響き、佳代ちゃんがコンビニに行くというので同行しようとしたら、きつい口調で断られてしまった時だ。

公衆便所は嫌なんだな、トイレ借りに行くんだな、なんて俺の予想はどうでも良くて。

つまりは、佳代ちゃんが公園のベンチから席をはずした時、事件は起きた。

不安そうな表情で、周りの景色情報の全てを把握しようとしているみたいに顔を激しく動かしている、大川が公園前を横切った。大川の家はこの辺りにあるのだろうか？

Gパンに、フード付きのトレーナーを着ている大川は、やっぱりボーイツシュだった。

「おい。大川〜！」

何故か俺は声をかけてしまつて。

その大川は、俺に気が付いた瞬間、フリスビーを上手くキャッチできた犬の様に見えない尻尾を激しく揺らしながら、嬉しそうに俺に駆け寄ってくる。

「良かった〜！ 君に会えてよかったよ！」

と訳のわからないことを言うので。

「なんでだ？」

と俺が聞くと。

大川は、嬉しさで潤んだ猫目を輝かせながら。

「あのね。言いにくい事なんだけどね……」

と足で地面に丸を何個も書きながら、恥ずかしそうに。

「実はさ。君にさ。えっとね……」

と本当に言い出しにくそうにしている。

そんな時、コンビニから戻ってきた佳代ちゃんが、大川の横に並び、俺の顔を見つめながら。

「あら？ あなたのお友達ですか？」

と聞いてきた。

俺は簡単に大川の紹介をする。同じ学校で同じクラスで同じ体育館を使っている、女子バレー部員だと。

俺は佳代ちゃんに、自分の努力を全部報告しているの。

「まあ！ あの昼休みや早朝にコーチして下さる方ですね！」

と佳代ちゃんは、胸の辺りで指を組み、輝いたまなざしで大川を見つめる。

しかし、肝心の大川は。

「君に彼女がいたんだね……」

なんて失礼な事を言うんだけど、その表情はとても切なくて。

「そっか……。邪魔しちゃってゴメンね！」

振り返り走り去った。この時、大川は泣いていた。

こんな状況で、理解できていないのは佳代ちゃんだけで、俺を諭すように優しく微笑んで、顔を少しだけ傾けて。

「あなた。追いかけないのですか？」

とか聞いてくるのだけど……。本当に良いの？

誰がどう見ても、この状況は一目瞭然な訳で、つまりは大川は俺の事を……。

「追いかけて良いの？」

俺は佳代ちゃんが気づいていないことを知っている、佳代ちゃんの返事も知っているのに、自分の行動の決定権を彼女に託した。嫌な男だ。

「だって、あなたが追いかけないはず無いじゃないですか。優しいあなたがね」

と俺の心をえぐる言葉と、罪の念を強くする優しい微笑だった。

一つ残念な事は、全国大会常連の女子バレー部の大川は、足が速くて、もう姿は見えなかった。

俺は二十分ぐらい、当てもなく走り回るのだけど、見つかるはずも無い。

こうして、二回目のデートは気まずい空気のまま終わった。

それでも佳代ちゃんは今を褒めてくれる。

「残念な結果でしたけど、優しいあなたらしい行動でした。学校で相談に乗ってあげてくださいね」

家路に向かう、俺の足取りは重かった。

大川の気持ちには応えられない、それでも俺の気持ちは伝えたかったんだ。

大きな猫目で、結構可愛い大川。

誰とも親しくなれる大川。

俺に昼休みの特訓や朝連を押し付けるほどに、世話好きの大川。

しかも、巨乳な大川。

そんなあいつは俺にはもったいない訳で、彼女なら俺以外の相手を選び放題な訳で、だから俺との恋が実らなくても前向きに考えて欲しかった。

問題なのは、大川が気持ちを伝えずに諦めてしまった事だ。

これでは、俺の気持ちを伝えられない。

俺は嫌な男になることを決心した。

相手をフルために俺に告白しろ、と言う男。なんて最悪な男なんだ。

それでも、俺なんかの呪縛にとらわれてはいけない。大川は、そんな魅力的な女性なんだ。

憎まれ役を買えよ！それが俺に出来る彼女への誠意だ！

明日は日曜日。大川とは体育館で会う。

俺らしくも無い決意を、俺は固めた。

ほんの一ヶ月前の俺なら、気づかないフリをして、忘れると言う決断を選んだはずだ。

佳代ちゃんと付き合ったせいだろうか、佳代ちゃんに初キスと逆プロポーズをされたからだろうか、今日二回目のデートをしたからだろうか、部長への罪悪感からなのか、理由はわからない。

それでも、俺は少しずつ変わっている。

偽者の俺に近づけているのだろうか？

俺が決意を固めると時同じくして、自宅マンションに到着したのだが……。

また一つ、大きな問題に直面する事になる。

例の鍵少年が、またもや鍵を忘れてしまったらしい。鋭い視線で俺を見つめてくる。

俺らしく無くなった俺は、声をかけるのだけど……。

「どうしたんですか？ 鍵を忘れたんですか？」

鍵少年は、俺が話しかけてきた事に少し驚き、気を持ち直すため深呼吸をして、喉に絡まっていなかったはずのタンを生成し、そのタンを地面に吐き捨てた。

「てめえか？ 佳代ちゃんと付き合ってる男は？」

弱々しいメガネの鍵少年らしくない、言葉遣いだった。

俺は瞬時に理解したね。

最初に彼を見た時に、妹と同じ制服を着ていた鍵少年は、やっぱり妹と同じ学校に所属している訳で、つまりは佳代ちゃんとも同じ学校な訳である。

そして、最初に彼と会ったのが、佳代ちゃんと付き合うことになった日から見て、最初の平日だった。その日の昼間に、学校で俺たちの噂を聞きつけたのだろう。

二回目に見たのは佳代ちゃんとの初デートの日だった。これも学校で噂を聞いたに違いない。

そして今日、三回目に彼を見るのは、やっぱり佳代ちゃんとデートをした日だ。

つまりは、鍵少年は佳代ちゃんに恋をしているのだ。

俺と佳代ちゃんがデートしている事実を知った鍵少年は、どう対処して良いのか解らない気持ちに動かされて、何をすべきかも解らないまま俺の家まで来てしまったのだろう。

俺も、状況は理解できても、なすべき行動は理解できなかった。こつ言う時つて、どうすれば良いの？

鍵少年は返事をよこさない俺に、イラついているらしく、地面を

強く踏みなおした。

「聞いているのか？ ああ？」

と言うのだけど、なんかム力つく。彼のその行動が、俺の行動を決定付けた。

「付き合ってる。だからなんだよ？」

俺も強気に出てしまった。その効果があつたのかもしれない。

鍵少年は俺に舌打ちだけを返し、ありえないほど大げさな、がに股歩きで立ち去っていた。

こうして、二回目のデートはあまり良い思い出にならなかった。だけど。

災難はまだまだ続く。

次の日の日曜日。俺はバドミントン部の練習中に少しの休憩時間を貰い、隣で練習している女子バレー部員に話しかける。

「練習中ゴメン。大川さんを借りてもいいかな？」

青春女子バレー部員は、やっぱり年頃の女子高校生な訳で、口笛や「熱いね〜」なんて野次を飛ばしてくるのだけど、それは間違っていないくて、問題なのは、その野次は大川を深く傷付けると言う事だ。

事情を知らないバレー部員たちを責めるのは筋違いかもしれないが、俺は腹が立った。

俺と大川は、体育館の入り口を出て、ギャラリーのいない廊下で話をする。

「急に呼び出してゴメンな」

と頭を軽く下げるのだが。

「ううん。私の方こそ、昨日はデート中にゴメンね」
と大川まで頭を下げるのだけど。

「止めるよ！ 大川は悪くない。自分に自身を持て！」
俺は檄を飛ばした。

大川の猫目は潤んでいて、小さく笑い。

「そうかな？」なんて聞いてくる。

「当たり前だろ」

そして、少しの時間、沈黙が場を支配する。

大川は気まずいのか、何か言いたいのか、背中を丸め、少しだけ顔を下げている。俺の靴を見つめている。

俺も決意は固めてきたはずなのに、上手い切り出し方がわからない。

「あのさ。言いたい事があるんだろ？ 大川らしくないぞ。はっきり言えよ」

と男らしく無い方法を選んでしまったのだけど、大川は無言のまま上目遣いで俺を見つめてくる。

大きな猫目は、先ほどより水気を増していた。

「でもさあ。君には彼女がいるし頼めないよ……」

大川らしくなく、弱々しい口調だった。

「ゴメン、としか言えないけど……。それでも、お前の気持ちはわかったよ」

すると、大川は勢い良く顔を上げ、小さく「なんで？」と呟き、話を続けた。

「そっか。わかっていたんだ……」

綺麗な猫目は、真直ぐに、俺を見つめている。大川の表情には、もう迷いがなかった。きつと決意が固まったのだろう。

「ごめんね。これで最後にするから！ だから、今日の夕方、昨日の公園で待ち合わせ出来ないかな？」

今ここで言えば良いのに、と言う思いは俺の中にあつた。

でも、ロマンスを重んじる女性と言う生き物にとって、譲れない何かが、あの公園にあるのだろうと解釈した。

だけど、俺にも譲れない部分があつた。

「わかった。だけど、俺の彼女も同伴させて欲しい」

プライベートの時間に、佳代ちゃんに秘密で、大川と、つまりは女性と会うわけにはいかない。

例え、それが大川を深く傷付ける行為だと知っていてもだ。それを聞いた大川は、目を大きく見開き驚いていた。当然だ。それでも。

「君が、そうしたいなら……。私に反対する権利は無いよ」

大川は最後に「それじゃ！ 夕方会おうね」と告げて体育館に戻っていた。その時の彼女の表情は、ぎこちない小さな笑顔だったのだけど、希望の光がかすかに見えた。

もしかしたら、俺は大川に期待させるような言い方をしたのかもしない。

そう思うと、俺は直ぐに体育館に戻れなかった。

俺の心は痛かった。

大川を傷付けた。

そして、これからもっと深く傷付ける。と言う罪の針が俺の心に刺さる。

それだけじゃない。

部長に嘘をついたと言う針も、鍵少年の問題と言う針も、何より、佳代ちゃんを騙し続けている針が、深く深く俺の心に突き刺さっている。

針と言うには大きいそれは、もはや、釘だったり、杭なのかもしれない。

そんな事はどうだって良い！

「クソ！ 痛え！」

俺は独り言。

そして、壁を力いっぱい蹴った。

柔らかい上履きは、俺の足を守る役割を果たさなかった。耐え難い激痛が、俺を襲う。

俺はうずくまり、靴を脱ぎ、足の指をさするのだけど……。痛みが消える事は無い。

「痛えよ……」

足より心が痛かった。

バドミントン部の練習が終わり、自宅でシャワーを浴びて、県立体育館に向かう前に、佳代ちゃんに電話をした。

実は初めての電話だった。電話をするまでに、何度もため息をついた。気が重い。

「佳代ちゃん。急にゴメンね。あのさ、昨日公園で、会った人がいるでしょ？」

「ええ！ あなたにコーチをしてくださる方ですね」

「うん。今日の夕方、その人と重大な話をするんだ。そこに佳代ちゃんも来て欲しい」

「それは、かまいませんよ。あなたに会えるのは嬉しいですもの。ところで、重大な話とは何なのですか？」

「ゴメン。それは言えない。出来れば、その話中も会話が聞こえない距離で見えていて欲しいんだ」

「そうなのですか？」

佳代ちゃんは理解できてないみたいだ。当たり前だ。

「本当にゴメンね。佳代ちゃんに聞かれては困る話なんだ。ただ、プライベートな時間に女性と二人っきりで会う。その場に、佳代ちゃんがいらないのは嫌だったんだ」

「そういうことですか！ 純粋なあなたらしいですね」

「純粋な俺か……。意図しない所で、また彼女を騙してしまった。

そして、佳代ちゃんは嬉しい事を言った。

「私はあなたを信じていますから、そんな気を使わなくても良かったのに」

と笑ってから。

「でも、あなたと会う口実が出来るのは嬉しいです！ それに、初めて電話で話せたのも嬉しいですよ」

と言っていた。

電話を終えた俺は、電話をかける前の俺と違う気持ちだった。佳代ちゃんの言葉には、俺にとって向精神薬以上に効果があるに違い

ない。

大川には悪いけど、この時の俺の気持ちは有頂天だった。それは束の間の事だったのだけ。

そして、スローな佳代ちゃんは、やっぱり電話でもスローなわけ、この会話をするだけで十五分の時間が必要だった。俺たちは、しばらくメールでコミニケーションする事になりそう。バイトをしていない高校生にとって、携帯電話料金は大きな出費なんだよ。

そして、県立体育館の練習を途中で抜け、自宅に戻り準備をして、佳代ちゃんと合流した。

この時には、俺の気持ちは憂鬱なものに戻っていた。コottonのギャザーシャツとロングスカート、と洋服を着ていた佳代ちゃんは、それでもやっぱり大和撫子なのだけど、今は喜んでられない。

十七時ちよつと前、俺たちは、あの公園に到着した。今日は珍しく、俺が佳代ちゃんの手を握り先導している。

既に大川は公園にいた。膝を抱え込むようにして、ベンチに座っていた。これから起きる、緊張の瞬間に、怯えているようでもあり、期待しているようでもある。

Tシャツに紐付きジーンズの大川は、やっぱりボーイッシュだったんだけど、今の俺にはどうでも良い事だ。

今から、自分がズタズタに切り裂く相手を、遠くから見ると、俺の胸までえぐられた気分だった。

俺の手には汗がにじんで、それに気がついた佳代ちゃんは事情も知らないのに。

「あなたなら大丈夫ですよ。きっと、上手くいきます」と言ってくれた。

俺は怖かった。痛かった。

覚悟を決めて、大川に近づく。

だけど、俺たちが公園に入っすぐ、大川の座っているベンチま

で結構な距離がある時、大川は俺たちに気が付いた。

その大川からは『クウーン』と言う弱々しい泣き声が聞こえた気がする。明らかな作り笑いだった。

先に言葉を発したのは、大川だった。俺は佳代ちゃんに「距離をとって」と頼む時間すらなかった。

大川はベンチから飛び降りるように立ちあがり、さすがは全国大会常連だ、と納得させるほどのダッシュを見せて俺たちに近づいてくる。

そして、膝を付き中腰になって、俺の膝に絡みつき、大川は叫んだ。

「ミーちゃんがね。ミーちゃんが誘拐されたの！」

顔は見えないけど、言葉の節々に表れる、しゃっくりと鼻水を啜る音から推測するに、大川は泣いているみたいだ。

こうして、俺は自分の勘違いに気が付いた！

だけど、事態は思っているより深刻だった。

「大川。落ち着け。ゴメン。俺も詳しい事情はわからないんだ。説明してくれないか？」

俺は帳尻合わせのために、嘘をついた。『大川が俺に恋していると思っただよ』とは言えない。

「あのね。ミーちゃんはね。時々一人でフラフラしちゃうの。そしてたらね。土曜日から帰ってきてないの！でもね。以前にもこんな事があって、犯人はわかつているんだ……。でも、親にも頼めないし、私も行けないし。友達にも頼めない。だからね。昨日君を見かけた時、君になら頼めるかもって思いついたの。男の子なら、大丈夫だと思ったから！だけど、彼女がいるなら頼めないよぉ」

訳がわからん。

とりあえず、俺は当然の提案をした。

「警察は？警察に行ったのか？」

大川の答えは信じられなかった。

「行っただよぉ。でもね。忙しいって断られたの！」

ありえない！ この国は腐っている。誘拐事件を目の前にして、忙しいから警察に頼むなだって？

大川は俺が怒り心頭なのを感じ取ったのだらう。でも、その矛先が自分に向けられていると勘違いしているみたいだ。

「ゴメンね。やっぱり、彼女がいる人に頼めないよね」

とか言っている。大川は本当に馬鹿だ。

「何言っているんだ！ 警察が頼りにならないなら……。俺が解決してやる！」

正直自信はなかった。でも、この状況では、こう言うしかなかった。

それに、丸つきり嘘という訳ではない。俺は全力で問題に取り組むつもりだ。

しかし、犯人がわかっていても、警察が何も出来ない誘拐事件か……。犯人はヤクザや外国人マフィアか……。恐ろしい想像しか思い浮かばない。

確かに多大な恐怖はある。

でも、ほっとけない！

この時大川は、やっと顔を上げた。涙と鼻水だらけの顔で、上目遣いに俺を見つめてくる。

そして。

「ありがとうー！」

と言つて、さらに大きな声を上げて、泣き始めた。

俺は大川に恋愛感情は無い。それでも、一瞬胸が締め付けられた。守ってあげたい、と思ってしまった。

佳代ちゃんゴメン！

その佳代ちゃんは、顔を青くしていた。

「あなたらしいです……。でも、気をつけてくださいね」

と消え入りそうな声で言った。

大川が泣き止むのを待ち、俺たちは、その犯人の元へ向かった。そこは、古びたビルだった。茶色いレンガ調の外壁に、四階建て

の建物。外壁にある無数にあるヒビ割れが、今にも崩れ落ちそうなイメージを連想させる。

上へ続く階段がある入り口の隣には、地下に続く階段がある。

そして、二階は丸々空きテナントのようだった。

他の階にある会社も、どこか裏側社会を連想させるものばかりだ。『スマイルローン』ってのはまだ想像がつく。『今谷会』って何の会社だよ。不透明さがビルの概観と合い重なり、不気味な恐怖を煽る。

そんな怪しいテナントが多いこのビルは近いうちに壊されるだろう、と思う一方で、意外としぶとく生き残りそうだ、と思わせるビルだった。

大川は「ゴメンね」と小さく謝り、ビルの地下に続く入り口を指差した。

「あそこなの。あのお店にミーちゃんは奪われたの……」

この時、やっと、俺は全貌を理解した。

理由は簡単だ。

俺はこの場所を知っている。もう、足を洗った世界、怪しく如何わしい世界が広がっている店だ。

そう。俺は佳代ちゃんとの初デートをキツカケに、この世界からは足を洗ったんだ。俺にも理由はわからない。もしかしたら、純粋な俺に近づこうとしたのかもしれない。

不安げな表情で青い顔の、上手く話すことすら出来ずにいる女性二人に、俺は声をかけた。

「安心しろよ。俺に任せて！」

大川は「うん……」と、佳代ちゃんは「はい……」と、それぞれに、不安を乗せたトーンで返事をした。

俺は女性陣を安心させるため、部長顔負けの爽やかな笑顔を残して、地下に続く階段を下りる。

建物の内壁は、色を塗ってないコンクリートの色そのものだ。やっぱり、無数のヒビが存在し、そのヒビがどこもなく不安を駆り立

てる。

最後の段差を降りると、目の前には飾り気の無いドアがあった。鉄製で装飾品も色も付いていないドアは、監獄を連想させる。重たいドアを開けると、コレクションしても人に見せられないだろう代物が所狭しと並んでいる。

人一人が歩くのにも、窮屈な通路しか確保されていないほどに、怪しい品物が、陳列棚が、狭い部屋に詰められていた。

店の入り口をくぐり、直ぐに右を向くと、レジカウンターがある。レジカウンターに座っている男は、危ない薬をやっているのだろうか、と思わせる空虚な表情で地面を見つめながら、一人で話していた。

そして、室内なのにハット帽を深く被っていた。辛うじて見える目には、濃い色のサングラスをしている。これも室内なのに変だ。

レジの男は、俺に気が付くと声をかけてきた。

「お前か。最近来ないな。どうしたんだ？」

音が低くドスの効いた口調だが、怒っているわけでもない。彼は、それがカツコイイと思うタイプの人間で、常にこの口調なんだ。

「俺は足を洗ったんだ」

レジの男は、レジカウンターを軽く叩いて。

「な、なんだって？ そんなこと不可能だ」と言いやがる。

確かに、以前の俺からは想像できないだろう。でも、今の俺は偽者の俺になっってきたているんだ。

「多分、金輪際、この世界に関する事は無いと思う」

「お前が足を洗うなんて、想像していなかったよ。せつかく『とつておき』を用意していたのに……」

「ゴメンな」

悪事とは言え、彼の親切を裏切るのは心苦しくて、俺は謝った。彼も悪い人間ではないのだろう。

「いや。詳しく事情は聞かない。でも、その事情は明るいものだ」と

思う。この世界から足を洗う理由は大体そうだ。応援してる」
と言ってくれた。

俺は彼の言葉が嬉しかったのだが、それよりも今は、ミーちゃんの事が大事だ。

「ところで、ニコは来ているか？」

俺はミーちゃんに心当たりがある。俺とレジの男は、ニコと名づけていた。

「ああ。ここにいるよ」

彼は椅子を引き、レジカウンターの下を指差す。

レジカウンターの裏側には、小さく丸くなっている女がいた。茶色の毛が可愛い。

いや、俺もレジの男も性別を確かめた事はないので、もしかしたら、男なのかもしれないが……。

俺と彼の間では『女のはずだ』と言う共通のイメージがあっただ。

俺はミーちゃんを抱き上げる。

つまりは、茶色の三毛猫を抱き上げる。

「こいつさ」。野良じゃないんだって。飼い主が俺の知り合いだったんだ」

レジの男はハット帽を捲くりながら、驚愕の表情を見せていた。

「そうなのか？ 良く来るから、野良にしか思えなかったぞ」

俺もそう思っていた。

この店に来た当初、悪の道に進み始めた十五歳の時には、この店が飼っている猫だとさえ思っていたぞ。

「今、ビルの前で飼い主を待たせているんだ。久しぶりに来たんだけどさ、今日は直ぐ帰るよ」

男は了解し、もう一度、俺を悪の道へ引きずりこもうと試みた。さつき、応援するって言ったのに！ 俺は商売人魂の強さを知った。

「なあ。お前のために、探したんだ。R―十五指定の中じゃ、飛び

つきりにエロイ本だぞ。本当に興味ないのか？ 足を洗うのか？

『巫女の初めての冒険』って言うんだ。お前って和物コスプレ好きだったろ？ しかも、この女優さん好きだったろ？」だと。

好きだよ。超好きだよ！ クソ〜！ スゲー見て〜よ！

「悪いけど、俺は可愛すぎる彼女を手に入れたんだ。その娘の好み」が『純粋な男』だからさ。もう、この世界には関らない事にするよ」

俺はもう一度決意を伝えた。言葉にしないと心が折れそうだった。『巫女の初めての冒険』は余りに魅力的だった……。

レジの男は「残念だ」と言っただけだ。

「頑張れよ！」

と応援してくれた。

店を出て、階段を上っている時、目を覚ました三毛猫に腕をひつかかれる。

こいつは、ヤンチャさんらしい。

ビルの外に出ると、佳代ちゃんと大川は不安そうに話をしていた。大川が俺の帰還に気がつくと、『待て！』を解除された犬みたいに俺に食いつきそうな勢いで近づいてくる。いや、怖えよ。

大川にミーちゃんを渡すと、ミーちゃんは大川にも懐いてないみたいだ。必死に抱っこ、つまりは腕の包囲網から逃れようとして、暴れている。

犬と猫は相性が良くないのかもしれない。

でも、ミーちゃんが暴れるのは、大川にとっては当たり前前の出来事なのだろう。暴れるミーちゃんを気にする様子を見せていない。

そんなんだから、よく迷子になるんだよ！

そして、再び涙を見せて「もう離さないよっ！」と言っていた。

暫くミーちゃんとの会話を楽しんだ大川は、俺たちにお礼をしたので、ファーストフード店か喫茶店でおごらせて欲しい、と五月蠅かった。

「ミーちゃんの命の恩人だもん！ せめて、晩御飯ぐらいおごらせてよ！」だと。

俺たちが何度断つても、引き下がろうとしない。

俺は言い訳を思いついて。

「それじゃあさ、駅まで送ってくれよ」

と提案した。大川は騙されてくれた。でも、お前の感謝の気持ちは、確かに受け取ったから気にするなよ。

一つ問題なのは、俺を待っている間に、佳代ちゃんと大川の間には友情が出来たみたいなんだ。

駅につくまで、俺はなんか孤独だった。

俺が先頭を歩き、直ぐ後ろを女性二人がついてくる。

その会話の多くは、偽者だった。

大川はこんな事を言っていた。

「佳代ちゃんの彼氏って優しいよね。普通、彼女が出来たらエロ本屋さんに行けないよあ。それなのに、行ってくれたんだもん！それだけじゃなくて、彼女を不安にさせたくないから、わざわざ呼び出すなんてね。純粋なんだね！変人だけど、見直しちゃったっ！」

馬鹿な大川の男と言う生き物について認識は普通と違っていて、俺に対する評価も間違っていた。

彼女が出来てもエロ本を読む男は珍しく無い。寧ろ多い。^{むし}

そして、俺は優しくも無いし、純粋でもない。

でも、大川は余りに嬉しそうにしていた。後ろを振り返らなくても、ボールを投げしてくれるのを待っている犬のような大川の表情は想像がつく。そんな明るい声だった。俺は勘違いさせたままでも良いかな、と思っってしまった。

多分俺は、偽者の俺に近づいているはずだし……。

佳代ちゃんは、大川の言葉に対して。

「ええ。あの人は素敵な人なんですよ！」

とスローだけど明るいトーンで言っていた。黒船と言う脅威的な他国の力を見せ付けられても動じない、江戸末期の女性のような、自信に満ち溢れた声だった。

駅に到着すると、大川は大げさに手を振って、俺たちを見送ってくれた。でも、ミーちゃんはまだ暴れているのだけど。

流石は怪力大川だ。片手でしつかりとミーちゃんを制御していた。改札をくぐり、大川の表情も確認できない程に遠い距離まで、俺たちが移動しても、まだ手を振っていた。

本当に犬は律儀な生き物なんだな。

そんな大川を見ると、なんか俺まで嬉しくなった。

佳代ちゃんも、機嫌が良かった。

駅のホームでも、電車でも、ずっと俺を褒めてくれていたんだ。

「本当にあなたを好きになってよかったです！」と。

佳代ちゃんを騙し続けている俺の罪の念を、打ち消してくれる時間だった。

そして、自宅マンションに着くと、鍵少年はいなかった。

今日、俺と佳代ちゃんが会ったのは、突発的だったからだろう。

彼は、今日『俺たちが会う』と言う情報を手に入れる事は出来なかったんだと思う。

こうして、大川の問題は解決した。

それは俺の勘違いだった。

考えてみれば、直ぐわかることだよな。俺がモテルはずも無い。こうして、変化した俺は、切ない想いを胸に、寧ろその切ない想い、みんなへの罪悪感があったからかもしれない。

努力家っぽい俺のまま、大会当日を迎えることになる。

最後の三日間は、軽いトレーニングと、軽いラリーだけの練習だった。筋肉痛のままじゃかえって悪い結果になる、と言う部長の提案だった。

大川は悔しそうに、一応は部長の提案を呑んだ。

「うう」。君たちは根性の素晴らしさを知らないんだよっ！ 違う。

現代科学は悪だっ！ スポーツ科学なんて嘘偽りだっ！

でも、納得しているようには見えなかった。

俺に軽めの練習を提案した部長は、大会一日前になっても、いつ

も通りの練習をこなしていた。いや、今までよりハードに見えた。

「俺は筋肉痛になって無いからな！それに、自分の筋肉の超回復リズムも掴んでいるから安心しろよ」

と部長は言っていたが、その言葉の真意はわからない。

俺には『県大会に出場する』と言う決意が、部長を無理させているように思えた。

大会前日には、俺も部長の練習に参加した。一セットだけど試合形式で練習したんだ。

部長曰く。

「大会前に、お前と試合するとき、俺が自信を付けられるだろう？」
なんて、失礼な言い方で誤魔化していたけど。

でも、俺は知っていた。

部長は最後の最後まで、俺を心配してくれていたんだと……。

そして、六月中旬。大会当日。天気は弱い雨。俺たちの心は太陽が情熱の赤色に燃えている快晴！

地区予選は、市立のスポーツセンターで行われる。二階建てでドーム型の建物だ。

一階にある運動場は、学校のそれより二倍程の大きさをしていた。半分にバドミントンコートが六つ設置できる大きさで、その半分の六コートで男子予選、もう片側で女子予選が行われる。

二階は下に運動場のある部分は空洞で、その空間を囲むように、観客席が設置されている。俺たちの控え場所はこの観客席になる。

俺たちは観客席の学校ごとに指定された場所に陣取る。対面側の観客席、中央よりやや左側には、佳代ちゃんの姿が見えた。

佳代ちゃんも俺を見つけたみたいで、嬉しそうに、ゆっくりした動作で、それでも大きい動作で手を振ってくれた。俺のやる気メーターは瞬時にレッドゾーンを越えた。

そして幸いにも、部長は佳代ちゃんに気づいてないみたいだ。

俺は佳代ちゃんに、『大会が終わるまで集中するね。ゴメン』とメールを送信する。

部長に、俺と佳代ちゃんとの関係を知られたくなかった。

佳代ちゃんは、携帯電話を取り出し、携帯電話を見つめて、右上を見つめて、もう一度携帯電話を見つめて、自分のこめかみを両手で押さえながら可愛らしく頭を揺らし、また携帯電話を見つめる。

そんな感じで、三十分後に返信が来た。佳代ちゃんのメールが遅い理由がわかったのだけど、俺に送るメールをあんなにも悩んでくれていたんだ、と思うとそれは嬉しい事実だった。

佳代ちゃんのメールは『あなたらしいです。お互い頑張りましょうね!』と短かった。

そして、そのメールを受信したのは、開会式の始まる直前だった。俺たちは運動場に降り、学校ごとに綺麗に並ぶ。

開会式での偉い人のお話は、いつもなら退屈なのだけど、なんか今日は少しだけ心にしみた。『清い若者の清い青春の汗は将来大切な思い出となり、それが清い大きな武器となります。私が若い頃の話になりますが、それは清い若者の話でして……』とか、『結果よりも今日までに諸君らが得た経験が大事で、それを例えるために百十八の小話をさせて頂きますと……』とか。

全体的にくどくて、結局何が言いたいの？ って感じでつまらないのだけど、変に俺の心を捉える部分があった。

俺たちは観客席に戻り、トーナメント表を見つめる。個人戦シングルスの部の参加者は百十二人いて、そのうち七人が県大会に出場できる。

俺たちの中で、最初に試合するのは部長だった。

部長にとって、今回の組み合わせは、運が良い組み合わせらしい。去年の秋の新人戦のデータから予想するに、部長は準々決勝までは進めそうだと、言っていた。ベストエイトにはなれそうだと、言っていた。

それよりも俺は、部長がそんなデータまで作っていた事に驚い

た。

問題なのは、他校の一年生の実力が未知数な事と、他の選手も新人戦から成長しているだろう、と言う事らしい。

でも、部長の努力は本物だ。そいつらが部長より成長しているとは思いたくなかった。

偽者の俺とは違う。

部長は昼休みも小休憩もバドミントンにささげた。通学時間すらもバドミントンにささげた。部活が終わった後の時間だってそうだ。一度部長の家を見ただけの俺でも確信を持てる。プライベートの時間だって、その殆どが、バドミントンのため使われていたに違いない。

でも、部長が県大会に出場すると言う事は、部長が佳代ちゃんに告白すると言う事で、それだけは嫌だった。

俺は部長に勝てる気がしない。全てにおいて負けている。そして、佳代ちゃんの理想像と部長は余りに一致していた。

それでも、俺は部長を尊敬している。

だから、部長にとって最後の公式大会で、彼が県大会まで駒を進めて欲しい、と言う思いもある。

どっちつかずの矛盾した思いが、不安定な炎のように、大きく燃え上がり、小さく消えかけ、また大きく燃え上がる、を繰り返し続いていた。

部長は一回戦危なげなく勝利した。

そして、もう部長が使う事はないのに……。

今の対戦相手のデータをノートに書き込んでいた。

そして！

いよいよ、俺の試合だ。

相手は二年生だ。部長の話によると、秋の新人戦のデータから見
て……。

俺の勝算は三割ほどらしい。

俺から見れば、この会場にいる全ての人間が格上だろう。それを

考えると、三割と言うのは、良い勝率に思える。

それに、今の俺のテンションは二重丸なのだから！ 絶好調なのだから！ 佳代ちゃんのメールも嬉しかったし、部長の問題も、もう少し先のお話だ。

試合は相手のサーブから始まった。

「やつ！」と言う相手の掛け声と共に、シャトルが宙を舞う。そのシャトルは緩やかな速度で、俺のコート奥側に落ちる。

緊張で強張った俺の身体は、少しぎこちなく、それでも、ちゃんと反応してくれて、数歩後ろにステップした。

いや、ステップとは言えない、転びそうな足取りだった。それでも、俺は優しいタッチで相手のネット際にシャトルを落とす。

サーブ位置にいたはずの相手は、俺がネット際に落とす事を読んでいたのだろう。シャトルから相手に視線を移すと、既にネット際に駆け寄っていた。

そして、相手も優しいタッチでネット際に落としてきた。

見るからに初心者の動きの俺がコート奥にいれば、相手が手前に落とす事は予測できるさ。

俺は体力トレーニングだけは真面目にやっていたんだ！

大またでネット際に近寄り、予想通りに、ネット際に落ちかけているシャトルを強く打ち上げる！

シャトルは高い軌道で、相手コート左奥を目掛けて飛んでいく……。

ぎこちない動きの俺を見くびっていたのだろう。相手は返されるとは思っていなかったに違いない。少し反応が遅れていた。

そして、シャトルは地面に落ちる。

ラインギリギリだ。

俺も相手も、緊張と期待を載せた視線で、線審をみつめる。

線審、つまりはシャトルが落ちた場所が、ラインの内側か外側かを判断する審判が、指も腕も真直ぐに伸ばし、斜め下方に向けていた。

そして、主審がコールする。

「サーブスオーバー。ラブワン」

俺の得点だ！

無意識に声が出た。「よおし！」と。

俺が初めて行う試合。俺が初めて手に入れた点数。俺の努力が実った瞬間。

アドレナリンもエンドルフィンも、あらゆる脳内物質が、遠慮なく俺の脳内を刺激する。

今度は俺のサーブからだ。

興奮しすぎている頭を落ち着かせるために、数回の深呼吸をする。そして、俺はサーブで、相手コート手前側にシャトルを落とす。

真面目に部活をしているだろう対戦相手は、当然のように反応する。

それでも、相手が俺を見くびっているのはわかっていた。

俺はわざとコート中央より、やや左前方に移動する。俺流フェイントもときだ！

すると、相手は俺の作戦通りに、俺の右後方を目掛けてシャトルを打ち込んだ。高い軌道だ。

俺は直ぐに後ろにステップし、スマッシュを打つ！

実は、まだ俺のスマッシュは、クリアにならない確率が七十パーセントしかない。さらに今の俺にはコースを意識するなんて無理だった。

つまり、どこに飛んでいくのか、どんな軌道になるのか俺自身にも予想がつかなかった。

そして、打った後に思い出す。

部長が、シングルスの際は無理にスマッシュを打たないほうが良い、とか言っていた事を。

力いっぱい打つスマッシュは、体制が崩れることも意味している。無理に打つと、相手の返球に対応できない。とか言っていた事を。

うわ。今の俺、スゲー不安定な体勢でスマッシュを打っちゃっ

たよ！ 興奮しすぎていた……。

不安を抑えて相手に視線を送ると、対戦相手はどんな球種にも対応出来るようにコート中央に移動していた。

そして、俺のスマッシュは右ラインスレスレを飛んで行き、相手は力いっぱい手を伸ばしながら飛びつくように反応した。

それでも、対戦相手のラケットはシャトルはシャトルに届かなかった。

俺の放ったシャトルは、ラインの内側に落ちる。

俺の二連続ポイントだ！

そして、それからの試合運びは一方的だった。

第一セット 二十一対四。

第二セット 二十一対六。

バドミントンの試合は、一セットが二十一ポイント制で、二セット先取で結果が決まる。

つまり、もう第三セットをする必要も無いのだ。

俺の予想以上に圧倒的な結果だった。

こうして、俺の短いバドミント部員生活は終わった……。

俺の実力を上方修正した対戦相手には、俺の付け焼刃の技術は通用しなかった。

クソ！

俺は叫びたい気持ちで一杯だった。

待機場所に戻ると、完敗した俺に、部長も副部長も一年生も、『お疲れ様』と言ってくれた。

一ヶ月半しか頑張つて無い俺なのに、その頑張っていた思い出がちらちら脳裏に浮かび、悔しかった。

そして、もっと早くから頑張れば良かった、と言う後悔が止め処なく押し寄せてくる。そうすれば、勝てないまでも、試合らしい試合が出来たかもしれない……。

ふと、佳代ちゃんに視線を送ると俺の試合を見ていたらしく、既に携帯電話と格闘していた。

それから、三十分後送られてきたメール。

それは、短いんだけど……。

俺の後悔に耐え難い重みを与えるものであり、俺の心を罪悪感の刃で切り刻むものであり、それでも、深い優しさで抱擁してくれるものだった。

メールには『あなた、大丈夫ですよ。私はちゃんと知っていますから……。お疲れさまでした！』と書いてあった。

佳代ちゃん、違うんだ。俺が頑張ったのは凄く短い期間で……。

何もしてないのと同じなんだ！

それでも、彼女のメールが嬉しかった。彼女が勘違いしていたとしても、認めてもらえた事が嬉しかった。

一ヶ月半だけのバドミントン部員の癖に、俺は二粒の涙がこぼれ落ちてくる。

それに気がついた部長は、誰にも気がつかれないように、こっそりティッシュを渡してくれた。

その部長は、県大会には出場出来なかった。

準々決勝まで、勝ち続け、全セットデュースの接戦を繰り広げ、そこで敗れた。

ベストエイトだ。

県大会に出場できるのは、七人。

まず準々決勝で敗れた四人で、五位決定戦が行われる。その一回戦でも部長は負けてしまった。

次に五位決定戦の一回戦で負けたもの同士で、七位決定戦が行われるのだが、それでも一歩及ばなかった。

第一セット 二十一対十九。

あと少しのところで、相手が取った。

第二セット 十六対二十一。

今度は、部長が取った。

そして、試合の結果を決める、第三セット。

二十対二十。でデュースに突入する。

俺はその後の事を考えずに、本当は幸せそうにデートしている佳

代ちゃんと部長を想像しながら、出来る限りの声を出した。必死に応援した。

応援する事が、どれ程部長の手助けになってるのかわからない。もしかしたら、意味が無い行為なのかもしれない。

それでも、必死に叫び続けた。

試合は、もつれにもつれ、どちらも一步も譲らず、二十九対二十九。

デュースは二ポイント差で勝負が決まる。しかし、例外があつて、どちらかが三十ポイントを取った時点で終了する。つまりは、次のポイントを取ったほうが県大会にいけるんだ。

そして、結果。

第三セット 三十対二十九。

部長は県大会に行けなかった。

なんでだよ！

足りなかったのは、最後の一点ポイントだけだった……。三セットの合計で言えば、部長の方が多くポイントを取っていたのに……。

本当に僅差だったんだ！

部長が頑張っていた事を、部長が色々な決意を持ってこの大会に挑んだ事を、俺は知っている。

それに、偽者の俺とは違う。

部長に足りなかったのは、絶対に努力じゃない。

才能とか、時の運とか、得体の知れない『何か』だ。

俺には、その『何か』が憎かった。

その『何か』の存在を絶対に認めたくなかった。

肝心の部長は、爽やかで曇りの無い大きな笑顔で「ゴメン。トイレに行つて来る」とだけ言っていた。

部長がトイレから戻ってきたのは二時間後で、閉会式も終わり、会場の片付けも終わっていたのだけど……。

バドミントン部の誰もが何も言わなかった。

そこにいる全員が理由はわかつていたのだから。

他の部員たちは俺ほどに、部長の事情に詳しく無いだろう。

それでも、部長の努力は、そんな事情を知らない部員たちの心に届くほどに、確かなものだったんだと思う。

なにより、「ゴメン！ 特大ウンコだったんだ。本当ゴメンな！」
と言っていた部長の目はまだ赤かった。

俺たちは作り笑いを浮かべながら、楽しくも無い会話を無理やり盛り上げながら、駅に向かった。俺たちの作り笑いの中で、部長の爽やかな笑顔が一番本物に思えた。

俺の中での罪悪感が一際大きくなる。

部長が県大会にいけなくなったのだから、俺の中の矛盾は解決したはずだ。

それでも、この時の俺は、大きな割合で決意を固めつつあった。

それを決定付けたのは、夜になってからだ。佳代ちゃんからの優しいメールは五通も届いていた。それが原因だったのかもしれない。布団の中で、一人悔し涙を流していた時、俺は気づいた。

部長の努力には一つの欠陥があるのだ。部長が俺のために費やした時間は少くない。

それは、この一ヶ月半、練習に付き合ってくれたことに限らない。一年生の時も二年生の時も、貴重な自分の時間を使い、部長は俺を気遣ってしてくれた。

決して努力しようとしなかった俺に、諦めずに、嫌な顔も見せず、誠意を持ってぶつかってくれていた。

もし俺が最初から頑張っていれば、今日、部長は県大会に行けたのかもしれない。

もちろん、それを確かめる術は無い。結果は変わらなかったのかもしれない。

それでも俺にとっては、『昔の俺』こそが部長の敗因だった。

部長の邪魔をした『何か』の成分に、俺の存在は含まれている…

…。

翌日には、個人戦のダブルスの部が行われたのだけど、そこでも部長は県大会にいけなかった。

それから数日、俺は朝連もせず、久しぶりのゆったりした、それでも何故か寂しい、そんな登校時間を過ごした。

昼休みも静かだった。名物の反復横飛びが突然消えたのに、クラスメイトたちは、何も言わなかった。

大川も話しかけてくるのだけど、最初に「君は頑張ったよ」と言っただけ、部活の話はしなかった。

そしてある日の放課後。俺と部長は、最後の部活動に参加するため体育館にいる。

今日は挨拶だけなので、制服のままだ。

悲しみの欠片も見えない、爽やかな笑顔で、部長は挨拶をした。

「残念な結果になってしまったけど、ここでの思い出は確かな俺の財産です。それを与えてくれた、みんなに感謝の気持ちを述べたいのですが……。残念な事に、この気持ちを表せる程の言葉を知りません。だから、ありきたりな一言ですが。本当にみんなありがとう！」

そして、部長は、まだフォームが乱れているから素振りを怠らないように、と一年生にアドバイスを送る。

スマッシュもブッシュも力強いものを持っているからコントロールを磨けよ、と副部長にアドバイスを送る。

最後に。

県立体育館を教えてくれてありがとうな、お前のおかげで後悔は微塵もない、と俺に言葉を送る。

俺に送られた言葉だけは偽者だった。俺は部長を騙すために県立体育館に誘ったんだ。

どこまで、お人好しなんだよ！

俺はやつと行動に移せた。

帰ろうとしている部長を呼び止め、俺が一ヶ月半前まで愛した定位置、つまりはステージ上に、俺は部長を招待した。

二人で並んで座り、二人つきりになったバドミントン部を眺めながら、俺の想いを伝えた。

「部長は頑張ったんだ。せめて、片思いの相手に想いをぶつけろよ」俺は佳代ちゃんを諦める決意を固めた。

それでも、事の顛末を、佳代ちゃんの選択にゆだねる方法を選んだ。

まだ、未練があつた。

部長は、爽やかな笑顔を消して、無表情のまま目を瞑る。そして語りだした口調もいつもと違って、重々しいものだった。こんな部長を見るのは初めてだ。

「駄目だ。俺は自分に課した目標を達成できなかった」

その声には、揺るぎない信念が見える。

それでも俺は、何が何でも、今日は引き下がらないつもりだ。

「結果が大事なのかよ？ 部長自身が、さっき言っただじゃないか。

『後悔の微塵もない』って！ それじゃ駄目なのかよ！」

部長は目を瞑^{つぶ}ったまま、静かに首を振る。

「駄目だ」

真面目な部長の事だ。俺だって簡単に事が運ぶとは思っていないかったさ。

俺は手法を変える事にした。

「俺がこの一ヶ月半頑張った理由は、彼女が出来たからなんだ。その彼女はちよつと天然でさ。俺の事を『努力家で優しくて純粋な男』だと思ってるんだよ。だから、俺は変わろうとしたんだ。多分だけどな。俺にも自分の気持ちが悪くわからないけどさ」

部長は口だけで小さく笑いながら、いつもの爽やかな口調で。

「そう言うことだったのか。どうしても、急に頑張ってくれるようになった理由がわからなかったんだよ。お前らしい理由だな。でも、俺はその『努力家で優しくて純粋な男』は間違いなくお前だと思うぞ。少なくとも、今のお前はそうだ！」

と言った。俺はこの手法に手ごたえを覚え、それでも焦らずにじ

つくりと、部長と言う頑固要塞を攻略する。

「その彼女が、部長の好きな人なんだ……。俺は迷ったよ。彼女を手放したくないし、部長も好きだし。何より彼女の好きな『努力家で優しくて純粋な男』は部長だと思う。部長ほど、この言葉にふさわしい人間はいないと思うんだ。だからさ。今日は俺なりに覚悟を決めてきたんだ」

目を開き、今度は目だけで笑いながら、部長は答えた。

「なんとなく、お前と彼女が付き合っているのは感づいていたよ。ずっと片思いだった人に突然彼氏が出来るんだ。シヨックだったぞ！ それでも、俺は諦められなかった。だから、県大会に出場出来たら、と言う条件をつけたんだ。俺自身、行けると思っていたから。それでも、俺がその目標を達成できたら、お前に遠慮することなく彼女に気持ちをぶつけるつもりだったんだ」

その遠慮する相手、つまりは俺が良いって言ってるんだぞ！

「今ぶつけるよ！」

と俺が言つと、部長は再び目を瞑り、頑固な口調で。

「駄目だ」

と言つ。

駄目なのは部長の性格だ！

部長への謝罪の念から始めた事なのに、気がついたら、俺は部長がなんかムカついてきた。

「良いから告白しろ！」

「駄目だ」

を六回繰り返したところで、我慢の限界だった。俺は力いっぱい床を殴りつける。

思っていたより、拳が痛かった。

部長は目を開き、小さく微笑んでいた。

「お前は馬鹿な男だよ」だとよ。

馬鹿なのは部長だよ！

俺は、再び手法を変えることにした。命令して駄目ならお願いし

てみる。押して駄目なら引いてみるだ。

「俺は毎日不安なんだよ。彼女が見ている偽者の俺と、本物の俺を比べてさ。必死にあがいて、それでも不安なんだよ。それは、部長がいるからなんだ。俺のために頼むよ。どんな、結果でもお互いに恨みつこなしだ」

俺の計算から出た言葉のはずなのに、それは本音でもあるので、自分の発言が自分の心に突き刺さる。

俺は部長に勝てないのを知っている……。

「お前のためなのか？ 本当に、それで良いんだな？」

部長が折れ始めた。もう一押しだ。

違った。もう一引きだ。

「ああ。今日に限らない。部長の努力が実ったのなら俺は諦める。他の奴だったら、譲れないって足掻くけどな。部長は別格だ。特別なんだよ。だから、俺のために頼むよ……」

「そうか……」

部長はそう言って、瞑想するかのごとく、再び目を閉じ黙り続けた。

俺も「ああ」とだけ返した。

それから、十分後。

部長は突然立ち上がる。

薄黒く焼けた肌は、赤みを帯びていた。

そして、一步一步、緊張の重さが乗っているかのような足取りで歩き始める。

その後姿には言葉に出来ない頼もしさが見える。

今更、俺が「やっぱり、止めてくれ！」と言っても、彼を止める事は出来ない。もう、彼を止めることが出来る人間は、この世に存在していないだろう。

そんな、力強さを見せる後姿だった。

と言うかさ、部長よ。どこ行くんだよ？

俺に何か言ってくれよ。

意味がわからん。

そして部長は、県大会出場を当然の如く決めた女子バレー部の隣まで移動し、大きな声で、練習に割り込むように言った。

「大川さん！ あなたがある男性とお付き合いしている事は知っています。それでも、僕はずっと、あなたが好きでした！」

だってさ。

部長らしくなく、落ち着かない様子で、両手の指を無意味に絡ませては、解き、再び絡ませている。

この時、俺は全てを理解した。

部長がずっと恋していた人物は、黒髪の綺麗な人で、芯が強く優しい女性で、正に日本女性のような人だ。

俺には唸る所が多々あるのだが、特に『優しい』の部分を鬼教官の思い出が邪魔するのだけど、大川が世話焼きなのは確かなので優しいとも言えるのかな、と言う俺の軽い混乱はどうでも良くて。

とりあえず部長にとって、大川はそういう人物なのだ。

そして最近、俺は大川とよく話すようになった。昼休みに二人っきりの特訓もしたし、朝連参加の時だって仲良さそうに見えたのかもしれない。『大川ミーちゃん事件』の時には部長の前で、「大事な話がある」とか言って呼び出したしな。

俺は勘違いをしていた。部長も勘違いした。

その大川は「ん〜ん？」とか気の抜けた返事をする。

「私は彼氏なんていないよ〜」

と言う大川の言葉を聞いて、顔だけを捻って、爽やかじゃない視線で、部長は俺を睨む。

きつと部長の中では、俺は嘘つき認定されているんだろう。後で説明が必要そうだ。

そして、大川は恥らう様子も見せていない。

「私も好きだったんだよっ！ 羽場君は根性あるもんね！ ずっとずっと頑張っていたからね〜！ 一年生の頃から、うちの朝連に参加したり。他の頑張っている事だって知っているよっ！」

部長は、俺の事を忘れて照れていた。モジモジしてモゴモゴして、ろくに言葉が出てこない、その様は爽やかじゃなかった。

呆氣にとられていた女子バレー部員が騒ぎ出し、俺と部長の会話が聞こえていただろうバドミントン部の後輩は俺を見つめてくる。

俺は「俺と部長の勘違いだ。俺の彼女は大川じゃない」と教える。

スゲー恥ずかしい。

今度は、ロボットダンスのように、ぎこちない動きで身体全体を無意味に動かしている部長に、大川は。

「それじゃ練習があるから。またあとでね」

と告げて練習に戻っていった。

右手と右足を同時に出して、左手と左足を同時に出す、そんなアニメみたいな歩き方で、部長はステージまで戻ってきた。

部長が呆けている間に、『嘘つき！』と責められる前に、事情を説明しとかないと。

「俺の彼女は、別の高校でバドミントンをしている高校一年生なんだ。大川とは別人だよ」

聞こえているのか、いないのか、部長は「そうか」と言った。

その表情は、爽やかじゃない、だらしない、にやけ顔だった。デレデレしていた。

部長がこつちの世界に戻ってくるのには、二時間の時間が必要だった。そのため、久しぶりに女子バレー部の練習を眺められたのだけど……。この日、珍しい事に、大川はミスを連発していた。

確かに、部長の努力は、地区予選大会では形にならなかった。

ム力つく『何か』が部長の努力を認めなかった。

それでも、大川は部長の努力を認めた。

俺はそれで良いと思う。

どんな形になるのかはわからないけど、努力は世界にちゃんと残るんだ。

十七歳が思うには、幼い発想かもしれない。

こんな夢みたいな事を言うのは、俺が嫌いなタイプの人間みただけど……。

それでも、そうだと信じたい！

さて。俺は自分の状況把握能力に疑問を覚え始めている。『大川ミーちゃん事件』と『部長良かったね事件』を参考にさせてもらうと、鍵少年の正体は想像がつく。

俺は計画決行のために、必要な準備をする事にした。

準備と言っても、その殆どが情報収集なのだが、最後の仕上げとして、佳代ちゃんに嘘をついてもらう必要があった。可憐な彼女に嘘をつかせるのは、心苦しかったけど……。

そして、二週間後の土曜日。

俺は準備を終えて、鍵少年を罠にかけた。

朝から一時間毎に、マンションの共有玄関を確認する。俺は鍵少年が待ち伏せするように餌をまいていたんだ。『今日、佳代ちゃんと三回目のデートをする』と。それが、佳代ちゃんについてもらう嘘だった。

俺たちは今日はデートをしない。

俺がリビングルームでコーヒーを飲みながらテレビを眺めていると、妹が話しかけてくる。

「あれ？今日は佳代ちゃんとデートじゃないの？」

だるそうな妹はパジャマだった。

「あゝ。俺が風邪引いちゃってさ。今日は止めたんだ」

と俺が答えると。

「なゝんだ。それなら、佳代ちゃんと遊びたかったな。今から電話するのも……。あの娘、家を出る準備に凄く時間かかるのよね。もっと早く言つてよ。馬鹿兄貴」

とこれまた気だるそうに言うのは良いのだけど、嘘とは言え『風邪を引いている兄貴』を心配する様子を見せないのは、どうなんだ？

「悪いな」

俺はとりあえず謝った。今日は妹を怒らすつもりは無い。

「別に、どうでも良いけど」

と言う妹を見て、誰に似たのか無気力な妹を見て、俺は彼女の将来が心配になった。いや、残念ながら今はそれ所ではない。

鍵少年が現れたのは、十一時だった。

俺は直ぐに外に、マンションの外門に行く。

鍵少年は、マンションの中から俺が出てきた事に驚いていたが、気を落ち着かせて、俺を睨みつけてくる。

それでも、俺の心は余裕たつぷりだ。なにせ、今日の俺は、対鍵少年兵器を沢山持っているからな！

相変わらず、話しかけずに睨みつけるだけの鍵少年に、俺の方から声をかけた。

「や！ こんにちは」

「てめえ！　なんで、家にいる？　デートはどうした？」

とこれまた、悪意に満ちた返答を貰った。

俺はなんかムカついたので、瞬時にプラン変更！　意地悪な方法を選んだ。

「お前の気持ちはわかってる」

と俺が言つと、鍵少年は面白いほど動揺していた。

「ななな。な、なん。な！　なんで」

と『な』を七回言っていた。

俺はさらに鍵少年を罵にはめる！

「だから……。お前には負けたよ。俺は佳代ちゃんと別れる」

もちろんそんな訳は無い。佳代ちゃんがずっと俺を選んでくれるかは置いといてだ。部長以外の人間に佳代ちゃんを渡すものか。

でも、鍵少年は頭をかきむしりながら、頭を振り回している。パンクバンドのコンサートみたいだった。

「幸せにしてくれよ」

と俺が言つと。

「ち、ちが。ち、ち、ちがう！　ちが！」

と出血して無いのに、騒いでいた。

ここまでは、ちよつと計画と違うけど、良かったんだ。

問題はその後だ。

顔を真つ赤にしながら、叫ぶように鍵少年が言った台詞。

「俺が。俺が好きなのはあんたの妹だ！　佳代ちゃんと遊べない日には確実に家にいると思ったから、告白したくて、家に来たんだよ！　あんたに佳代ちゃんの事を聞いたのは、将来のお兄様に挨拶しようと思っただけなんだ。でも、上手く話せなくて……」

多少引つかかる所はあるのだけど、これは良い。寧ろ計画通りなんだ。^{むし}

本当は、妹の趣味とか誕生日とか教えながら、動揺を誘うつもりで、そのための情報収集だったんだ。

そして、最後にこの台詞を鍵少年に言わせて、俺は恋のキューピッドになるつもりだった。この『妹丸秘データ』を記したノートを渡して、色んな作戦を伝授しようとしていた。

それは、どうでも良い事で。

大事なものは、鍵少年の直ぐ後ろに、妹がいる事なんだ。

妹が手に持つてるレンタルDVDの袋を見るに、彼女が何故外に出てきたのは、返却するためだろうな、なんて俺の予想は正にどうでも良い事で。

ローテンション蛇頭女がタイミング良すぎるって事は、結構大事な事なんだけど。

もっと、大事なものは、妹が言った台詞だった。

「別にいいよ。私、彼氏いないし」

情緒のかけらも無い、冷めた言い方だった。

それを聞いた鍵少年が嬉しそうに、上半身だけが妹のほうへ移動しようとして、転びそうになりながら。

「ほ、本当か？」

そして、妹は『どうでも良い』って声が聞こえてきそうな、欠伸

を一つしてから。

「うん。別に、付き合ったら直ぐキスとかするわけじゃないでしょ？ だから、柿沼君^{かきぬま}がタイプじゃなかったら、お別れすれば良いし」
だつて。

冷たい。俺はこんな女は絶対嫌だ。

でも、俺が仕入れた情報、と言うか妹本人から聞いた情報では、妹のタイプは『兄貴に似て無い人』で、俺も『妹みたいな女は嫌だ』
と思っっているの、全然似て無い俺たちも、ある意味では似た者兄弟なのかも。と言う俺の思考もどうでも良くて。

鍵少年が嬉しそうに目を輝かして、何故か俺の手を握り。

「お兄さん。よろしくな！ 佳代ちゃんと別れるなよ！」

とか言うんだけど、まだお前の兄にはなつて無いとか、何でため口？ とか、佳代ちゃんの事を苗字で呼べよとか、色々思うことはあるのだけど、鍵少年に一番言いたいのは『こんな女で本当に良いの？』って事なんだ。

鍵少年が妹の手を繋ごうとする。妹はダルそうに鍵少年の手を叩く。

そんな感じで、二人はレンタルDVDを返し行つた。哀れ鍵少年。その後姿を見ながら二人の関係は長く続かないだろう、と俺は思った。

俺は『ローテンション』と『クール女』の因果関係について考えながら、佳代ちゃんにメールで結果を報告した。

やっぱり、佳代ちゃんの返事は『あなたらしいですね。人の幸せのために動けるなんて！』と勘違いしているものだった。

それでも、俺は否定する気はなかった。

部長と言う強敵すぎるライバルの不安もなくなったし、俺自身、自分の変化を感じ取っていた。今日も、妹と鍵少年を見送る時、なんか嬉しかったし、佳代ちゃんのメールも勘違いじゃないのかもしれない、とさえ思っていた。

問題なのは、俺は鍵少年に『丸秘妹データ』を書き記したノー

トを渡しそびれたんだ。

二人は直ぐに帰ってくるだろうと、マンションの外門で待っているんだけど、あいつら全然帰ってこないのな。

一時間待って、諦めて家に戻り、すっかり忘れた頃に、妹が帰ってきた。

時刻は二十二時ジャスト。

「別にどうでも良いけど、兄貴、風邪は大丈夫なの？」

そう言った、妹の表情は、どうでも良くなさそうな笑顔だった。

ローテンション女の明るい笑顔を見たのは、佳代ちゃんが俺に告白した時以来だ。

俺の予想を裏切って、鍵少年と妹は相性が良いらしい。

二人つきりになったバドミントン部は気づけば、七人に増えていた。思わぬ所で、俺の昼休みの特訓は役立ったみたいだ。

何故、俺たちが引退した後に人数が増えたかと言うと、噂から推測するに、下級生が『エロイ目付きのサボり魔変人』を避けているのは確かみたいだった……。

とにかく、変な事がキツカケではあるけれど、バドミントンは俺の高校で小さなブームとなっていた。

部長が、この時になって、初めて教えてくれたのだけど……。

バドミントン部は、人数不足で廃部の危機だったらしい。

「お前のおかげで、バドミントン部は救われたな！」とか勘違いした発言をしていた。

進学しない部長は、地方公務員になるために勉強をしている。バドミントンに捧げていた時間の多くを勉強に費やして、残りの少しの時間を、やっぱりバドミントン部への練習に参加している。少しは遊べよな。

大川は危なげなく、全国大会に駒を進めていた。更には、大学に進学する事が決まったらしい。

県大会の活躍で、既に、地元大学からスポーツ推薦の話が来たみ

たいだ。

俺は何を目指すかも解らないまま、とりあえず受験勉強をしている。

そして、佳代ちゃんとは、三回目と四回目のデートを経て、俺は殆ど罪悪感を感じない関係になっていった。

俺は確かに変わっているはずだから……。

まだまだ、佳代ちゃんの理想とは程遠いにしてもだ。

問題なのは、俺と佳代ちゃんは、初デートでキスまでする関係になったはずなのに、それ以降のデートは清すぎる男女交際だった。切ない。

でも、かなりの頻度で、逆プロポーズはされている。

こんな感じで、俺の一学期は終わった。

まあ、ここまでは良かった。

俺自身も、戸惑いながらも、変化する環境と自分に満足していた。

三章 俺はもう変わりたくない！

炎天下の日差しが、俺を焼き殺そうとしている。

俺の感性とは合わないらしく、蝉の奏でるオーケストラも非常に不愉快だ。

そんな、八月下旬の土曜日。

天気は遠慮して欲しいほどに快晴。俺の心は大雨。

『やべーよな。地球温暖化は深刻だ』って今の俺、いや、毎夏の俺が思っているのは、どうでも良い事で。

『やべーって。地球温暖化は嘘だったんだ』なんて毎冬の俺が必ず思うことも、どうでも良い事で。

大事なのは『なんか、俺、総理大臣になるために演説しているんですけど』って事なんだ。

多分、これで理解できる人はいないだろう。俺自身、なんでだよ！　って叫びたいんだ。

順を追って説明するかな。

現在、日本の与党は、衆議院も参議院も日本夢見党だ。略して夢見党。

その夢見党は、三年前の夏、三十年の悲願を経てついに与党になった。

そして、彼らの政策はあまり良いものではなかった。

例えば、高校までの授業料は無料にする。国公立なら大学だって無料にする。と言う法律を作ったのは彼らだ。

その内容が悪いんじゃない。

夢見党の連中は、金の事を全く考えちゃいないんだ。

最初の半年は、国民優先政治。夢見がちな絵空事政治は、評判が良かった。

だけど、金が無いんだよ！

次第に元与党に責められ、マスコミにも責められ、最後には国民

にも責められた。

最初から諦めているのと、希望を見せてから諦めさせるのでは、同じ結果でも、人々に与える影響は大きく違う。

ドラマとかでも聞いたことあるだろ？

「お父さんの馬鹿！ 日曜日に遊んでくれるって言ったのに、何で仕事なのよ！」ってな。

そんな、夢見党が行った起死回生のための作戦。

それが総理大臣を十五歳以上の立候補者から国民総選挙で選んじやうか。と言う物だった。その選挙を実現するために、法律だけでなく、憲法まで変えやがった。

意味がわからない。

でも、それだって、どうでも良い。

正直、選挙権も無い俺には、政治の世界なんて創作物語の世界と等しかった。

そのはずだった！

でも、俺は総理大臣選挙に立候補してしまった！

しかも、結構、当選するかもしれない危機だ！

わかるだろう？

俺が「なんでだよ」って叫びたい気持ちが。

更に詳しい説明をするためには、一ヶ月ほど時間を遡る必要がある……。

暑さなんか関係ない。幸せ一杯、夢一杯。蝉の美しい声を聞きながら、夏を実感し、彼らの短い成人期が幸せである事を祈らずにいられない。多分、全国の高校生がそんな気持ちだろう。

そんな、夏休みに入っすぐ、七月下旬の土曜日だった。

部長は『俺と大川が付き合っていなかった』事を、概ね信じて、微妙に疑っていた。そこで、部長と佳代ちゃんを対面させるために、ダブルデートを企画したのだ。

俺たちは県を中心街の駅で合流した。やっぱり佳代ちゃんは大人

びた洋服を来ていても大和撫子で、部長はキザっぱい半そでポロシヤツを着ていて爽やかだった。

だけど、大川はボーイツシュじゃないスカート姿だった。部長の前だからか？

佳代ちゃんと大川は、なにやら女性の会話をしている。

「ねえ。佳代ちゃん。今度、お弁当の作り方を教えてよっ！」

「ゴメンなさい。私もお料理が苦手なんですよ」

みたいな。

佳代ちゃんが料理が苦手なのは意外なのだけど、なんか彼女の料理は恐ろしい物でも納得出来る気もする。

女性陣二人が会話を楽しんでいるスキに聞いてみたら、部長は佳代ちゃんを知らなかった。バドミントンの大会で何度か会っているはずなのに……。

こんな可憐な女性を見逃すなんて、部長は人生の楽しみ方を知らないバドミントン馬鹿だ。

そして、俺たちはカラオケで遊ぶ事になる。

部長は爽やかな青春ドラマの主題歌を主に歌っていて、部長特有の心地よい声も爽やかで、薄黒く焼けた肌から見える歯も白くて、目を瞑^{つぶ}って歌う様は部長以外だったら鳥肌が立つほど寒い光景なんだけど不自然じゃなくて、それでも、スゲー音痴だった。

どのぐらい音痴かと言うと、その異常さに、佳代ちゃんはもちろん、大川も俺も、その事実をなかったことにしたぐらいだった。いや、何故か褒めてしまった。

大川は『犬のおまわりさん』を歌ってくれなかった。俺が「いいじゃん。歌ってよ」としつこく迫ると、一瞬だけ鬼の表情を見せた。

その大川が何を歌ったと言うと、『頑張ろうぜ！』とか、『俺たちは何でも出来る！』とかがメッセージと思われる歌ばかりだった。大川らしい、前向きな歌が多かった。

それは、どうでも良い。

大事なのは、佳代ちゃんの歌を、俺は初めて聞いたと言う事だ。
佳代ちゃんは、「ポップばかり歌っていて、その全てがラブソングだった。」

音に色は無いはずなのに、佳代ちゃんの澄んだ歌声は、無色透明の美しさがあった。澄み切っていた。無色透明なら結局見えないじゃない！ って話は受け付けない。俺にはその美しさが見えたね。これだけは譲れない。

もちろん、佳代ちゃんがラブソングを歌った時に、俺は歌詞と自分を重ねて照れていたのだが、それは置いてこう。

その俺は、ロックばかりを歌っていた。ロックと言うと、『ラブアンド ピース』と言うイメージが強いのは何故だろう。

俺に言わせれば、ロックとは『レット イット बी』だね。伝説的ロックバンド、ビートルズだって歌っているだろう？ 自然体な俺で良いのさ！

だけど、最近、俺自身の変化が嬉しいのも事実だった。
カラオケルームに、係員からの『あと五分ですよ』コールが届いた時の事だ。

学習しない俺はデート費用を男二人で割り勘しようとして、いつも通りの佳代ちゃんが。

「え？ それは困りますよ……。もしかして、ついに結婚の決意を固めてくれたんですね！」

とか、スッゲー嬉しそうに聞いてくるんだけど。

部長と大川はそれを笑わなかった。寧ろ、無言で俺と佳代ちゃんを見つめる二人の視線には、尊敬と憧れが見えた気がする。

多数決の理論により、俺は自分の常識を疑いかけた。

多分、こいつらが変人なはずだ。俺は自分に言い聞かせる。

結局、カラオケはみんなで割り勘する事になった。

それから、少し遅いランチを食べるため、俺たちはファミリーレストランに向かったんだ。

ウェイトレスさんに案内されたのは四人掛けのテーブルで、俺と

佳代ちゃんが並んで座り、向かいに部長と大川が座る。

部長がキザっぽく魚介のスープスパゲティを食べた事も、大川がコテコテのステーキ定食を食べた事もどうでも良い事だ。

佳代ちゃんが、可愛らしい茄子とトマトのドリアを食べていたのに、やっぱり大和撫子だったのは、今回は大事じゃない。別に、『ドリア』がイタリア料理じゃなくて、日本発祥みたいだからと言う事も大事じゃない。考えてみれば、米を使うんだから、日本で生まれた料理でも不思議では無いよな、なんて事もどうだってよい。

大事なのは……。

隣の席に座った、二十代の男性五人グループの声が大きかったんだ。

そいつらは、夢見党の話をしていた。

俺は夢見党が嫌いだった。

だから、ポツリと一言。デート中だというのに、愚痴ってしまった。

それが全ての原因だったと思う……。

「夢見党は駄目だよな。もっと、出来る事を言えよ」

と俺が言つと、紙のナプキンで口を拭いてから、部長は冗談を乗せた口調で。

「夢見党が気に入らないなら、お前が変えてやれよ！ ほら、総理大臣選挙あるだろ？ あれ、今日まで申し込み出来るんじゃないかなかったか？」

とか言つて、それを聞いた大川は油たつぷりのステーキで、化粧つけの無い顔に、ナチュラルグロスを塗りたいくりながら、

「良いねー！ 選挙には、体力も必要だよっ！ 私がコーチしえてあげるよー！」

とか透明な竹刀を地面に叩きつけながら、いろんな意味で恐ろしい事を言うのだけど、それも冗談だった。

佳代ちゃんはやっぱスローな食事をしていて、俺たちの食事スピードの三分の一だったんだけど、それはどうでも良い事で。

神様に祈るように、胸の前で指を組み合わせる。

「素晴らしいです！ あなたらしい発想ですね！」

とか言ってくるんだけど、佳代ちゃんだけは冗談を言っていなかった。

と言うか、俺が今日までに得た経験則から言わせて貰うと、佳代ちゃんは冗談を言った事が無い。

更に言わせてもらおうと、佳代ちゃんは『あなたらしい』とか言っていたけど、俺は総理大臣選挙について、何も発言はしていない。

不穏な空気を感じた俺は。

「いや。流石に無理だよ」

と柔らかに拒絶の意思を伝えた。

それを汲み取ってくれた佳代ちゃんは、驚愕と謝罪の表情で。

「ゴメンなさい。私ったら駄目ですね」

そして、佳代ちゃんは謝罪を続ける。

「立候補するには、『供託金』が必要なんですよね。高校生に支払える額ではなさそうです……」だってさ。

違うよ。佳代ちゃん、問題なのはそこじゃないんだ。

ちなみに、供託金って言うのは、『議員選挙』とか、『知事選挙』とか、色々な選挙において身代金のようなものを、立候補者は公的機関に納めるんだ。選挙の結果が、余りに悪いと収めた供託金はそのまま没収されてしまう。公的な立場に立候補するのだから、ある程度の覚悟と責任感を持って！ とい制度らしいが、それはどうでも良い事だ。

大事ななのは、佳代ちゃんの謝罪を聞いた部長がフオークをテーブルの上において、食事を止めてまで、俺の瞳を見つめながら。

「初めて行う総理大臣選挙だからね。夢見党も話題作りのためのお祭り騒ぎ的な意味も含めたんだろう。今回は供託金が必要ないんだ。選挙活動だって、工夫次第で高校生でも出来ると思う。今は情報化の社会だからな。ホームページを作って、そこで文章や動画を配信するだけでも効果があるかもしれない」

とか理系っぽい事を言って、その表情には冗談色が見えなかった。
大川も同じで。

「そうだね。でも、やっぱり生の声は大事だよ！ 駅前とかで演説するとかどうかな？ あ、私はメガホン式のマイク持っているんだ」

とか言い出した。

大川がメガホン式マイクを持っている理由は想像付くので、その理由はどうでも良くて。大川まで真剣な表情になっていた。

みんな笑えよ。ニヤニヤしろよ。

肝心の佳代ちゃんは。

「みなさん、ありがとうとございます！」

とか言い出して、いつの間にか佳代ちゃんの中では、既に『俺が立候補する』事は案件ではなくて決定事項になっているらしく、それは俺を除く、このテーブルの三人の意思でもあった。

「それじゃっ！ 『目標は急げ』だね！」

と大川が改変したことわざを披露して、急ぐ事になったのだけど、佳代ちゃんが食べ終わるのは三十分の時間が必要だった。

そうして、俺は総理大臣選挙の立候補届けを提出しに行く事になる。俺は『どうせ、俺が立候補しても選挙で勝てるはずも無い』と思っていたので、とりあえず、この場の流れに任せる事にした。

と言うか、この個性派変人の三人を相手に、どう拒否権を発動しているかわからないのも、大きな理由だったかもしれない。

誰か俺を助けてください！

俺たちは県庁に向かったのだが、県庁らしくないリムジンが駐車場にあったのが気になる。リムジンと悪人を結び付けてしまうのは、俺だけだろうか？

いやいや、県立体育館も何故か立派だったし、やっぱり、うちの県知事は悪い男なのだろう。
そして。

県庁の受付のおばさんに書類を貰い、椅子なし立ち机で、必要事項を書いている時、おっちゃんが話しかけてきたんだ。

「お前も立候補するのか？ 何故、今更書類を書いているんだい？」
野太い声。太い身体。ボサボサ頭の五十代と思わしきおっちゃん。
おっちゃんの後ろにはクソ熱い夏に背広の上着を脱ごうとしない、
なんか怪しい雰囲気のあるオールバックの髪型とサングラスをした、お
じさんとお兄さんのペアがいる。

おっちゃんの隣には、「ザマス」なんて語尾で話し始めそうな、
チヨココロネ帽子みたいな髪型に教育ママみたいな尖ったメガネの、
美人と言うべきか否か悩むボーダーライン上の、秘書が一人いる。
なんか偉そうなおっちゃんを、俺は知っていた。

彼が持っている書類には、名前が見えたのだけど、それには金田^{かねだ}
修三と書いてある。

おっちゃんは有名人だった。

「ええ。立候補しますよ。書類をここで書いている理由ですか？
今日、思いついたんです」

俺は彼に説明するのだけど、改めて言葉にするとさ、俺達アホの
子だよな。

総理大臣選挙に無謀にも立候補する高校生で、しかも、締切日当
日に立候補を思いついて書類を提出するの。

それは、もちろん、おっちゃんも同じだった。

「君は馬鹿だな！ 本当に立候補する気かい？」

と発声練習をしているように、腹に手を当てて笑っている。

おっちゃんの取り巻きたちも、声を出さずに小さく笑っている。

大川仮夫妻は。

「馬鹿という奴が馬鹿なんだよっ！」

「そうですね。人の努力を笑う人間を、馬鹿と言つべきだと思いま
すよ」

と反撃するのだけど、今は、俺はおっちゃんの味方だね。

俺の変わりに、こいつらを止めてくれ。

今ならまだ間に合う！

美人かな？ 的な秘書は、手帳みたいな、PDAだかミニノートパソコンだかを広げながら。

「公的機関の発表ですと、現在、三百六十四人の立候補者がいます。そのうち、高校生の立候補者は、一人しかいませんね。これは昨日までのデーターですので、あなたが二人目となります。もう一度言いますよ。二人しかいないのです。愚かと思われても仕方が無いと思いますけどね」

と、キラリンと幻聴を鳴らしながら、メガネの位置を直していた。嘲笑するおっちゃん集団、睨む大川仮夫妻、そして、佳代ちゃんは綺麗な笑顔で。

「彼は素敵な人なんですよ。努力家で優しくて純粋な若者なんです！」

と会話の流れを無視して、俺を褒めていた。

「まあ、せいぜい頑張りたまえ！」

おっちゃんは、毒気を抜かれたのか、悪代官のような嫌らしい笑い声を響かせながらも、外へと消えていった。

オールバックのおじさんが、俺に耳打ちするのだけど。

「ゴメンな。少年。あの人も今日、立候補届けを出したんだよ」だって。

そんな事は、どうでも良いんだよ。

もっと、頑張れよ。粘れよ。おっちゃん！

俺のピンチを救えるのは、多分、あんただけだ！

この日の夜。夢見党のホームページには、立候補者の名簿が掲載されていた。

淡い期待で、その名簿を確認するのだけど。

俺が総理大臣選挙レースに出場する四百二十九人のお馬さんの、一人になったのは確かなようだ……。

こうなってしまったからには、頑張るしかないよな。俺が頑張ると、部長も大川も褒めてくれるし。何より、佳代ちゃんが喜んで

くれるし。

ただ、受かるはずの無い総理大臣選挙のために、受験勉強の時間を奪われるのは、ちょっと不満だ。

次の日の日曜日午前。俺たちは再び集まる事になる。場所は俺の家。選挙用ホームページを作成するためだ。

ちなみに、大川だけは午後から合流する。バレー部の練習があるからな。

部長がパソコン前の特等席に座り、俺が隣に座る。佳代ちゃんは、俺たちの後ろからパソコンを覗き込むように立っている。

ホームページ作成と言っても、USBメモリを持ってきた部長は、わざわざ睡眠時間を削ってまで、ある程度ホームページの土台を作ってくれていた。

だから、今日は俺の選挙理念を考える事が第一目標だった。でも、これについては直ぐにまとまった。

「やっぱり、俺たちの弱点は知識不足と人脈のなさで経済力のなさだ」

と部長は言うのだけど、俺からは当然疑問が出る。

「部長。それって俺たちに長所が無いってことじゃない？」

「そうですね。あなたの長所は、文章では伝わりにくいかもしれないません」

そうか。佳代ちゃんが見ている俺は、俺っぽい偽者の俺なんだ。

本当の俺には長所なんてありませんよ？

だけど、部長は。

「だからこそ、理念の一点押しで頑張ろう！」だってさ。

「俺の理念ね。みんなで助け合う世の中、とか？でも、金が無いと出来ないよな。口先だけなら、夢見党と同じじゃん？そんな奴に存在価値は無いって」

「あなた、それは違いますよ。目標があるからこそ、頑張れるんです！」

「そうだな。目標は大事だよ。でも、やっぱり、お前の長所を前面に出しつつも、さわり程度には解決策を提示しなきゃな」

こんな感じで、なんか立派な文章をまとめていた。

それは、今後、俺が演説するために参考にさせてもらう事になるんだけど、今はどうでも良い。

次にホームページに乗せるための写真を撮ることになる。

午後一時半。

大川と合流し、俺たちは、電車で二つ隣の駅へ移動して、大きな自然公園に行った。家族連れが多く、周りに自然もあって、五月蠅い都会の喧騒も聞こえてこない。普段は感じない、草の香りが、今は夏だと思い出させてくれた。

そんな自然公園は、俺たちが住んでいる世界とは別世界だった。とても、穏やかだった。

その自然公園の雰囲気のせいかもしれない。俺は俺で、結果が駄目になるとわかっていても、総理大臣選挙を頑張ろう、と改めて思った。

いや、違うな。今回に限って言えば、結果が駄目になるだろう、と予想できるからこそ頑張れるんだ。そして、多分俺の中では、佳代ちゃんたちのおかげで『無気力な俺』が消え去ろうとしていたんだと思う。

そして、部長がデジカメで、森林を背景に『自然を愛する俺』の写真を撮ったり、大きな噴水前石段の上で『考える人』のポーズを取る『日本のために悩める俺』の写真を撮ったりした。

恥ずかしさマックスだった。

キャッチボールをしていた三人組の小学生の「あの人たち、変な写真取ってるー！」と言う言葉は、凶悪凶暴で巨大な凶器だった。

写真の構図の殆ども、実は腹黒い部長の案だ。部長の作戦はこれだけじゃない。

俺をメインに写真を撮るんだけど、フレームギリギリに美しい女性を配置する事を忘れなかった。つまりは、佳代ちゃんだ。おまけ

で大川も。爽やかな部長って、実は腹黒いんだ。

この時、俺は『爽やかなスポーツマン』と『腹黒さ』の因果関係を考えると共に、『理系』と『腹黒さ』の因果関係についても考えてみた。いや、それはどうでも良い。

大事なのは、出来上がったホームページはなかなか好評だったと言う事だ。アップした当日に、ホームページのカウンターは五千を記録していた。

これはちょっと先の話になるのだけど、一週間後には、一日にカウンターを十万アクセスで回すほどに、ホームページは好評だった。俺たちなりに真剣なつもりでも、常識的な世間から見れば、高校生の悪ふざけにしか見えないはずなのに……。

なんで、評判になるんだよ！

写真撮影をした次の日。九時。

俺と部長は、再び集合する。大川も佳代ちゃんの姿は無い。彼女たちは部活なんだ。そして、集合場所は昨日と同じ、俺の部屋。

今日も部長は、USBメモリーを持ってきていた。その中身は、自然公園で撮った写真を加工したものだ。

つまりは『自然を愛する俺。見知らぬ幼稚園少女と犬に、愛の視線を送るバージョン』を拡大して、俺の名前と、『溢れる若さ。穢れなき若さ！』なんてキャッチコピーを付け足したデーターが入っていた。

更につまりは、俺の選挙ポスターデーターだ。

もちろん、俺たちに経済的余裕は無いので、印刷屋さんに頼めるわけが無い。そこで、我が家のプリンターで印刷するんだ。A四サイズのコピー用紙で出来た、手作りポスターを作ることが、今日の目標だ。

またしても、部長が予めデーターを作ってくれていたので、午前中で終わってしまった。

そこで、午後からは、その出来立てポスターを配り歩く事になる。

小学生の頃に大変お世話になった、駄菓子屋さんのおばあちゃんに。

「あらあら。あんたが総理大臣になるなんてね。立派に大きくなっただね。」

と言う言葉と、店にポスターを貼る許可を貰った。ちなみに、おばあちゃん。俺はきつと総理大臣にならないよ。

近所のスーパー、つまりは母さんのパート先の女店長には。

「総理大臣になるぐらいなら、お母さんの手伝いをしなさい！」

と言うお叱りと、ポスターを貼る許可を貰った。ちなみに、おばさん。俺は総理大臣になら無いからね。

部長は、そんな様子を見て、白い歯を見せながら。

「お前って、やっぱり良い奴なんだよ。俺もお前の彼女も、人を見る目があったんだな。だって、地元で人気者じゃないか！ もう、彼女の理想とお前のギャップで悩むなよ」

とか言っていた。それはみんなの勘違いだって。

三時頃、佳代ちゃんからメールが入る。

部活が終わったから、合流してくるみたいだ。

俺の地元は、大方周ったし。今度は隣の駅、佳代ちゃん家の近くでポスターを貼ることにした。そこで、俺たちは佳代ちゃんの家近くの駅で落ち合う事になる。

ジャージ姿のまま、合流してくれた佳代ちゃんは、それでもやっぱり大和撫子だった。久しぶりに見る、額を見せたポニーテールの佳代ちゃんを、部長には見せたくなかった。

普段と違う雰囲気佳代ちゃんは、希少価値の高い茶器のように思えたから。

城一つに匹敵するほどの価値があるように思えたから……。

でも、部長は全然興味なさげだ。

これはこれで、すげーム力つくのな！

俺たちは選挙ポスターを貼るのに、県が歩道に設置してくれた、専用の掲示板に向かう。

「やっぱ、改めて自分の写真を見るのは恥ずかしいよ」

「そうか？ 俺はお前のポスター好きだけだな」

「そうですね。あなた。あなたの内面の良さは、外見にも出ています！ だって、あなた程度の顔が、こんなにも格好良く見えるんですもの！」

こんな感じ。微妙に佳代ちゃんの言葉に、無意識的なとげが隠されているのだけど、それは、別段問題ない。佳代ちゃんがちょっと変な人なのも含めて、俺は彼女が大好きだ！

そう、この辺は想定内の出来事だった。

だけど、この時。

「流石は、高校生立候補者だ。若さもあるが、真面目さが足りんな」「そうですね。世の中を知らないお子様にしか見えません」

と、後ろからおちゃんと秘書が話しかけてきたんだ。嫌味なおっちゃん、金田だ。

「俺もそう思いますよ」

俺は答えた。もちろん本音だ。

だけど、部長は。

「確かに僕たちは、あなたみたいにお金の事には詳しくありません。だからこそ、こいつが総理大臣になるんですよ！」

と珍しく怒っていた。

佳代ちゃんは。

「彼は素晴らしい人です」

と笑顔だった。

だけど、おっちゃんはお子様なんかの野次に負けない男のようで。

「応援はするよ。勝つのは私だからね」

高らかな笑い声を上げていた。

そんな俺たちのやり取り中に、オールバックペアや、美人っぽい秘書が、金田のポスターを張り終わり、彼らは車に乗り込んでいった。

その時、オールバックのお兄さんが「悪いな」と前置きしつつ。

「心中察する。嫌味な男だろ？　だが、金田は優秀な人間だ。全力で挑め」

佳代ちゃんと部長は「はい！」なんて頼もしい返事をして、闘志を燃やしていた。

俺も、総理大臣にならないけど、あのおっちゃんには負けないように頑張ろうと思った。

金田が嫌味な男だからじゃない。そんな事はどうでも良い。

県庁で『俺の立候補を止めてくれなかった』と言う逆恨みからなんだ。

更に次の日。俺たちは午後から集まる事になる。俺たちの高校前で集合した。

部長の腹黒い提案から『選挙活動をするなら正装だ』と言う事で、今日は学生服を着ている。

佳代ちゃんの学生服を見るのは、俺は初めてで、違う学校に通う利点はここにあるのか、と悟ったね。ビールを飲むために、わざわざサウナと言う苦行に挑むサラリーマンたちの気持ちを理解した。

そうそう。今日は演説する予定だったのだけど。

「ゴメン！　マイクを忘れちゃったよ……」。どうしよう。明日から会えないのに……」だって。

大川は、今にも泣き出しそうな顔で言うんだけど、何度も何度も「ゴメンね」とか謝るんだけど、本当に馬鹿な女だよな。

こいつは、明後日から全国大会に出場するため、遠くの県に行く。明日は移動するために一日を費やすんだ。

つまりは、今日は貴重な休養日のはずなのに、俺に付き合ってくれるんだぞ。しかも、マイクだって、大川が使うものではない。俺が必要なものなんだ。

なんで、大川が落ち込む必要があるんだよ。

「別に大した問題じゃないだろ。大きな声で演説すれば良いだけだ」

「あなたはやっぱり理想の人です！」

佳代ちゃんは褒めてくれた。意味がわからないけど、スゲー嬉しい！

落ち込む大川を、何度も抱きしめようとしては諦めている部長は、結局、頭を撫でて慰めていた。

そして、俺は喉が上手く機能しなくなりガラガラ声で演説し、他の三人も声を枯らしながら応援してくれて、なんか嬉しかった。しかしだ。

突然、俺たちの前に選挙カーが止まった。

あのおっちゃんは、再び現れたんだ。

リスしたと思われる選挙カーから出てきたのは、おなじみの金田率いる五人組だ。

ガハハと下品に笑いながら、金田は俺に話しかけてくる。

「よく会うな。君は世間を舐めている立候補者なだけではなく、私のストーリーカーなのかね？」

「何さ！ 私たちのいる所に、あんたが突然現れるんでしょっ！ ストーカーはおじさんの方だよっ！」

と大川が反撃した。俺達サイドの人間は大きく頷き、金田サイドのオールバックペアも頷いていた。

さらに、部長は。

「そうです。いつもいつも、頑張る人を馬鹿にするあなたは、可愛い人ですね」

とらしくない毒を吐き、佳代ちゃんは。

「でも、彼は素敵です！」

とうつとりしていた。

俺も何か言わなくちゃ、と思ったんだけど。

「せいぜい、頑張ったまえ。清いらしい若者たち」

と金田は憎らしい笑顔を見せながら、去っていった。
ムカつく男だな！

そして、美人っぽい秘書は、佳代ちゃんと大川に。

「金田に気に入られているからって勘違いしないで下さい。良いですか？ 彼は私の獲物なのです。絶対に、手を出さないで下さいね」と言うんだけど、それは色々突っ込み所のあるものだった。

金田は俺たちを嫌っているだろ？

それにだ。

佳代ちゃんは、きつと、多分……。もしかしたら、俺一筋なの！
だよ？

俺たちは、金田の憎しみを燃料にして、熱い演説をした。

そして、夕方、俺たちは今日の活動を終了し、近くの公園に向かった。

ご褒美を食べるんだ！

佳代ちゃんと大川は、早起きして弁当を作ってくれたみたいなんだよ。

公園にある、土で出来た人工的な小さな山に、敷かれたレジャーシートは、魔法の国へ向かう絨毯みたいだ。その行き先は、天国か地獄か……。

いや、だつてさ。弁当を作ってくれたのは、スゲー嬉しい事実なのだけど、佳代ちゃんは天然で、大川も馬鹿だ。

更に俺は『この二人が料理を苦手だ』と言う情報を、手に入れてしまっている。

チョコレート入りのおかずや、グレープジュースで炊いたご飯を想像してしまう、俺は純粹じゃなかった。

佳代ちゃん。ゴメンね。

ピクニックバスケットから出てきたのは、卵焼きや、金平ごぼうに、焼き鮭で、少し黒っぽい以外には、特に異変は見当たらない。
佳代ちゃん、本当にゴメンなさい。

そのどれもが、美味しかったです！

照れている佳代ちゃんはやっぱ大和撫子で、照れている大川はボーイッシュじゃなかった。

次の日から、大川は全国大会に行き、部長も応援に行った。

佳代ちゃんも部活がある日も多かった。

だから、俺は連日色々な場所で、握手会やら、演説やら、ポスターを貼る許可を貰ったり、勉強したりと、忙しい毎日を送ったのだけど、半分ぐらいが一人きりだった。

そんなこんなで、俺が立候補届けを提出してから、一週間後に選挙は始まったんだ。

『一週間しか選挙活動出来ないのかよ』と思ったが、そもそも、立候補届けは三月から受付しており、届出を出したその日から選挙活動をして良いので、この件に関しては行動が遅かった俺たちが悪い。いや、ある日の思いつきで行動した俺たちが悪い。

もう一つ。

総理大臣選挙は、北海道から県ごとに北から投票されるので、日本国民の意見を聞く頃には、二ヶ月ほどの期間が必要だ。だから、選挙活動をする時間は、結構あると言えはることになる。

この選挙方式はどこかの国の大統領選挙みたいだけど、大統領選挙みたいな複雑な仕組みは無い。単純に、日本国民から多くの票を勝ち取った人間が勝者となる。

まあ、県ごとに投票する理由は、夢見党の策略だからと思われるしな。

この方が盛り上がりそうだから、みたいな。

そして、北海道で投票が行われた日。

大川は全国大会の準決勝で敗れた。この時、テレビに映る彼女が流した涙は、達成感の証にも見えたし、地区予選で俺が流したものと同じにも見えた。

一緒にテレビを見ていた佳代ちゃんの頬に伝わる涙を止める方法もわからず、俺は彼女の横顔を見つめる事しか出来なかった。

そして、この日。

部長と大川の初キスがドラマチックに行われたらしいのだけど、それを電話で話す部長は爽やかじゃなく、なんかエロかった。いや、

凄くスケベだった！

そして月日は流れ……。

選挙は順調に行われ、約一ヶ月が過ぎた今、俺の県の一つ北まで投票は終わっていた。つまりは、明日は俺の県で投票が行われるんだ。

変わりつつある俺は、やるからにはそれなりに頑張る人間になつてしまった。

だから俺は今、演説しているわけだ。太陽が一番元気だろう正午に、中心街の駅前広場で、三脚の上から不安定な立ち姿で、メガホン式マイクを片手に。

「えーっと、自分の利権よりも国民のために頑張ります。若い僕だからこそ、社会の厳しさを知らない僕だからこそ、汚れなき理想だけを掲げられるのです。確かに、実力は伴っていません。それは、総理大臣就任後に発足する内閣の人材で補います！」

と俺の演説は具体性に欠ける夢見党みたいな、酷いもののはずなのに、周りには見渡す限りの人の顔が見える。しかも、えらい歓喜の表情を浮かべて俺を見上げている。テレビの取材陣まで見えるよ……。

その理由。俺は総理大臣選挙の途中開票で、気がつけば上位三名の一人になっていたからなんだ。

一位の立候補者の男は有名人だった。

二位との差を五万票ほどつけて、独走する彼は、十年ほど前から納税番付け一位を独走する人である。つまりは、金儲けの達人なんだ。

あの嫌味なおっちゃん、金田だった。

俺は、有名人な金田の名前と顔が一致したのは、総理大臣選挙の時だった。

二位の立候補者の女は、以前から顔と名前の両方を知っている。

弁護士でありタレントである人だ。異なる業種を器用にこなす彼女は、きっと政治の世界でも上手くやっていけるのだろう。

そして、何故か三位が俺だ。二位との差は僅か百六十票しかない。なんでだよ！　なんだけど、不幸にも俺には武器が合った。

そんな回想をしている間に、俺の演説は、そろそろ佳境だ。

「俺はお金の事とかよくわからないので、もし総理大臣になれば、信念だけは曲げないようにします」。それでは、皆様、暖かい声援ありがとうございます」

俺はいつも言う、この決め台詞を最後に、三脚から降りた。佳代ちゃんが優しい笑顔で声をかけてくれるんだけど。

「あなた。お疲れ様です。立派な演説でしたよ」

その言葉は、あまり嬉しくなかった。今までとは違って、罪悪感が原因じゃない。

こんなの、俺じゃない。

続いて、佳代ちゃんはこんな事を言う。

「もし、あなたが総理大臣になってしまったら、大変ですよね。でも、あなたが望むなら、私はいつでも高校を辞めます。全力であなたをサポートします！」

その表情には、嘘は見えない優しい微笑みだった。もちろん、冗談を言っている風にも見えない。佳代ちゃんの目は、笑っていても、凄く真剣なまなざしだった。

更に佳代ちゃんは続けて。

「私たち夫婦で、日本を良い国にしましょうね！」

とサラッと、それでも照れ笑いをしながら、逆プロポーズをしてくる。

佳代ちゃんの逆プロポーズは、総理大臣選挙をキツカケに、いつでも飛び出してくるかわからない代物になっていた。佳代ちゃんの中では、ある程度のライフプランが決まっているのだろう。

「いや。俺が総理大臣になっても、佳代ちゃんは高校を辞めないで欲しい。愛する君だからこそなんだ。俺のせいで、苦勞はさせたく

ない！ 佳代ちゃんが隣にいてくれるだけで、俺は頑張れるよ」

とか俺も困惑しながら、変な事を言うんだけど、概ね本気だった。佳代ちゃんは大切な存在だし、もし総理大臣になれば経済的に苦勞をかけることも無いだろう。それならば、俺は佳代ちゃんを苦勞させないように、激務ぐらい必死に頑張るさ。

だけど！

俺は総理大臣になんかなりたくなかった。

そうだろう？

ちよつと前まで、部活も頑張らず、人の苦勞を気づかないフリして、部屋には大量の工口本がある、俺はそんな高校生だったんだ。

なんで、そんな男が総理大臣になるんだよ。

誰がどう考えたって、おかしい。俺自身が変だと思っている。

何より俺は、絶対に総理大臣になるのが嫌だった。

駅前の演説の後は、街中の大型スーパーの駐車場を借りて演説をして、その後は、『大川ミーちゃん事件』の時の公園でも演説をした。

時刻は、十七時を少し過ぎたあたりを指していて、今日の演説は終わる事になる。

「あなた。今日もお疲れさまでした」

と佳代ちゃんは、癒しの笑顔をくれた。

この夏休み、佳代ちゃんとはよく会っている。彼女は、部活動以外の時間を俺の演説補助のために費やしてくれていた。それは嬉しい事実だ。やっぱり、違う高校に通うものとしては、頻繁に会えると言う事は、果てしなく嬉しい事実だった。

佳代ちゃんは電車から降りる時。

「おつかれさまでした。明日はこの県の投票ですね！ きっと大丈夫ですよ」

と言ってくれた。

俺は鼻の下を伸ばす、格好悪い笑顔を返した。だけど、正直辛い気持ちもあった。

道中には、何度もサインをお願いされた。俺は作り笑いを浮かべながら、震えた文字でサインをする。確かにみんなが俺を認めてくれるのは、嬉しい気持ちもある。

それでも、総理大臣にはなりたくなかった。

そして、佳代ちゃんと別れた俺は部長の家に向かう。部長の家は、三LDKの三階建てのアパートだった。

俺が部長の家を訪ねたのには理由がある。大川の応援から戻ってきた部長の家には、ほぼ毎日通っているんだ。

部長の地方公務員を目指すと言う目標と、俺の総理大臣を目指すたくないけど目指すと言う目標は、ある一点で共通する部分があったからだ。

それは、政治経済や倫理についての勉強だ。

俺にとって政治経済の教科書も、倫理の教科書も、読んでもさっぱりと意味がわから無い代物だった。本当に日本語なのだろうか？と疑問に思うほどに、難解な文章だった。高校の教科書のはずが、近所の大学生に借りた『経済学入門』より解り難いのは不思議だ。

そこで、部長がわかりやすく教えてくれるのだ。

部長曰く、わかりやすい言葉に噛み砕いて説明する事は、復習にもなるし、理解を深める事にもなるので、気にするなと言ってくれていた。

状況が状況なので、俺は部長の言葉に甘える事になっている。ありがとうな。

部長は、中学一年生の弟と部屋を共有していたが、俺が訪れると、弟さんは遠慮して部屋を出て行く。

しかし、大川は遠慮する事はなかった。部長の部屋には大川がいたんだ。これも、珍しい事ではない。大体半分ぐらいの確率で、俺が部長の部屋を訪れると大川がいた。もう、スカート姿の大川は、珍しいものではなくなっていた。

部長は部屋の中央に折りたたみ式のテーブルを設置し、そのテーブルの、俺が窓際に座り、部長がドア側に座る。

大川はベッドの上でマンガを読んでいた。部長の部屋には無い少女マンガを読んでいるので、自分で持参したのだらう。一体、大川は何の目的で来ているんだ？

部長はルーブリーフの一枚を取り出し、四角形を綺麗な正三角形に配置しながら、三つ書き込み、説明してくれた。

「これが立法、すなわち国会だな。これが司法、つまり裁判所だ。そして、これが行政、内閣だ。お前が目指す総理大臣も行政だな。この異なる強い権利を持った三つがバランスをとることで、日本と言う国の政治は成り立っているんだ。お前が総理大臣になったら、このバランスを意識する事が初めての仕事かもな」

俺の話題が出て来た事で、話は脱線する。部長は白い歯を惜しみなく見せる笑顔で。

「しかし、お前が総理大臣になったら、日本はどうなるのかな？きつと、色々問題もあるだらう。でも、大変でも幸せな結果が待っていると思うな」

とか言っている。

俺たちの勉強の脱線を待っていた大川は、嬉しそうに話に加わる。「そうだねえ！ 君は実は良い人だからね。ミーちゃんも元気でやっているよ」

「俺に出来るかな？」

俺は作り笑いを浮かべた。

しかし、部長は。

「大丈夫だ！ 数年前に、裁判所だつて陪審員制度を導入しただろ？ 変化の最初は戸惑うかもしれない。それでも、何とかなるものだよ。それに、俺はお前なら出来ると思っている」

とか励ましてくれる。

でも、そうじゃないんだ！

「違うよ。俺が総理大臣なんか出来るかなって聞いたんだ。いや、違う。俺は総理大臣になんかなりたくない！ みんなが応援してくれるから、頑張ろうと思った。心の中で、俺が当選する訳無いと思

っていた。それでも、きつと違う形で、俺の財産になる経験だからと頑張ってしまった。だけど……。嫌なんだよ。俺には重いんだ。総理大臣なんて無理なんだよ！」

ずっと言えなかった、俺の気持ちを言ってしまった。俺は気がつけば叫んでいた。

部長は、教科書を閉じて、俺の方を向き、じっと俺の目を見つめる。その視線は優しいものだった。

大川も寝ている状態から起き上がり、真剣に俺たちを見つめている。

そして、部長は、いつかの重い口調で。

「そうか」

と言った。

俺は強く何度も頷いた。

「そうなんだよ……。別に夏休みの毎日を演説に費やしたからとか。部長と毎日勉強するのが嫌だからとかじゃないんだ。ただ、自信ないんだよ……。俺は普通の人間でいたいんだ」

「そうか。俺は普通のお前が作る日本を見たかったな。彼女のために短期間で変わったお前だ。そんなお前が総理大臣になれば、日本も短期間で変わるかも、なんて思ってしまったんだ。お前の気持ちに気づけなくてゴメンな」

「ゴメンねえ。ミーちゃんみたいに、みんなを救ってくれると思っただんだよ。君が困っているなんて、思いもしなかった。だって、君はいつも、頼りないけど、それでも笑顔だけは作っていたから……。ゴメンね」

部長が貴重な時間を俺のために割いて、選挙活動を手伝ってくれたり、勉強を教えてくれているのも事実だ。

大川だって、バレー部の練習で忙しいのに俺のために時間を作って、選挙を応援してくれた。全国大会で負けた後は、佳代ちゃんと同じぐらい、多くの時間を俺のために使ってくれた。

俺は部長が大好きだ。同年代の部長を尊敬している。大川だって

同じだ。

「俺こそ、部長の好意に応えられなくてゴメンな」

「何の事だ？ 変な事を言う奴だな」

と部長は俺の気持ちに気づいてない事を示してから。

「ホームページの方は閉鎖しておくよ。どこまで効果があるか、わからないけど、選挙活動しなければ、お前ブームもいつかは消えるだろう」

と努力の結晶をあつさりと消去してくれるらしい。

「そうだよ！ 私なんて昨日の晩御飯も思い出せないよ！ バレーの事なら全ての試合を鮮明に思い出せるのにね！」

と大川はワンワン泣いて、俺を元気つけようとしてくれた。

「部長……。大川……。ゴメンな」

と俺が言つと。

「何言ってるんだよ。元はと言えば、俺たちが無理やり立候補させたもんだしな！ 気にする必要ないだろ？」

と、折りたたみテーブルに膝を何度もぶつけながら、部長は大爆笑してやがる。

大川は部長が言つた事を理解して無いみたいだ。きつと、さっきの言葉通りに大川の記憶からは、ファミリーストランでのやり取りは消えてしまったのだろう。

でもそれは、俺も同じだった。毎日が忙しくて忘れていた。

そつだよ。

デート中に愚痴つたのは俺だけどさ。元はと言えば、部長の冗談から、俺は立候補する事になったんだ。

俺は力いっぱい部長を睨みつけた。

だけど、こぼれ落ちる笑みを隠せなかった。

それから、部長はホームページを削除してくれた。これで、インターネット上での俺の存在感は、薄まったはずだ。

二十時ごろ、家に戻ると、玄関には男用の靴があった。多分、鍵

少年が妹の所に遊びに来ているんだろう。妹と鍵少年は、飽きることなく夏休み中デート三昧の日々で、その内の三割ほどは家に遊びに来ている。

そうだった。鍵少年と妹が付き合い始めて、遠慮なく、俺は鍵少年の情報を聞き出す事ができた。

鍵少年の本名は柿沼^{かきぬま} レン君だった。なんとなく、『かぎしょうねん』に似てなくも無い。ちょっと強引だけど、俺の心の中では鍵少年は永遠の称号となった。

そして、鍵少年の乱暴な態度の理由もわかった。彼は不良に憧れる高校一年生だったんだ。多感な思春期としては珍しい変化でも無いし、別段、その事について言及する気も無い。佳代ちゃんの高校では、確かに不良に分類されているみたいだった。

問題なのは、俺には鍵少年が不良に見えないのだけど、それだっでどうでも良い事だ。

自分の痕跡がネット上から消えているかを確かめるため、部屋でインターネットをしている時、鍵少年が尋ねてきた。

俺の部屋のドアは二回のノックと同時に開かれる。

こちらの「どうぞ。入って」なんて返答を待つ気はないらしい。

俺が椅子を回転させ、ドアの方を見ると同時に、鍵少年は部屋に入ってくる。

そして、鍵少年は俺の反応なんて気にすることなく、部屋の中央に座り込む。妹も一緒だ。

そして、鍵少年はいつかのように、俺を睨みつけながら、口を開いた。

「お兄さんよ。あんた、無理してるだろ？俺にはわかるんだ。

俺ってさ、こう見えても実は気が弱くて、真面目な人間なんだ。だけど、俺は憧れの自分になるために強がってる」

と既に知っている事実を告白されたのだが、それはどうでも良い。どうやら、鍵少年には俺が総理大臣になりたくない事や、今の選挙活動が苦しい事や、もちろん途中開票で三位なのが辛い事も、全

て見透^{みす}かされているらしい。

妹も「どうでも良い」と前置きしつつも。

「そつだよ。兄貴らしくないよ」

と言っていた。

「鍵……。柿沼君にはそう見える？」

「当然だ。みんなが気づかない方がおかしいぐらいに、今のお兄さんは無理してるようにしか見えない」

もう、俺は限界だったのかもしれない。部長たちにつき、鍵少年にも自分の気持ちを伝えてしまった。あまり弱みを見せたくない相手、つまりは妹が目の前にいるというのに。

「そつなんだ。みんなが応援してくれる。だけど、俺は辛いんだよ！ 総理大臣になんかなりたくないんだ！」

「じゃあ、無理するなよ。お兄さんの心意気は既にみんなわかってるはずだ。途中で総理大臣になる事に恐怖を覚えたとしてもな。誰も、お兄さんを責めたりしないさ。それに、お兄さんじゃなきゃ駄目だ、なんて訳じゃないだろ？ 酷な言い方をすれば、あんたはそれほど大きな人間じゃない。だからよ。無理するな」

俺はただ短く「そうか、ありがとう」としか言えなかった。

妹は珍しく「別に、どうでも良いけど」と前置きしないで。

「兄貴は私と似ているからね。やる気無いのが兄貴なのさ」

俺はお前とは全く持って似ていない。それは、佳代ちゃんと付き合う以前からだ。でも、こいつの言葉も嬉しかった。

鍵少年はそれで満足したのだろう。立ち上がり、最後にこんな言葉を残して部屋を出て行った。

「それじゃ、俺は甘くて幸せな、妹さんとのスイートタイム中なんで、失礼するよ。本当に無理するなよ」

目の前で、身の毛もよだつ台詞を言われた妹は。

「そつだね。兄貴はどうでも良いよね。早く、部屋に戻ろうよ！」
とはしゃいでいた。こんなハイテンションな妹は変だ。

今日、俺は四人の人間に認めてもらった。

総理大臣にならなくていいと。

佳代ちゃんと付き合い始めて、俺は変わろうと頑張った。

それは、意外にも嬉しくて、充実感に満たされた毎日だった。

だけど、今の俺だけは違う。

もう頑張れない。

それでも、認めてくれた人たちがいる。

嬉しかった。

それから、沈鬱な気持ちではあるけど、佳代ちゃんにメールで報告するのだけど……。

佳代ちゃんだけには、正直には言えなかった。

『作戦変更でホームページを削除したよ。演説もしない事にした』
としかメール出来なかったんだ……。

佳代ちゃんから帰ってきた返事は、『わかりました。詳しくは聞きません。あなたの事を信じていますよ』と言う内容だった。

翌日。

俺の県で投票が行われ、テレビの速報ニュースは『俺が途中開票の結果で二位になってしまった』事を教えてくれた。

一位の金田とは依然として一万ほど差があるものも、三位の弁護士女とは六千票差を開いて、逆転してしまった。

地元効果、があると思う。

人間、地元出身の人間を応援したくなるもんだ。

だけど、それだけじゃない。

こんな俺が総理大臣選挙で戦える理由、大きな武器の一つに、インターネット上での情報操作力がある。

それは、俺はもちろん違う。腹黒い部長も違うらしい。当然、天然な女性陣は違うだろう。

ある、熱狂的な俺ファンによるものだ。
ハンドルネーム『ヨカ』と名乗る人物。

しかし、通り名と言うかあだ名と言うか、とにかく、ハンドルネームより有名な呼び方がある。『ヨカ』は『ワンテンポの魔術師』という異名の持ち主だった。

そうだな。例えてみるとわかりやすいと思う。

部屋から出て、リビングに向かうと、疲れ果てた母さんが寝ているとするだろう？

ふと流しを見ると、食器は洗われていない。そこで、俺は思うのさ。母さん疲れているんだな。たまには食器洗おうかな、ってな。

だけど、食器洗いの音というのは、意外と大きい。食器のぶつかる音や、勢い良く流れる水の音は、疲れて居眠りしている母さんを容赦なく起こす。

目を覚ました母さんは、俺が食器洗いをしているのを見て、思い出すんだな。

「あんだ！ 今朝、食器を片付けなかったでしょ！ テーブルの上に置きっぱなしにして！」

確かにそれは悪い事をしたよ。でも、今言うことなく無い？ 俺は疲れた母さんを気遣って、食器洗っているんだよ。

とまあ、こんな感じ。

あるいは、夕食の準備を終えた時に聞こえる、移動式ラーメン屋台のちゃらめるの音みたいな。

とにかく、ワンテンポの魔術師は、印象深い間を作り出す名人だった。

インターネット上で俺の話題が出てくる。でもしばらくすると、俺の話題は沈静化して、別の人の話題になるだろ。

そこにワンテンポの魔術師は現れるんだ。

三十分以上前の話題に、つまりは沈静化したはずの俺の話題について、返答する。

それが、妙に人の心を刺激するつばを押さえているらしく、再び俺の話題で盛り上がる。

こうして、インターネット上での情報戦は、俺の独壇場と化していた。

それは、ホームページを削除した今でも変わらない。今回だってそうだ。

俺たちがホームページを削除すると、当然インターネットでも話題になる。

『あいつやる気無くない？』って感じでな。

暫くすると、『それより金儲け男の方が良いよ。やっぱ、金がなきゃ何も出来ない』とか、話題が変わるだろ。

それで、『金儲けが上手い男って、悪い事してそくだよね』と言う流れになった時……。

ワンテンポの魔術師が現れるんだ。流れを無視して、俺の話をする。

『何か事情があるんですよ。もしかしたら、彼自身が総理大臣になるには、力不足だと悟ったのかもしれない。でも、そういう彼だからこそ、日本を託したくありませんか？ 汚れの知らない青臭い若者だからこそ、未来を託してみたくありませんか？』だって。

いやいや、総理大臣だよ？ 託したくないでしょ！ と俺は思っただけど……。

それでも、インターネットでは、再び俺の話題ばかりになる。

なんか、非難的だったはずの俺の話題は、一転して好意的な物に変わっているし……。

そういう訳で、俺は途中開票で、ついに二位になってしまった。

自分のホームページを削除したのに関らずだ。

そうして、落ち込んでいる時。

「あ、兄貴〜。電話だよ」

妹の声がドアの外から響いてきた。それは、俺が二位に躍り出た事を知ってから三十分後、つまりは俺の県の投票結果がテレビで発表されてから三十分後に、佳代ちゃんから電話が来たのだ。

佳代ちゃんの自宅電話から俺の自宅電話へ、つまりは通称イエデ

んだ。考えてみれば、少しの事を話すのに時間がかかりすぎるって事から、俺たちはメールでやり取りしている訳だけど、イエデンならその問題は解決するよね。

なんて事は、この際はどうでも良い。

「あ、佳代ちゃん」

「あなた。良かったですね！二位ですよ！この調子で頑張りましょうね！」

「ありがとう」

俺は、まだ、佳代ちゃんには言えなかった……。

「でも、メールで書いた通り、演説とかホームページでの活動とかは、もうやらない事にしたんだ」

「ええ。あなたなりに、事情があるのだと思います。私は待っていますから、安心してくださいね」

電話の内容は、終始そんな感じだった。結局俺は、一番伝えるべき人に、伝える事ができなかった。

こんなのは、俺じゃないんだ！

そして、翌日。つまりは夏休み終了間際の、ある平日。

演説から解放された俺と、部活の練習が休みの佳代ちゃんは、久しぶりに選挙活動を伴わない、純粋なデートをする事になった。

午前九時。天気は曇り。俺の心もどんよりした曇り。

久しぶりの選挙がらみじゃないデートで、俺は告白しようと思う。今までの全てを。

俺は佳代ちゃんが思っているような人物ではない。

それでも、佳代ちゃんの理想に近づこうとした。その結果、それなりに変化できたと思う。

だけど……。総理大臣なんか無理だ。こんな自分はもう嫌だ。

辛いんだ！

そして、佳代ちゃんの期待を裏切るならば、今までの悪行を全部伝えるべきだと考えた。

騙っていてゴメンなさい、と。

今日、佳代ちゃんとは、俺の地元の駅で合流した。

今日の佳代ちゃんは、ピンクを基調としたワンピースで、肩から先の腕の部分も、胸元部分も、と言うか生地全体が涼しそうなんだけど、憤ましさを忘れずに、胸の谷間だけは見せていなかった。惜しい！

じゃなくて、それでも佳代ちゃんは大和撫子だった。

それから、俺たちは隣の県でも割りと静かな駅で降りる。そして、目的地に移動した。

そこは、動物園だった。

入り口に置いてあったパンフレットによると、ここには、百九十種類、千五匹の動物がいるらしいが、実際に見学してみると、そんなにいるのだろうか？　と思ってしまう……のはどうでも良いよな。俺の興味は、カンガル―館にレッサーパンダがいるのか、学術的な関係なのかな。俺にはカンガル―には見えないな。それとも、単に見た目的に可愛い系を集めたのかな、とか。

ゴリラの柵に、『糞を投げるから注意』って看板あるけど、これマジなのかな。そうなら、出来るだけ早く逃げたいな、とか。なんだけど。

佳代ちゃんは、全ての動物に対して、差別することなく平等に「かわいいですね！」と感激の微笑と、神に祈るように両手を合わせる仕草を連発していた。

俺たち二人はお互いに楽しんでいるのだけど、微妙に温度差を感じる。

それどころか、俺は『佳代ちゃんの両手を合わせる仕草は、感激した時に見せる癖なんだな』とか考えたり。

「フツ。佳代ちゃんの方が数万倍カワイイぜ」と恥ずかしい台詞を、心の中だけで呟いたりとか、変な事ばかり考えていて。

一方の佳代ちゃんは、平等の愛から良い意味で差別するのはペンギンだった。

そして、悪い意味で差別されるのはニシキヘビではなく雄鶏だった。何かトラウマがあるらしい。

腕に抱きついてくる彼女。そして、嬉しい柔らかな感触。ナイス雄鶏！

とまあ、楽しんでくれているみたいだった。

やっぱり、俺たちはチグハグな楽しみ方をしたと思う。

それでも、スゲー楽しかった。

だけど、俺はまだ告白出来ないでいた。

佳代ちゃんに全てを言うのは怖かったし、全てを告白するのは別れる決意を固めるのと同義だったんだ。

それは『部長良かったね事件』や『初デートで嘘がバレルかも事件』とか、三回目の決意のはずなんだけど……。

怖かったんだ。

この恐怖に慣れるはずが無い。

いや、あの時より、ずっと、俺の中で佳代ちゃんは大きな存在になっっていた。

積み重なる思い出が掛け算のように、一つの思い出が増えるたびに、何倍にも彼女の存在が大きくなっていた。

キツカケは意外なところにあった。

動物園を出て駅に向かう途中、そこは一軒家もアパートもマンションもスーパ―も、色んなものが規則性なく建ち並ぶ、住宅街だった。

俺たちの前方二十メートルほどの所、ある一軒家の前で、男の子が凄い勢いで泣いていた。言葉とは思えない激しい泣き方で、何を言っているのかわからなかった。

それに気がついた佳代ちゃんは、無言で俺を見つめてくる。

全てを知っている菩薩様のような、優しい笑顔で見つめてくる。

俺にはその笑顔から「助けるんですね。あなたらしいです」なんて、幻聴が聞こえてきた。

多分、昨日までの俺なら、その佳代ちゃんの意味に従っただろう。だけど、今日は違う。

俺は偽者の俺を告白するつもりだった。

「佳代ちゃん。ゴメン。駄目だよ。俺には出来ない。あの子を助ける事はできない。考えてみなよ。商業施設でもなければ、アミューズメント施設でもない。なんで、何も無い住宅街で泣いている子がいるのさ。ただの迷子じゃないかもしれないじゃないか。家庭内暴力かもしれない。何かの誘拐事件かもしれない。俺は、そんな面倒ごとに首を突っ込みたくない。周りを見てみなよ。あの男の子に気がついて、誰も何もしようとしないうろ？　もしかしたら、誰かが警察に行ったかもしれない。そうだ。俺たちも警察に任せればいいんだよ」

俺は汚い自分を、初めて佳代ちゃんに見せられた気がする。それでも、佳代ちゃんは優しく笑ったままで。

「確かに誰かが警察を呼んだかもしれませんが。あるいは、私たちが呼べばいいのかもしれませんが。でも、それまで、あの子は辛いのです。寂しいのですよ？　あなたらしくないです」

「だから、違うんだ。佳代ちゃんが見ている俺は、俺じゃない。部活を頑張り始めたのだって、佳代ちゃんと付き合ってからなんだよ。優しくったり純粹だったりもしない。俺なりに変わろうとしたけど……。違うんだ。これが、こんな事言うのが本当の俺なんだよ！」

恐怖と言うのは、人に大声を出させるものなのだろうか？

俺は、つい、大声を上げてしまった。

あるいは、二十メートル先にいる、男の子の泣き声にかき消されないように、大声を出しただけかもしれないが……。

佳代ちゃんは、俺の告白を聞いて、落ち着いた様子なんだけど、表情は驚いていた。

口を軽く手で押さえ、目を見開き、何も言えないでいた。

「ゴメンね。佳代ちゃん。今まで騙していてゴメン。だから、今日で俺たちの関係は終わりだよ」

佳代ちゃんは、まだ何も言えなかった。

だけど、数ヶ月付き合った俺にはわかる。

佳代ちゃんは、こんな俺でも許してくれる。

俺たちの関係は終わらない。それは、俺にとっては幸せな結果かもしれない。

でも、それは、佳代ちゃんを深く傷つけ混乱させるものなんだ。それじゃ駄目なんだ。

俺は佳代ちゃんが混乱している隙に、佳代ちゃんが答える前に、その場を離れようとした。

今日までの経験から言わせて貰うと、考え込んだ彼女が、言葉を発するには、三十分ほどの時間が必要なんだ。

本当ならば、彼女の言葉を聞く必要がある。それが、正しい対応のはずなんだけど……。

「急にこんなこと言われても、ビックリするよね。ゴメンね……。とりあえず、俺は交番を探してくるよ」

その時、佳代ちゃんは微笑んでいた。

目には涙が溜まってくる……。

こんな、辛い思いをするなら。こんなにも彼女を傷付けるなら。

最初に、妹の部屋で断れば良かった……。

佳代ちゃんゴメンね。

俺なんかの事を忘れて欲しい。

佳代ちゃんほど素敵な女性なら、本当に理想通りの男に出会えるはずだ。

彼女の幸せを祈りながら、俺は歩き出した。

違う。

彼女のため？

違うかもしれない。

今の俺には、自分が傷つけたことで、流れる佳代ちゃんの涙を見る事が出来ないだけかもしれない。

ただ、逃げたかっただけなのかもしれない。

ゴメンね。今日だけだから……。

明日からも、妹と佳代ちゃんは友達のままだ。

俺と彼女は接触する機会が多いはずだ。

だから……。

いつ見ても、佳代ちゃんが胸を張って、「私の元彼は素敵な人でした」なんて言う男になるから。

だから、今日だけは許して。

ゴメンね。佳代ちゃん。ゴメン……。

だけど。

十歩ぐらい歩いた時。

交番の場所を誰かに聞く前に。

佳代ちゃんの叫び声が聞こえた。

それは凜としていて力強いもので、綺麗な透明色をしていて、ゆっくりで優しいものでいて、そして、とても大きな声だった。

先ほど、俺が大声を上げてしまったのに気づかなかった迷子の男の子が、佳代ちゃんの叫び声には驚いて泣き止んでしまうほどに、大きな声だった。

「全部知ってました〜！ それでも、あなたが好きなんです！！」

俺は意味がわからなくて、歩を止めてしまった。

そこに、佳代ちゃんが小走りで追いついてくる。

佳代ちゃんは。

「これが、私の宝物なんですよ」

と言つて、カードケースを俺に渡した。そこに入っていたのは小さな新聞記事だった。

俺はそのニュースを知っている。

新聞記事の内容はこんな感じだ。

それは、相馬^{そうま} 大地^{だいち}と言う少年の小学一年生から四年生までについて書かれた記事だった。

少年が小学一年生だった時の様子から、書かれている。

少年には田舎に住む祖母がいた。少年にとって、物心付いてから

接する祖父母は、彼女一人しか残っていなかった。

その祖母は、見るからに家計に苦しそうな生活をしていただけで、孫が来る時だけは、ご馳走を用意していた。

そのためか、少年も、少年の両親も気づけなかった。

ある日、少年の家に病院から、祖母が激しい衰弱で倒れたと言う電話が来る。年金暮らしで一人住まいの祖母の生活は、苦しいものだったんだ。

祖母は一命を取り留めたものも、脳に障害が残った。衰弱で倒れた事が原因だったかどうかは、誰にもわからない。それでも、祖母は記憶に障害を持つようになる。

その日から、祖母にとって、男の子は孫であり、息子であり、幼馴染である存在になった。

少年は怒った。

祖母の生活が苦しい事に気づけなかった自分や自分の家族に対してか。倒れるまで自分たちを頼ってくれなかった祖母に対してか。何に對してかはわからないけど、男の子はやり場の無い怒りに支配された。

その怒りは、少年をある行動に動かした。

少年は、自分たちのような不幸を再現してはならないと思い、必死に大人たちに自分の気持ちを伝えた。

駅前だったり、区役所や市役所前だったり、長期休みには国会議事堂にも足を延ばした。

この時、少年はわかっていなかったんだ。

一億人以上が住む日本では、決して自分は特別な存在ではないと言う事をわからなかった。

こんな不幸は、至る所にある、ありふれた不幸だと言う事もわからなかった。

行動力の伴わない言葉は、無意味だと言う事もわからなかった。何事も社会ではお金が大事だと、お金が無ければ何も出来ないと言う事も理解していなかった。

三年の歳月を経て、小学四年生になった時、少年は諦める事を覚え、努力の無意味さを知り、自分の無力さと小ささを理解した。それは、当時行動を共にする事が多かった、少年の妹も同じなのかもしれない。

それでも、少年の三年は、マスコミで小さい扱いだったけど全国的に取り上げられたし、夢見党の誰かの心も動かしたのかもしれない。

随分後の話ではあるが、『年金支給か、国営の老人ホームに入居するかを選ぶ』法案が可決された。

でも、だからこそだ。

少年は夢見党が嫌いだった。維持できそうも無い絵空事政治を行う夢見党が嫌いだった。

もしかしたら、理不尽とわかりつつ、祖母を救えなかった罪の念を、無意識的に、夢見党に対する怒りとして、変換しただけなのかもしれない。

無力で何も出来ない、人に頼る事しかできない、そんな自分を認められなかったただけなのかもしれない。

そして……。

新聞記事に書かれている少年、相馬大地は俺だった。

これが、なんの長所もない高校生の俺が、総理大臣選挙を戦えた最後の武器だ。

ワンテンポの魔術師が、みんなにこの事実を知らせてしまったんだ。大げさに誇張して、報告してしまった。

何も言えない俺に、佳代ちゃんは話を続ける。

「初めて憧れの人とあなたのギャップに気がついたのは、初デートの時でした。県立体育官です。下手な人と、練習していなかった人の違いぐらい、フォームを見ればわかりますよ」

と小さく噴出してから。

「理想の人と現実の人は、ちょっと違っていました。だから、私決めたんです。努力しよう。あなたを理想の人に近づけようと頑張

る事にしました」

そして、凄く顔を赤らめて。

「でも、やる気を出してもらったためにした、キスは恥ずかしかったです……。本当は結婚してからと思っていたんですよ」

それで、あの日以来キスをさせてくれなかったのか。どうやら、初キスは佳代ちゃんの演出だったらしい。

でも、逆プロポーズについては何の説明もなかった。いつだって真剣だったらしい。

更に佳代ちゃんは小さく笑ってから。

「あなたって変な人ですね。地区予選で負けた時に、私は全部知ってます、と言ったのに……。ずっと悩んでいたなんて」だって。

俺には覚えが無いのだけど。

と言うか、佳代ちゃんに変な人って言われるのは、変な気分なんだけど。

佳代ちゃんは、俺の混乱を無視して数歩俺の前に歩き出し、振り返り……。

特大花火みたいな満面の笑みで。

「さあ！ 迷子の男の子が待ってますよ！ 行きましょう。あなた」俺に手を差し伸べた。

俺は佳代ちゃんの手を握り、脱力状態のまま引っ張られる。

そして、男の子まであと少しのところで、佳代ちゃんは再び振り返り。

「でも、総理大臣は重荷でしたよね。気づけなくてゴメンなさい」と謝っていた。

俺は気を落ち着かせ、混乱を男の子に悟られないように、優しく声をかける。

「ボクー？ どうした？ 迷子か？」

佳代ちゃんの大声に、一度は泣き止んでいた男の子だけど、俺が話しかけると再び泣き始めてしまった。

「アイム ロスト！ ウワアアアン！！」

男の子は日本人じゃなかった。

俺は変な顔十連発をして、なんとか、男の子を泣き止ませ。

「ウィー　ゴウ　ポリス！　あ、ウィー　ウィル？　いや、レッツ　ゴー？　とにかくポリス！　ポリス！」と俺は上手く英語を喋れなかったのだけど、混乱のせいだと言い訳させてくれ。英語の成績が悪い事は隠させてくれな。

こんな英語でも、なんとか男の子には言いたい事を伝えられたみたいだ。そして、見知らぬ街だったので、道行く人に尋ねながら、近くの交番を目指す。

ちなみに、男の子が住宅街で放置されていた理由も簡単で、日本語のわからない両親も迷子になっていたからだ。彼らは外国人旅行者だった。

パスポートとかで、男の子と両親を名乗る人の身元確認とかも付き合つて、気づけば結構な時間を費やしていた。

でも、帰り際、佳代ちゃんの。

「あなたらしかったです。素敵でしたよ！」

の一言で、幸せな時間を費やしたと思えた。

大和撫子な外見通りに、佳代ちゃんは凜として芯が強い女性だった。

スローなテンポ通りに、佳代ちゃんは優しい人だった。

だけど、俺は勘違いをしていたんだ。

佳代ちゃんって、実は計算高い女だったらしい。しかも、天然だから、その方向性がスゲー変なの。

それでも、俺は佳代ちゃんが大好きだ！

そうだ。これは、どうでも良いことかもしれないけど。

不思議な事に、この日を境に、ワンテンポの魔術師は俺のファンを辞めたらしい。

もう一つ。

これは大事な事なんだけど。

この日から佳代ちゃんは長かった髪をバツサリ切ってしまったんだ。俺が理由を聞いても、彼女は教えてくれなかった。

柔らかそうなベリーショートパーマは、優しそうだった。

ベリーショートパーマの短い髪は、凜とした力強さを演出していた。

そして、ベリーショートパーマの佳代ちゃんは、やっぱり大和撫子だった。

俺は身近な知り合いに、しかも血縁関係をもった人間に、同じ髪型をした人物がいた気がするのだけど、頑張つて、その事実を黙殺した。

動物園デートの翌日。

残り僅かな夏休みを利用して、応援してくれた街中の人に謝りながら、俺たちは選挙ーポスターを剥がすことにした。

「残念」とは言うのだけど、みんなは俺を許してくれた。
アイツ以外は。

ポスターを剥がすため、佳代ちゃんの高校近くの、文房具屋さんに立ち寄った時だ。

地元でしか選挙活動が出来ない俺たちと違って、有り余る経済力を武器に日本を縦断しながら活動していた男。暫く見かけなかった嫌味なおっちゃん、金田と会った。

俺たちを見つけると、演説も中止して、選挙カーも止めて、俺たちに話しかけてくる。

「なんだ？ 根性なしだな。途中で投げ出すのか？ 最低だな。やゝい、馬鹿、負け犬！ 意気地なし男！」

とブーブー文句を言っている。

「何さ！ おじさんには関係いでしょっ！」

「確かに、金田さんの言う通りかもしれせん。でも、こいつなりに事情があるんですよ」

「それでも、彼は素敵なんですよ」

なんて、変人三人のパターン化した三段落ちを見ながら、『お前
の本気はそんなもんじゃないだろ？ 大川よ。こう言う時こそ鬼に
なれよな』と無言の抗議をあげつつ、今回は俺も発言できた。

「ゴメンね。金田さんは、良いライバルでしたよ。俺たちは選挙権
も無い訳けど。それでも、応援するからさ、許して下さいよ」

金田は地団駄を踏み。

「嫌だ！ 認めない！ 今回の選挙は私の圧勝。そして、お前を秘
書にして育てる予定だったのに！ 次の総理大臣をお前にする予定
だったのに！」

そんな、デパートでよく見かける駄々っ子は、オールバックヘア
に抱えられ、消えていった。

「おじさんは、本当に私たちを気に入ってたんだね」

「うん、そうだね。大川さん。金田さんって悪い人ではないのかも」
「うう、私は負けません！ あなたは誰にも渡しません！」

俺は変人三人三段落ちを見ながら、心の中で金田に叫んだ。

だから、俺は総理大事になりたくないの！

そして、心の中で神様に愚痴をこぼす。

どうして、俺の周りには変人ばかり集まるのですか？

結局、金田とはソコソコ交流のある仲になるのだけど、それはど
うでも良い。

夏休みも終わり、九月最初の土曜日。

俺の週一回は行くようにしている『お楽しみ』に佳代ちゃんも招
待した。ばあちゃんに佳代ちゃんを紹介したんだ。

天然な佳代ちゃんとはあちゃんの会話は、俺のいる次元とは異な
る所で行われているらしく、全く持って、理解不能だった。それ
で、楽しそうに会話する二人を見る時間は、スゲー幸せな思い出だ。
そのちよつと後だったかな。俺は、やっと進路を定めた。冬には、
二つの大学と三つの専門学校に、入試願書を提出した。

受験勉強をしながらも、結構デイトは出来たんだ。

俺と佳代ちゃんは、大体同じ割合でデイトに誘う。つまりは、半

分が佳代ちゃんが考えたコース。もう半分が俺主催デートコースって感じ。

でも偶然とは怖いもので、佳代ちゃんがデート先に選ぶのは、ホラー映画やお化け屋敷のあるアミューズメント施設ばかりだった。何故か、それを言う時の佳代ちゃん表情は色っぽいものだった。

だからデートの思い出の一部は、半分の半分の半分ぐらいは、あんまり覚えていない。佳代ちゃんに抱きついてた気がするけど、詳しくは思い出せなかった。

とまあ、そんな感じで、俺の高校生活は三年生だけ濃密なもので、それでも、楽しい高校生活だったと思う。

そして、高校を卒業した俺は色々あって……。
結局、佳代ちゃんと別れた。

四章 俺の物語は、ハッピーエンド

第一回総理大臣選挙の時は焦った。一時は途中開票の結果が二位にまで届くもんだもの。結局、選挙活動を中止した俺は、最終結果では、百位ぐらいで落ち着いたっけな。

一位は、やつぱりム力つくおっちゃん、金田だった。

改めて、彼の経歴を説明させてくれ。

三十五歳で証券会社を辞め、独立。スキマ産業とかニッチ産業とか言われる分野に、異なる専門的な分野に、次々と会社を立ち上げ、四十歳の時には納税ランキング上位入りを果たす。その三年後には納税ランキング一位を記録し、以降、二十五年間一位を独占する凄い男だ。

現実味の無い経歴の、創作物語の登場人物みたいな、とにかく凄い男だった。

彼が次々と会社を立ち上げることが出来た理由も凄い。彼は人を育てる方面でも才能を発揮した。会社を立ち上げるたびに、会社のほぼ全部を任せられる優秀な右腕を育てていった。

だけど、その才能が災いしたのか、総理大臣選挙に立候補した時つまりは、五十三歳の時には、部下から仕事を貰えず、時間を持て余しボランティア活動をしていたらしい。

そこがまた凄い。そのボランティア活動は、県の役人に無理やり作らせた仕事だった。

彼の人脈は総理大臣時代の活躍から推測するに、財界政界に幅広く深く持っている。ボランティア活動の件から見ても一県の役人にまで及ぶものらしい。

ここからは、俺の推測だけど、金田の人脈は、俺が住んでいたマンションの住人にまで及ぶ。

例えば、県立体育館で目撃した、俺と佳代ちゃんの初デートの逆プロポーズを、四〇一号室の佐藤さんに届けるほどまでに……。

金田は、県立体育館の受付のおっちゃんだった。

俺は総理大臣選挙で、名前だけ知っていた納税ランキング一位の男の名前と、顔だけは知っていた体育館のおっちゃんが、同一人物だと知ったんだ。

ちなみに、県の役人に人脈を持っていたのは、県立体育官の建て直しに関して多大な寄付をしたかららしい。『県立体育館が立派だった事』と『知事の悪行』には、何の因果関係もなかったみたいだ。そうそう。

部長と大川は、ある意味で学生結婚をした。部長はめでたく地元市役所に就職が決まったのだけど、大川が大学一年生の時に結婚したのだ。だから、半分、学生結婚だろ。

大川は高校を卒業した辺りから髪を伸ばし始めた。佳代ちゃんと料理の練習も頑張っていたらしく、化粧なんかに興味を持ち始め、どんどんボーイッシュな大川は消えていく事になり、大学を卒業した時には立派な女性だった。高身長の子が、結構見栄えは良かった。

それでも、鬼が消える事はなかったみたいだ。部長の話だと。

その部長はバドミントンを辞める事はなかった。

と言うか、いつまで経っても部長はバドミントン馬鹿だった。

大きな公式大会は、確かに高校で終わったのだけど、市民大会には毎年のように出場していた。更に、県立体育館で週三回のバドミントン教室を開くことになったんだ。しかも報酬を得ないボランティアらしい。少しは欲張れよ。

でも、それには理由があるらしくて、部長は「公務員的に報酬を得るわけにはいかない」とか言ってたけど、俺は確信を持って言えるね。そんなこと関係なく、部長はボランティアでバドミントン教室を開いただろうって。

バドミントン教室開設に至っては、金田のコネが少なからずあるだろうけど、このぐらいの事実は気づかなかった事にしよう。

そして、理論的な部長と鬼教官の大川は、良い具合に化学反応を

起こし、バドミントン教室は結構評判が良かったみたいだ。人知れずこっそりと毎年一人選ばれる栄誉県民に、二回も選ばれるくらいにな。

俺も何度もお邪魔させて頂くのだけど、大川がいない日に限ってだった。大川とは、プライベートでも会えるしな。犬にトラウマを持つ人は結構いるけど、俺には気持ちがわかるね。俺にとって、鬼教官は強いトラウマだった。

妹と鍵少年も上手くやっていた。

鍵少年の不良に憧れるスタイルは、大人になっても変わらなかった。鍵少年は出身大学に残り、研究を続けたのだが、その性格が災いしてか『万年助教授』だった。

いや、この言葉を作った人の感性はわからない。俺から見れば、助教授って凄いのにな。今はどうだって良いか。

それでも、鍵少年の実力は確かなものらしく、その分野では人気者だったみたいで、一年の半分ぐらいを海外での講演に費やしていた。

一方妹は、一年の半分をローテンションにプラスしてネガティブオーラを纏う迷惑な女だった。

さらに、残り半年をローテンションを忘れ去った、超ハイテンション女になった。本当に迷惑だった。

そして、俺は病室のベッドの上で、自分の心臓に呼応する電子音を聞きながら、最後の瞬間を迎えようとしている。

暖かい家族に見送られ、人生の幕を閉じようとしていた。

いや、俺のために駆けつけてくれたのは、家族だけじゃない。誰に似たのか、犬のようなおばさんや、爽やかなおじさんもいる。でも、その見送ってくれる家族たちの中に佳代ちゃんはいない。

俺なりに手を尽くしたけど、何も出来なかった。

佳代ちゃんとは二年前に別れてしまったんだ……。

何が変わった俺だよ！

俺には何の解決策も見出せなかった。

そして、家族と最後の会話をするため、力を振り絞り、酸素マスクをはずして、なんとか口を開く。

どうしても、こいつらに伝えたい。

俺の気持ちを届けたかった。

「俺の、九十七年間の人生は、なんか超幸せだったんですけど。みんな、ありがとうな！ だから、笑って見送ってくれよ！」

俺の言葉は、切れ切れで、音も小さく、言葉としての役割を果たしていたのかわからない。彼らに届いたのかは疑問だ。

それでも、涙まみれの笑顔たちを脳裏に焼きつけながら、俺は意識を失った。

次に目を覚ました時、佳代ちゃんが手を差し伸べてくれた。

「あなたらしい最後でしたね。さあ、行きましよう」

俺は「あなたらしいです」と「あなたらしくないですよ」の二言で、佳代ちゃんに操られる人生を送った。

なんか全速力っぽく駆け抜ける、充実した人生だった。

でも結果としては、そこには殆ど特別なイベントはない。

もちろん一人として『無理している俺』もいなくて、それでも、多数の『頑張っている俺』は存在していた。

普通の専門学校に進学し、何十万人もいる介護福祉士の一人になり、ついに佳代ちゃんと一般的な結婚式を挙げて、何処にでもいそうな新しい家族を作ったんだ。

俺にとってはかけがえの無い思い出たちに彩られた人生であつても、人と比べて驚かれるような『特別』は殆ど無い人生だった。だけど、もう一度言わせてくれ。

「佳代ちゃん。俺、すげー幸せだったよ」

「私もですよ。あなた」

目の前のおばあさんの、しわしわの顔に更にしわを刻む笑顔は、優しに溢れていた。

曲がった背中では百七十センチ程の高身長を小さく見せながらも、凛とした力強さを感じる。

白いロングヘアーの彼女は、この世でもあの世でも一番美しいに違いない。

何より、彼女の存在は俺の人生の中で数少ない『特別』だ。『第一次総理大臣選挙に出馬した四百二十九人の一人』なんて稀有な経験が霞んでしまう位の、俺の人生で一際輝く『特別』の中の『特別』であり……。

やっぱり大和撫子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795s/>

変な人ですね　～そいつは、俺じゃない！～

2011年6月4日21時11分発行